

聡明鬼

1

葵むらさき

CHARACTERS

リューシュン

若くして人間の土地を治める鬼・土地爺。通称聡明鬼。
死んだ人間の鬼魂を体の中に取り込み、上天へ上げてやるという能力を持つ。

リンケイ

若き陰陽師。
聡明鬼とは偶然に知り合い、口論しながらも「変な鬼」として興味を持つ。

閻羅王

生死簿を管理し、人間の住む陽世と鬼の棲む陰曹地府を統べる存在。
聡明鬼に敵意を持つ。

牛頭・馬頭

閻羅王に仕える従者。
力は強いが頭脳は単純。

玉帝

上天を統べる存在。
リューシュンに特殊な能力を与えた。

狐

死後精霊となったもの。
人間に崇ろうとし、聡明鬼と陰陽師を引き合わせるきっかけとなる。

コントク

年配の土地爺。人間に親しく、陽世について学ぶことを厭わぬ勤勉な鬼。

ジライ

降妖師。悪鬼を退治することを生業とする。 コントクと義兄弟の仲。

小間使いの少年

コントクの邸で働く少年。
聡明鬼と陰陽師に、主人の救済を依頼する。

鼬

精霊。
リューシュンたちにより、コントクを救うため使われる。

リョーマ

リンケイに仕える龍馬。
普段は仔犬の姿をしている。

無常鬼

その姿を見た者は死ぬと恐れられている悪鬼。

テンニ

降妖師。

ムイという薬の中毒に罹っている。

スンキ

リューシュンの邸で使用人たちをまとめる役割をしている。

手厳しいことも言うが、リューシュンに対する忠誠心と信頼は厚い。

キオウ

模糊鬼。

地獄で生まれ、閻羅王に怨みを抱いている。

フラ

キオウに仕える龍馬。

普段は毛並美しい黒犬の姿をしている。

1 スメル・オブ・デッド

ざああああ

怪しげな風、とでもいうのだろうか。

どこか真っすぐには吹いていない感じのする、やや強めの風だ。

時折顔の真正面からいきなり吹きつけてきて、目をしばたたかせる。

そうかと思うと忘れた頃、こんどは顔の真横からきて耳の穴の中に生温い大気を大量にいちどきに流れ込ませようとしてくる。

そうしておいて、まるで鬼の首でも取ったかのように、風は楽しげに鳴くのだ。

そんな中を、土地爺（とちや）たちは背を丸め三々五々進んでいた。

ここは陰陽界、人間の住む陽世と、魔のものの住む陰府との境にある道だ。

彼らが目指しているのは閻羅王の住処、森羅殿だ。

月が満ちるこの晩、彼らはいつものように金銀の供物をたずさえ、苔や枯草をふみしめながら宴に向かわねばならなかった。

閻羅王に逆らうことはできない。

地獄を統べる、それが法であった。

ざああああ

また、風が鳴く。

土地爺たちはそれぞれが陽世において小さな土地を統べており、人間からはそれぞれが「神」または「鬼」と呼ばれていた。

その「神鬼」を束ねているのが、閻羅王——否、それは必ずしも正しい説明ではない。

閻羅王、彼は、かの王はすべてを統括している。

地獄の、すべてを。

人の生き死にの、すべてを。

土地爺の生き死にの、すべてを。

彼が関わりを持たないのは、玉帝のいます上天という世界だけだ。

森羅殿が見えて来た。

望月の煌々たる明りの下に、生きとし生けるすべての死を受けもっているその不気味な威容を暗く浮かび上がらせている。

心なしか、ゆっくりと肩を上下させ呼吸してでもいるかのように見えるのだ。

その殿内にはさらに下層階の地獄が存在していて、その数八層とも十層とも十八層ともいわれている。

陽間、つまり人の世にて罪悪をなした者たちが煮られ、焼かれ、切られ、刺されるところだ。

殿内に通された土地爺たちは判官に、携えてきた貢物を渡し帳簿へ記してもらった。

閻羅王に直接手渡した方が名と顔を覚えてもらいやすく、うまく取り入れることができれば今後の彼らの生活も安泰というものではあるのだが、なかなかそれはかなわぬことであった。

閻羅王はいまだ姿を見せておらず、供物を携えてやってくる土地爺は殿内にすでにあふれんばかりとなっている。

そうかといって、この賑わいが閻羅王の人望の厚さを物語っているというわけでも決してない。

土地爺たちは内心、閻羅王を慕ってもいなければ、尊崇してもいないのだった。

それどころか逆に、これほど煙たい存在はないと皆思っている。

只たれも閻羅王に逆らうことはかなわず、不満を胸に抱きつつもこうして望月の夜になると精々人々から奪い取った財宝をかきいだいて陰間へ——この地獄へと足を運ぶのだ。

だがそんな土地爺の中に唯一、貢物も持たなければ閻羅王にまったくおもねることも媚びることも、それどころかすぐ隣にいてさえ挨拶すらしないという剛毅の鬼がいることは誰もがあからさまに語るわけでもないのだが、よく知られていた。

その鬼が今、閻殿の入り口に立った。

皆がつい、そちらを見やる。

年は、定かではなかったがそう年寄りでもなさそうだ。

髪は黒く蓬髪で、浅黒い肌は張り詰めており、筋骨のたくましさが見てとれる。

目は碧、底無しかと思わせるほどに澄んでおり、とても鬼の持つ目とは思えない。

今日も今日とて、閻羅王に阿諛追従（あゆついしょう）など一切しないつもりであることが一目で見てとれる、不敵な笑みをその碧眼にきらきらとたたえていた。

鬼の名は、リューシュン。

通称を「聡明鬼」といった。

その名の通り、涼やかな思考に長けた鬼だ。

若干直情的ではあるが、ものごとのしくみ、本質を見抜く素早さは他の追隨を許さない。

それだからこそ、閻羅王に対して好きに振舞っていても無事でいられるのだ。

「腹が減ったな。飯はまだか」リューシュンは近くにいた判官を捕まえて訊いた。

地獄の役人に対しても、彼の取る態度は大体一緒だった。

「まだ閻羅王様がお見えになっていないことに、お前は気づいているのか」判官は嘆息して答えた。「まずは閻羅王様の御言葉をいただいて、それから宴が始まるというのがしきたりだろうが」

「じゃあ閻羅王にさっさと来るよう言って来い」リューシュンは判官の肩を片手で掴み、有無を言わず向きを変えて前に押しやった。

判官はよろめいて、ちらりと振り向き睨んだが、相手がリューシュンだと無論知っているのも何も口答えすることなく去って行った。

ほどなくして、広間のざわめきは一層高まった。

閻羅王が姿を現したのだ。

皆こぞって近づき、個別に挨拶を述べる。

だが閻羅王はそのどれにも答えるどころか、一瞥さえもくれぬまま玉座についた。

いつにも増して、機嫌が悪いようだ。

「閻羅王さまは何かお気に召さぬことがおありなのだろうか」

「やはりあの聡明鬼のことか」

「しかしあ奴については、いつものことであろう」

「今回特に何がしか事を起こしたというわけでもなかろう」

「では他のことか？」

土地爺たちは挨拶をあきらめる代わりに、ひそひそと互いに閻羅王の腹の中について推測を立てた。

「あれを貸せ」閻羅王は玉座の上からじろりと広間内を睥睨しつつ、傍らの牛頭に向け手を出した。

「――」牛頭は一瞬眸をさ迷わせ、相方の馬頭をちらりと見た。

「――」相方もまた眸をきよときよとさ迷わせる。

「生死簿じゃ」閻羅王はいつもと同じ声で教えたが、その目は十八層地獄の色をたたえていた。

「剣の山に這いつくばりたいか」

牛頭は全速力で閻羅王に自分の携えている地獄の帳簿を差し出した。

閻羅王はひったくると、目をぎらぎらさせながらそれをめくった。

しばらくめくりつづけるうち、閻羅王の右の脛が傍から見ても明らかにわかるほどびくびくと震えはじめた。

閻羅王は玉座を蹴散らすかというほど乱暴に立ち上がり、怒声を張り上げた。

「また減っておる」

一瞬にしてしん、と殿内は水を打ったように静まりかえった。

「腹がか？」一人だけ、そう返した者がいた。

振り向かずとも、それが誰であるか皆知っていた。

無論リュージュンだ。

「腹ではないわ」閻羅王はこめかみから血を吹くかと思うほど激怒して喚き散らした。

「では何がだ」リュージュンが訊く。

「鬼魂がじゃ」閻羅王は真っ赤に燃える目でリュージュンをまっすぐ睨みつけた。

鬼魂というのは、死んで地獄にやってくる人間の靈魂のことだ。

「貴様」閻羅王は奥歯をぎりぎりとしめながらリュージュンに問うた。「何か知っておろう。貴様の仕業か」

「さあ」リュージュンは軽く肩を持ち上げて短く答えた。「それより俺は腹が減ってる。飯をよこせ。酒も」

「三年前からずっとこの有様だ」閻羅王も負けずに自分の言いたいことだけを怒鳴った。「一体何が原因でこのようなことになっておるのか。今日こそ暴いてやるぞ」

「勝手にすればいい」リュージュンは面倒臭そうに眉をひそめた。「飯が出ねえんなら、帰るぞ」くるりと閻羅王に背を向ける。

「ただ今準備をさせております」小間使いの小鬼が慌てて引き止める。「しばらくお待ちください」

「生死簿に記される鬼魂の数そのものが減り続けておる」閻羅王は宴のことなど意にも介さず怒鳴り続けた。「これがどういうことであるのか、貴様たちは解っているか。理解しておるのか。どいつもこいつも府抜けた面を並べおって」

「それはつまり」土地爺の一人が勇敢にも閻羅王に向かって答えた。「死ぬ人間の数が、このところ減ってきている、ということではありませんまいか」

「違うわ」答えを聞いた閻羅王はますますいきり立った。「死人の数は減っておらん」

「そ、それでは」別の土地爺が慌てて言葉を継いだ。「もしかして、悪事を働き地獄へ落ちるべき人間が減った、ということでござりましょうか。世の中善人ばかりになったと」

「……」閻羅王はここで初めて口を閉ざした。

土地爺たちはほっと安心するどころか、ますます不安を掻き立てられた。

もしかして次には、この殿内にいる全員が十八層地獄へ、奈落の底へたたき落とされてしまうのではないか。

「大変お待たせしました」小鬼がリュージュンのもとへ、やっと酒の瓶と杯を持って来た。

「おう、待ちかねたぞ」リュージュンはぱっと子どものような笑顔になり、もはや閻羅王の存在になど目もくれず、早速ぐびぐびと酒をあおりはじめた。

「悪事を働く人間が減った、だと」閻羅王は妙に静かな声で復唱した。「地獄へ来るべき人間が、そんなに陽世からいちどきにいなくなるものだと思うか？ え、お前たち、本当にそんなことを考えているのか？」

「そ、それは」

「そう言われれば、確かに」

「きょうでござりますな」

「人間というものはそもそも悪しき心を持つようにできているものです」

土地爺たちはいよいよ腋の下に大量に汗を掻いた。

「それがな、違うのだ」閻羅王はしかし、もう一度生死簿を見下ろしぱらぱらとめくった。「確かにここには、死してここ地獄へやって来るはずの鬼魂の名前がずらりと、一度は大量に記されるのだ。しかししばらく時間が経つと、一度帳簿に載ったはずの名前がなぜか、きれいに消えておるのだ」

「えっ」

「そんな」

「まさか」

「それは、一体どういう」

土地爺たちは混乱した。

彼らにおいてはとてもぐびぐび酒を呑んだりがつがつ料理に喰らいついたりなどしている場合ではなかった。

その分リュージュンは独り、宴のご馳走に片端から好き放題手をつけてゆき、ご機嫌この上ない顔になっていった。

「儂は思うのだ」閻羅王は、そんなリュージュンの赤い顔をじいっと目で追いつつ、相変わらず妙に落ち着いた声音で続けた。「誰かが、生死簿の名前を消していつておるのではないかと」

「ええっ」

「一体、誰が」

「そんな、まさか」

「そんなこと、できるわけが」

土地爺たちはおろおろと互いに顔を見合わせ困惑の極みに立たされた。

真にそれは、今閻羅王の口から出たその推測は、突拍子もない、誰もとても思いつきはしないものだった。

「儂にも解らん」閻羅王はくぐもった声で言った。「だが生死簿から名前の消えた者はどうなったか。それは恐らく、極楽浄土に召されて成仏したのだろうと儂は思う」

しん、と殿内は静かになった。

たれも声を挙げることにできずにいた。

「そんな、まさか」と言ってすむような問題ではなかったのだ。

今の閻羅王の言葉を聞いた者すべてが、腹の底から恐ろしく暗い感情が湧き上がってくるのを押しえられずにいた。

否、ただ一人を除いて。

リューシユンだけは別だった。

彼はすっかり満腹になり、腹をさすりながら森羅殿の出口へと向かった。

「ごちそうさん。そんじゃな」閻羅王に背を向けたまま、片手を軽く差し上げる。

「待て」閻羅王は怒鳴った。「貴様なのか。貴様が生死簿に細工を施しおったのか、聡明鬼」

リューシユンは立ち止まり、呑気な顔を振り向けた。

「どうして俺が生死簿に触れることなどできる？」

「く——」閻羅王は答えられなかった。

確かにそうだ。

生死簿は閻羅王の側近である牛頭馬頭や判官が管理している。

間違っても一介の土地爺である聡明鬼になど触らせるはずがない。

だが閻羅王は確かに、その帳簿に一旦は記されていた死人の名前が消えているのを自分の目で確かめたのだ。

しかと確かめたのはつい最近のことなのだが、恐らくその現象は三年前から起きていたのに違いない。

「んじゃな」リューシユンはもう一度手を挙げ門の外へと姿を消した。



ざああああ

陰陽界から陽世に出た後もなお、風が吹きすさんでいた。
風の息というが、息継ぎをする暇もなく吹いている。
リュージュンはその風に打たれてしばらく歩いた。やがて、

“匂い”が、来た。

——うっす。

心の中で、そっとあいさつを呟く。
返事はない。

“こいつ”は、今まで陽世を——自分の遺骸の周囲を徘徊していて、鬼差の迎えが来るのを待っているところだったのだろう。

そして“そいつ”はリュージュンに気づき、入ってきた。

リュージュンの、中に。

死霊が体の中に入ってくる。
泣きながら。
震えながら。
助けて……
そんな、囁きのようにか細い声で、訴えかけながら。

助けて……

リュージュンの中に完全に入り込んだ死霊は、やがてゆっくりと瞳を閉じる。
彼の中から——男だった、三十歳くらいの——じわじわと白いもやのようなものがにじみ出てきて、リュージュンの内部をゆっくりと満たし始める。

“匂い”が、次第に強まっていく。

“死の匂い”だ。

彼の頬を濡らしていた涙はやがて乾き、彼の蒼白に震えていた表情は、次第にやわらかく穏や

かなものへと変化してゆく。

助けて、と繰り返されていた囁きも、次第に遠く、小さく消えてゆくのだ。

そうして彼はリュージュンに、投げた。

彼が抱えてきた、悲哀と苦痛のすべてを。

寂しい、刑場と見られる場所だった。

たくさんの命がそこで消えたらしく、息も吸い難いほど大気の濁っていることが見てとれた。

そこから、彼は逃げてきたのだ、リュージュンの中へ。

それが、彼が見た最期の景色だったのだ。

彼はそこで、壮絶な最期を遂げたようだった。

虫けらのように、そこで彼の命は終了させられたのだ。

彼を殺した者達は、まだこの世に生きているようだった。

普通に、何事もなかった顔をして。

誰にでも親切な、人当たりの好い、信頼され慕われる人物として。

そんな男どもに、彼はその場所で、抗うこともできず殺された。

誰にも、助けを求めることは許されなかった。

言葉ではなく、彼の投げたものに、すべてが詰まっていた。

それはリュージュンにぶつかり、はじけ、彼の全身に付着し、そして彼の中に浸入していった

。

その結果、こんどはリュージュンの目から涙がほとぼしり出始めた。

息が苦しい。

頬が、唇が、喉が震える。

嗚咽がこみ上げ、こみ上げ、か細い悲鳴が喉の奥から勝手に洩れる。

リュージュンは立ってられず、地面にがくりと膝を突きうずくまった。

「貴様のような外道などさっさと地獄に堕ちてしまえ」

「すべて貴様のしでかしたことだ」

「どう取り繕おうとも無駄だ。貴様の罪は償って消えるものではない」

「この罪人め」

怒号とともに、肋の下から鋭い刃が突き刺された。

「ぐふッ」リューシユンは見えない刃の痛みに襲われ、体を硬直させた。

次々に、体のあちこちから刃が突かれてくる。

そんな風に、この男は殺されたのだ。

いわれなき罪を着せられて、男は体中を串刺しにされた。

「うぐあああッ、あううッ」リューシユンは逃げる術もなく襲い続ける激痛に、ただ地面を転げ回るだけだった。

痛みの中で、殺された男の心のさらなる奥底に眠る“声”が、はじめは小さい囁きとして、そして次第にはっきりとした眩きとして、最後には悲痛な叫びとして、聞えてきた。

「私は私に期待を寄せてくれていた人達に応えることができなかった。私には功を成し遂げる力も不足していたし、徳なども備えてはいない。本当に、だめな男なのだ。こんな私は、地獄に行くほかあるまい」

男の思考の中に、十六から十八歳辺りと見られる少年たちの姿が並んで見えた。

この少年達に、男は学問や武術を教えていたらしかった。

「私を慕ってくれた徒弟たちの、あの希望に輝いていた瞳を思い出すのが辛い。私などいなければ、彼らを道に迷わせることなどなかっただろうに」

だが男の教える思想は国政に反旗を翻すものであるという、誤解によるいわれなき非難が起こり、男は追われる身となったのだ。

「自分が、虫けらのように思える。何の価値もない——誰からも必要とされていない——無価値の——何の必要もない——無意義の——どうでもいい、どっちでもいい人間——いてもいなくても——全然かまわない——」

ああ。

リューシユンは地べたに這いつくばったまま目を閉じ、理解した。

この男は、逃げながらこういう想いに囚われていったのだ。

自分のことを、こんな風に想うようになったのだ。

無価値で、生きている意味のない、この世のすべてから見放され蔑まれごみ屑として扱われるにふさわしい存在なのだ。

彼は疲れ果て、闘うことも諦めてしまい、もうどうでもよくなっていたのだ。

そこへ追っ手が来て捕まり、衆目の見守る中串刺しの刑に処せられたのだ。

彼が教えていた少年達も、観衆の中にいたのだろう。

汚れたものを見るような目で、かつての師の最期を彼らは見届けたのだ。

その目に気づいた時、男の心には二つの強い想いが爆裂した。

「死にたい」

「逃げたい」

リュージュンは――男から“それ”を投げられたリュージュンは、彼の身代りとなって修羅の世の
かなしみとくるしみを一身に味わった。

死にたい、と思う、逃げたい、と願う、しかしリュージュンにはどうすることもできない、ただこの場で、その場であがきのたうち回るしかすべはなかった。

「うぐ、がああ……ううおおお」

涙を流しながら言葉にもならぬ呻きをくり返す、どろどろのリュージュンの中で、彼はすべての呪縛から解き放たれ始めた。

蒼白だった顔に、ほのかな桃の色、それから薔薇の色が灯される。

歓喜の表情が、やがて彼の上に現れる。

リュージュンのかなしみとくるしみは、明け方近くまで続いた。

彼の中の“彼”は、一刻ごとに歓喜の色を増していき、遂には仏のように静寂で穏やかな境地に辿りつき、そして――

あとかたもなく、きえうせた。

同時にリュージュンのかなしみとくるしみも、夢であったかのように消えてなくなった。



チュンチュン、ピピピ

小鳥の鳴く声が遠くから聞える。

リューシユンは眠りから目覚めた。

刑場の地の上に、そのまま大の字になって眠りこけていたのだ。

彼は大きな欠伸をしながら身を起こした。

暁が空を染め始めている。

リューシユンはしばらく地べたに座ったままその色を眺めた。

——あの日見たのと同じ色だ……いや、あの日の空はもっと金剛に近い色をしていたか。

リューシユンは過去のことを思い出していた。

三年前。

上天にいます玉帝が、突然リューシユンの前に現れたのだった。

玉帝は何も言わぬまま、リューシユンに指を触れ“何か”を注ぎ込んだ。

リューシユンは身動きも取れず、なすがままにされていた。

しかしそれはこの上なく暖かい、夢でも見ているかのような心地好さに包まれた至福の時だった。

リューシユンも何も言わず——言いたくても何も言えなかった——玉帝が彼の中に“それ”をすべて注ぎ込み終えるまで待っていた。

やがてことが終わると玉帝は、来た時と同様突然に姿を消し、辺りは普段通りの景色と色に一瞬にして戻った。

リューシユンはあまりのことに首を振るばかりだったが、明らかに自分が変わっていることを知っていた。

それまでの、ただの土地爺とは違う自分になっていたのだ。

鬼魂の“匂い”を体に受ける力。

それが、あの日リューシユンに与えられた「能力」だった。

「取り柄」とでも言えるものか？

「特技」か？

どっちでも、いい。

鬼魂の匂いを体に受ける力——それが、玉帝があの日リューシユンに与え給うたものだ。

——玉帝は、俺を試しているのか？

リューシユンは暁を眺めながら、そんなことを想った。

この、陽世および陰府という生きにくい世界で、一介の土地爺という哀れな存在がどれだけ苦しみのたうちながら過ごしていくものかを、遠い上天で物珍しそうに御覧になっているのかも知れない。

――ははは。

リューシユンは頭上の空に向かって歯を見せた。

――生憎だな。俺は、笑って生きてやる。

空を見たまま、立ち上がる。

――俺はリューシユン、聡明鬼だ。

2 名あり

森羅殿にて、閻羅王は酒を飲みながら一人考え事をしていた。

手には相変わらず謎を提供する生死簿がある。

ただ眺めているだけでは、原因の究明にも解決の方法にも結びつかないことはわかっているのだが、それでも閻羅王はそれを手放せなかった。

リューションが、あの聡明鬼が何かしでかした事に間違いはないと思う。

しかし、証拠がない。

あの忌々しい若鬼がほざいた通り、この生死簿に触れることができるのは自分と自分の側近のみだ。

では、どうやって――

閻羅王の頭の中に、ひとつの名が浮かぶ。

玉帝。

そしてすぐに彼は消す。

まさか。

なんで玉帝が、一介の土地爺にかかざらわる？

そんなこと、あるわけがない。

しかし――

閻羅王には、当然のことながら玉帝が何を考えているのか――何をしているのか、何かしているとすればその目的は何かなど、一切分からないことだった。

ただ、当然のことながら陽世に放つ鬼差や、自分に取り入ろうとする土地爺を利用し、上天の様子や玉帝の動きなどを探らせ逐一報告させてはいた。

それによると、玉帝は陽世の状況を見るにつけこのところ深く考え込むことが多いという。

具体的に、何が問題であるとか、何が怪しからんというような言葉はない。

だが明らかに、玉帝は現状の人間界をよくは思っていない様子だというのだ。

それが、そのことがきつと何か関係しているはずだと閻羅王には思えてならなかった。

しかし、それで納得がいくというわけでもない。

何故かという、人間たちの現状がよくないというのは、今に始まったことではないからだ。

もちろん玉帝にしても、昨日今日で玉帝の座についたわけではない。

太古の昔から、人間というものがこの世に生まれてからこっち、人間たちの住む世界が玉帝から見ても閻羅王から見ても嘆かわしいものであるというのは、息を吸って吐くのと同様まったく

当たり前が続いていることなのだ。

それをどうして玉帝は、ここにきていきなりそれに手を出そうなどと思ったのだろうか？

聡明鬼を使ってまで。

突如として済度を行う気になったのか？

けれど済度というのであれば、今のように死人の一部だけを上天に引っ張り上げるのではなく、死人のすべてが地獄から救い出されるはずだ。

こんな中途半端な形での済度はあり得ない。

やはり、聡明鬼をひっ捕らえて吐かせるしかない。

閻羅王は苦虫を噛み潰したような顔でそう思った。

そう、思わざるを得なかった。

聡明鬼を――なんとかせねば。

思えば思うほどに苛々が募り、閻羅王は思わず手に持っていた生死簿を頭上高く振り上げた。

だがそれを足元に叩き付けることを、どうにか耐えて腕を下ろした。

杯に残った酒を乱暴に呷る。

小癩な、若造が。

閻羅王は獣のように唸った。

「馬頭」配下のものを呼ぶ。

でかい体に馬の頭を乗つけた妖魔が、すぐさま走り来た。「は、お呼びでございますか閻羅王様」玉座の隣にひざまずく。

「貴様に問う。土地爺の中で、今もつとも頭の切れる者はたれか」

「は。それは聡明鬼かと思われませう」

「いや、違う。聡明鬼を除いた残りの土地爺の中で、一番に頭のいい奴はたれか」

「は。それは」馬頭はそこで息を止めた。

閻羅王は待った。

馬頭は止まったままだ。

閻羅王の左手の指がぴく、ぴくと動き、玉座の手摺をトントントントと叩き始めた。

馬頭は止まったままだった。

閻羅王は右手で杯を取り上げた、がその中身が空っぽであることを知り、それを卓上に置こうとした。

カシャーン

杯はつるりと滑って宙を飛び、床に叩き付けられて砕けた。

「貴様は阿呆なのか」閻羅王は馬頭に向かって炎を吐くがごとく怒声を吐いた。「わからぬならすぐに調べますとか聞いて参りますとか、あと適当に知っている土地爺の名を口にしておくとか、そういった事を何ひとつ思いつかぬのか貴様は。阿呆なのか貴様は」

馬頭は怯えた馬の目をひたと閻羅王に向け、ぜいぜいと激しく息を弾ませた。

どうやら本当に息を止めていたようだ。

「申し訳ありません、閻羅王様、どうかお怒りをお鎮めください」

「わしが知りたいのは聡明鬼の次に頭のいい土地爺が誰かということじゃ」

「それならば私めの知っている限りでは、コントクではないかと」今にも泣き崩れそうな馬頭に代わって、いつの間に来ていたのか牛頭が答えた。「齢五十を過ぎていながらいまだ書物をよく読み人の話をよく聞き物事をよく理解し、先を読む力も優れております」

「ほう」閻羅王は牛頭の方に向けた目をきらりと光らせた。「その者をただちにここへ連れて来い」

「は」牛頭はただちに馬頭の腕を掴んで共に陽世へと向かった。



草原を歩く。

どこまでも続く、大きな野原だ。

まだ風は冷たいのに、気の早い小花がちらほらと可憐な色を見せている。

草は濡れ、足先に触れれば血を止めるほど冷たいが、委細構わずリューシユンはどんどん歩いた。

彼はそんな散歩が好きだった。

土地爺である以上は、常に彼の治める地の人間どもの所業を見張っておくべきところなのだが、今ここにこうしている通り、人など一人として住まわぬ森や草原、海原や山の中の方が、歩いていて気持ちがいいのだ。

それに、そういったところを歩いている方が、巡り会いやすい。

ふん、とリューシユンは鼻を鳴らした。

――いい、匂いだ。

最初に、そう思った。

いい匂い。

死の匂いだ。

死の匂いにもいろいろ種類があり、今のように花のような甘い匂いは、重い病で逝った鬼魂が放つものであった。

リュージュンは立ち止まり、辺りを見回した。

どこにいる？

きよろきよろと探す。

す、とその瞬間、死人は中に入ってきた。

リュージュンは叢（くさむら）の上で棒立ちになり、少しばかり空を仰いで目を閉じた。

不治の病のため家族に見放され、この叢に生きてまま捨てられたらしい、四十くらいの男だった。

彼を悩ませた体の痛みと疼きと苦しさが、リュージュンの全身に投げられた。

リュージュンは眉をしかめ、はあはあと息を喘がせた。

「自分の辿ってきた道を振り返り、自分の残してきた足跡を眺めてみると、そいつは何だか妙に引き攣れて、捻じ曲がっているように見えるのさ」男は、痛み苦しみをリュージュンに投げたおかげで平坦な表情に戻り、淡々と過去の想いを語った。「まるで何かに取りつかれて絶えず苦痛を受けて阿鼻叫喚を挙げ続け、訴えているようだ。私は自分の中にあるそんな悲壮な声に耳を貸さず、無視し続け、代わりに足跡にしてずっと捨て続けてきたのだろう」

「うう、くくツ……」歯を食いしばって苦痛に耐えながらリュージュンは、

――ふうん。

と、思っていた。

なるほど、そんな風に自分の来し方を見ているわけか。

けどその引き攣れた足跡てのは、もしかすると自分で捻じ曲げたのではなくて、お前の家族によって捻じ曲げられていたのかも知れないな。

だってお前は死んだ今まで、それに気づかなかったんだろう？

あるいは気づいていても気づかない振りをしていたか。

だからこそ、家族はお前に失望して、お前を見限って、ここに棄てて行ったんだ。

もっと、生きてる内に振り返って気づいて直す努力を見せてやっていけばな。

そうすりゃ家族もきっと――

まあ、どっちだっていいや。

リュージュンはひとしきり苦痛に喘ぎ、男は静かなる顔にほんのり血の色を通わせ、つまりそれが生きているならば健康この上ない人間であるといえるほどの血色のよさを湛えてから、天に昇っていった。

リュージュンは叢の上にぐったりと倒れ、しばらく横たわっていなければならなかった。

どれ程の刻が経ただろう。

仰向けになり、まだ日の高い空をぼんやり眺めていたリュージュンの視界の中に、前触れもなくいきなり皺だらけの老婆の顔がぬうっと現れた。

「うわッ」リュージュンは寝転がったまま仰天し声を挙げた。

老婆は一瞬目を合わせたが、すぐに忌々しげな顔になって、リュージュンの上をずぎぎ、と飛び過ぎて行き消えた。

リュージュンは突然のことに動悸を高ぶらせ、少しの間起き上がれずにいた。

――なんだ、今の婆は？ 鬼魂か？

リュージュンはどきどきしながら思った。

だが、その婆からは死の匂いがしなかった。

――生きてる人間か――それにしても……随分な年寄りだったなあ。

リュージュンはやっと上体を起こした。

――齢八十を下ってはいなかったな。妖怪みたいだった。

ふう、とため息をつき、やっと立ち上がる。

「聡明鬼か」

ふと声がした。

振り向くと、リュージュンと同じ年ぐらいの男が叢に立っている。

その出で立ちを見て、その男が何者かすぐに判明した。

といっても知った顔ではない。

が、その男の生業についてはよく知っていた。

「陰陽師か」リューシュンは訊いた。

「そうだ」男は答えた。

その男、名をリンケイといった。

背丈はリューシュンとそう変わらないが、リューシュンに比べると華奢にできていた。

切れ長の眸からは鋭く研ぎ澄まされた智と溢れる泉のごとき徳を伺い知ることができるが、その頭脳の明晰さを競わせたとき、リューシュンとどちらが上に立つものなのかすぐには判じかねるところだ。

「聡明鬼、お前にもひとつ問う」リンケイは答えた後訊いた。

「俺には名がある」リューシュンは言い返した。「俺の名は」

「言うな。お前の名など呼ばん」

「なぜだ」

「名を呼ぶと、つながるからな」

「ふうん」

「だからお前も決して俺の名を呼ぶな」

「誰が呼ぶか」リューシュンはそっぽを向いた。「それで訊きたいことは何だ」

「今この辺に十八ぐらいの娘が通りかからなんだか」リンケイは首を巡らせて辺りをぐるりと見た。

「十八ぐらいの？」リューシュンは眉をしかめた。「いいや。八十ぐらいの婆なら、通りかかった……というよりも漂って行ったが」

「八十ぐらいの？」今度はリンケイが眉をしかめた。「おかしいな。俺は今日ここに来てくれと、十八ぐらいの娘に文を渡されてやって来たのだが」

「知ってる娘か」

「知らん。向こうは俺を知ってるらしい」リンケイは首を傾げた。

「見初められたか」リューシュンはリンケイの真似をして目を細めながら意地悪げに問うた。

「そうだな」リンケイは軽く頷き淡々と答える。

「あのな、陰陽師」リューシュンは腕を組み、リンケイをまじまじと眺めた。「お前本当は、八十の婆に会いに来たのだろう」

「なぜだ」

「なぜなら八十の婆しか、ここには来なかったからだ」

「しかし文を持ってきたのは十八の娘だったぞ。正しくはその従者で、娘は籠の中からほんのわずか姿を見せただけだったが」

「そんなわずかの間で、十八の娘だとわかるのか」

「わかる」

「それはきっと、お前の欲が見せた幻だろう」

「それは違うな」

「いや違わん。お前のところに文を持ってきたのは八十の婆だ。正しくは八十の婆の従者で、八十の婆は籠の中からほんのわずか姿を見せただけだったんだ」

「あのな、聡明鬼」リンケイは腕を組み、リュージュンをまじまじと眺めた。「お前本当は、八十の婆を見初めたのだろう」

「ー」ついにリュージュンの側が詰まった。

「あ」しかしすぐにリンケイは腕を解き、リュージュンの肩越し遠くに目を移した。「あの娘だ」

「ん」リュージュンが振り向くと、遙か彼方にさきほど彼の上を飛び過ぎて行った妖怪のような婆がいた。

「あそこに、十八ほどの娘の姿が見えるだろう」リンケイは腕を伸ばして指さした。

リュージュンはその指のさす方向と、指そのものを何度も繰り返し検分した。

だがその目にはついぞ十八の娘の姿など一切映らず、ただ指さす方向に間違いなく八十の婆だけが存在していた。

「見ろ。十八の娘だろう」リンケイが勝ち誇ったようにリュージュンに告げる。

「いや。あれは八十の婆だ」リュージュンは告げ返したが、とても勝ち誇った声でそうする気になれなかった。「どういうことだ。お前にはあれが、十八の娘に見えるのか」

「お前には見えないのか」リンケイが指を下ろし、二人は顔を見合わせ、いつとき言葉もなく見詰め合った。

「ー見えん」やがてリュージュンがぽつりと言った。

つまり“それ”は、リンケイには十八の娘に見え、リュージュンには八十の老婆に見えているということなのだ。

「本当か」

「ああ。俺には皺くちやの婆に見える」

「そうか」

「よかったな。好かれて」リュージュンは歯を見せて笑った。

「ううん……まあ人に好かれるというのはよいことだからな……否、人ではないということか、ならば、ううん……」リンケイは俯いてぶつぶつ呟いていたが、ふとリュージュンを見た。「聡明鬼」

「なんだ」

「お前に問おう。俺はどうしたらいいか」

「答えてやろう。知るか」リュージュンは舌を出した。

「なぜだ。お前は聡明ではないということか」

「違うわ。俺の預かり知ったことではないからだ」

「なぜだ。答えろ。さもなくば名を呼ぶぞ」

「なぜだは俺の言うことだ。なぜ名を呼ぶ」

「俺の従者にしてやる。牛頭馬頭のようにな」

「誰がなるか。牛頭馬頭と一緒にするな」

「試しに呼んでみようか」

「呼ぶな。名が腐る」

二人はお互いの顔だけを見合っただけで言い争ったが、それは遠くにいる“それ”から意識を遠ざけできれば何事もなくやり過ごして“それ”が立ち去ることを祈念する為の言い争いだったかも知れない。

だが二人はそうしている間に“それ”が風を切って近づいて来ることさえ見ようとしなかった、故に“それ”が近くに来たことに気づかなかった。

「お殿様は一体何を騒いでいらっしゃるのですか？」少女の声がリンケイに問い、

「この馬鹿者が、きいきいうるさいわ。黙れ黙れ」老婆がリュージュンに怒鳴った。

「来た」リュージュンとリンケイは声を揃えて固まった。

「お殿様、もうすぐ日が暮れてしまいます。夕餉の支度もできている頃でしょう、ぜひうちに来て泊まっていてください」可憐な少女がはにかみながらリンケイに言い、

「貴様はとっとと薄汚い崩れかけの小屋に帰って泥でも食らって死んだように寝ろ。その馬鹿頭の骨に穴を開けて中の腐った脳みそを掻き出される前にな」上から下まですべからく皺でできている婆がリュージュンに吼えた。

「お前、なんでそんな風に俺と陰陽師に違う姿を見せているんだ？」リュージュンが顔をしかめながら訊いた。

傍らのリンケイは、ごくかすかに頷く。

「ああ陰陽師様、この汚らわしい鬼がわたくしに妙なことを言って戸惑わせます。どうか今すぐにこの忌まわしきものを追い払ってくださいまし」十八の娘が涙ぐみながらリンケイに訴え、

「やかましいわ、この下っ端ごろつき鬼が。貴様がわしにもものを問うなど天が地になろうとも許せることではないわ。とっとと劫火に吞まれて全身爛れきってしまえ」八十の婆が猛り狂った顔でリュージュンに凄んだ。

「そうですか」リンケイが微笑んで頷き、

「手前、なんてこと言いやがる」リュージュンが蒼くなって叫んだ。

3 正体見たり

閻羅王に言いつけられた通り、牛頭と馬頭は揃って陽世へと飛んだ。
土地爺の一人、コントクを捕えるためだ。

今、コントクの住まう屋敷に辿り着いた二人は、門を叩いて家人を呼んだ。

「これは、牛頭馬頭さま、こんなむさ苦しい所へようこそおいで下さいました」家人は恐れ入りながら二人を招き入れ、茶菓を振舞った。

牛頭と馬頭はそれを頬張りながら「コントクはいるか」と問うた。

「主人は今日、山一つ向こうの町へと行っております。帰りは夜遅くなるとのことですので、どうかそれまでごゆっくりなさって下さい」家人は深く頭を下げそのように言った。

「そうか。では待たせてもらうとしよう」牛頭はそう言い、足を崩して楽な姿勢を取った。

「しかし、急がなくていいのか」馬頭はおどおどしながら相方に言った。「一刻も早くコントクを連れて帰らねば、また閻羅王様のお怒りに触れることになるのではないか」

「なに、探すのに手間取っていただけと報告すればいい。下手にこちらが探しに出かけて行き違いになったりしたら、くたびれ損になるだろう。ゆっくりとここで待つことにしよう」牛頭は別段恐れることもなく相方に答えた。

「そうか……」馬頭は尚もしばらく考えていたが、牛頭の言うことももっともだと思い、家人の言う通り待つことにした。

家人はその間こっそりと小間使いに告げた。「今からご主人様のところへ走り、牛頭馬頭があなた様を捕えに来ているから今日は屋敷に帰らず町に泊まるよう伝えなさい」

小間使いの少年はすぐさま走って町へと向かった。

走りながら少年は、生まれて初めて見た地獄の閻羅王の使いの恐ろしい出で立ちを思い起こし、恐怖に泣いた。

あんな奴らにかかったら、一瞬の内に自分の命など奪い取られてしまうだろう。

一体奴らはご主人をどうするつもりなのか。

ご主人の命を取ってしまうのか。

コントク様が、一体何の罪を犯したというのか。

あんな、お優しい方が。

泣きながら、また怒りと悲しみに身を震わせながら、少年はひたすら山道を走った。

この山の頂が、実は町の境目となっており、コントクと、彼を追う小間使いの少年はその境を越えたところからリュージュンの治める地へと入っていたのだ。

山のふもと近くに広がる草原を、少年は相変わらず泣きながら走った。

まだ風は冷たいが、気の早い小さな花がそこかしこで咲き始めている。

しばらく進むと少年は、三人の人影が叢の中に佇んでいるのに気づいた。

走る速度をゆるめ、さらに早歩きとなり、それも次第に速度を落としながら、彼はその人影を遠くからじっと見つめた。

人影――と思ったが、それは実は違っていた。

一人は紛れもなく人の男。

もう一人は人ではなく土地爺らしき鬼。

そしてもう一人は――

少年はうっと顔をしかめた。

彼がそこに見た三人目は、丈の小さな、その代わり横幅の異様に大きな、かぶらみみたいな形をした化物だった。

餅のようにつるんと白い肌で、かぶら様の体のとんがりから白髪が長く垂れており、かぶらから異様に細長い手足が生えている。

それを認めた時、人間の男と鬼が同時に少年に振り向いた。

かぶらの化物は振り向かず――否、振り向いたのかも知れないがそうとわからなかつただけかも知れない――少年は顔をしかめた状態でその場に立ち止まった。

逃げろ。

彼の内の声が叫ぶ。

だが足がいうことを聞かない。

今まで、山を越え草原を走り抜いてきた、その疲労からばかりではない。

恐怖もある。

しかしこの道をゆかねば、主人コントクのいる町へ入ることができない。

もたもたしていれば、主人が別の道を辿って屋敷へと戻り、まんまとあの忌まわしき二人組、牛頭馬頭に捕えられ地獄へ引っ立てられていってしまうかも知れぬ。

急がねば。

急げ。

大急ぎで、どうにかしろ。

頭を、働かせるんだ――

少年は焦りの余り、さらに顔を歪めて泣いた。

一体おれは、どうすればいいんだ？

ああ、こんな時おれに、聡明鬼ほどの頭脳があれば――

「聡明鬼」不意に、人間の男がそう言った。

少年はハッと体をこわばらせた。

自分の考えが読まれたのかと思った。

「なんだ、陰陽師」隣に立つ土地爺が答えた。

少年は目をまん丸に見開いた。

聡明鬼、だって？

そこにいる、あの鬼がそうなのか？

こんなに、若い鬼なのか聡明鬼というのは？

噂では、地獄の閻羅王にさえ手を焼かせるほどのやり手だというが。

「あの少年に、訊いてみてはどうか」陰陽師がそう言って少年を指差した。

「うん、俺も今そう考えていた」土地爺――聡明鬼が頷く。

少年はぶるぶると震えが止まらなかった。

一体自分はどうなるのか。

どんな仕打ちを受けることになるのか。

ああ、玉帝様！

どうか今この窮地から私をお救いください！

「君」陰陽師と呼ばれた人間の男がにっこりと微笑んだ。「ひとつ、訊きたいのだがね」

「――」少年は震えたまま何も言えなかった。

「君にはこの人が、どんな姿に見えるかな」陰陽師はそう言って、隣に立つかぶらの化物を手で示した。

「――」少年は口を開いたが、息を喘がせるばかりで言葉にならない。

「怖がる必要はないぞ」聡明鬼と呼ばれた土地爺が言葉を添え、やはりにっこりと笑った。「た

だ訊くだけだ。この女、十八の娘に見えるか、それとも八十の婆に見えるか」

「――え」少年は驚いて思わず訊き返した。「女？」

陰陽師と聡明鬼は、揃って目を丸くし少年を見た。

「女に、見えないか？」陰陽師が訊く。

「男に見えるのか？」聡明鬼が訊く。

「――かぶらのお化けに、見える」少年は見えた通りのことを告げた。

その瞬間、それまで顔の見えなかったかぶらの化物が振り向いたかと思うと白目と牙を剥いて少年に飛びかかってきた。

「うわあーッ！」少年は悲鳴を挙げ尻餅を突いた。

両腕で頭をかばい、ぎゅっと目を瞑っていたが、その後何事も起こらないのでそっと目を開けてみる。

陰陽師と聡明鬼が視界に映った。

陰陽師は体を斜めに開いて立ち、手に握った数珠をかぶらに向かって突き伸ばしている。

聡明鬼はかぶらのでっぺんから生えた髪を片手に掴み、もう片方の手を手刀にしてかぶらの目と目の間に寸止めしている。

「たれがかぶらじゃ、小僧」かぶらの化物は、耳をつんぎくかというほどのきいきい声でわめいた。「わらわは狐じゃ」

「狐？」人間の男と聡明鬼と少年は、揃って呆気にとられた声を挙げた。

4 鬼頼み

「聡明鬼」狐だと自ら言った“その者”は、リューシユンに向かって言った。「手を離せ。もう誰にも何もせぬ。ただわらわの話を聞いて欲しい」

リューシユンはちらりと横目でリンケイを見た。
どうする、と問う目だ。

「いいだろう」陰陽師は頷いた。「裏切ればどのような目に遭うかは、もう十分にわかっているな」

二人の目にもいまやそれは、少女でもなく婆でもなく、少年が言った通り、白くてのっぺりとして横幅の異様に太い、かぶらのお化けに見えていた。

「お前は、狐といったが妖怪、妖狐なのか」リューシユンはかぶらの髪――それは実は狐の尻尾だった――から手を離して訊いた。

「少し、違う」かぶらのような狐は、俯いた。「わらわは、精霊じゃ……というか、精霊に、なった」

「なった？」リューシユンとリンケイは揃って問うた。「いつ、なったのだ？」リューシユンが続けて問う。

「先月じゃ」かぶらの狐は寂しげに答えた。「わらわは昔、この地に生き埋めにされたのじゃ」

「生き埋めに」リンケイが眉をひそめた。「よもや……土地の『応』のためか」

「応？」リューシユンと、小間使いの少年が揃って問うた。「なんだそれ？」リューシユンが続けて問う。

「勢力者が生前墓を作る際、相応しい土地を選ぶやり方だ」リンケイは答えた。「土地を『応』してそれを判ずる――陰陽師によく頼まれる仕事のひとつだ」

「ふうん」リューシユンは唇をすぼめた。「で、生き埋めにされたお前が、先月精霊になったというのか」

「そうじゃ」かぶらの狐は頷いた。「皮を長きに渡って放置されたゆえ、精霊になった」

「で、精霊になった暁に陰陽師に仕返しに来たというわけか？」リューシユンは訊いた。

「俺がこの者を生き埋めにしたわけではないぞ」リンケイが不服げに言葉を挟む。「一体、俺に何用あって来た」

「陰陽師さま」かぶらの狐はひたとリンケイを見据えた。「ぜひともあなた様に、探していただきたいのです」

「何をだ」

「私の他に、私同様生き埋めにされた兎と、鼬（いたち）がいるのです」かぶらの狐は身振り手振りを交えて語った。

「あの主は強欲で、応するべき土地として三箇所もの土地に目をつけ、三つの土地それぞれに三匹の生き物を埋めさせたのです。ここの他のどこに、兎と鼬が埋められたのかは知りません。けれど彼らも今ごろは、私同様精霊になっているはずです。どうか、彼らがどこに埋められたのか、その土地を探してくださいませんか」

「しかし、探し当てたとして、それをどうするのだ」リンケイは訊いた。

「あの強欲主がどの土地に決めたのかを知りたいのです」かぶらの狐は答えた。「墓場として相応しいと判ぜられた土地には、二股に分かれた木が生えます。ここの土地にはそれが生えなかった。つまりあと二つのどちらかが、あの強欲主の墓場として選ばれているのです」

「そして、それを知ってどうするのだ」リューシユンが訊いた。

「むろんのこと」かぶらの狐は目を暗く光らせた。「あの者が決して極楽浄土などへ行かぬよう、必ずや陰間へ堕ちてゆくよう、道案内をしてやるつもりじゃ……あの者一人でなく、あの者の子も孫も、親族みな」

「祟り狐か」リューシユンはあからさまにうんざりした顔をした。「同情はするが、やめとけ」

「わらわには子がおった」かぶらの狐は泣きながら反論し始めた。「可哀想に、どんなに腹を空かせ、怖い思いをしたじゃろう。わらわだけがこんな目に遭うなんて不公平じゃ。あの強欲主にも同じ想いを味わわせてやらねば気が治まらぬ」かぶらの狐は泣きわめいた。

「気持ちは察するが」リンケイも首を振った。「お前はこの地に埋められ、この地にて精霊とな

ったのだろう。他の精霊のいる地へ行ってそんな仕返しをするなど、できはしまい。身代わりでも見つけるならともかく」

「身代わり」かぶらの狐はまたしても切れ長の目を光らせた。「そういえば埋められる前、ちらりと聞きましたが、本来ならば土地を応ずる為生き埋めにするのは、生きた人間の子であるとのこと」

リンケイとリュージュンは、揃ってかぶらの狐を見た。
少年も。

三人の胸中に嫌な予感が走るのと同時に、狐の精霊はくわッと牙を剥き目を釣り上がらせて、もう一度少年に飛び掛った。

そして先刻と同様、リンケイの呪およびリュージュンの腕によって差し止められた。
少年も先刻と同様、地に尻餅を突いて涙を浮かべ悲鳴を挙げた。

「御前を陰陽の理の下に封ず」リンケイが宣告した。手には口袋を持っている。

ごうう、と風が起き、かぶらの狐の顔が、体が歪んだ。
キイイ、と鉄を擦り付けるような声で啼き、地に爪を立てて耐えようとする。

リンケイはもう片方の手で払塵を取り出し、狐の頭をびしり、と打った。
狐は次の瞬間に口袋の中へと吸い込まれ、風はぴたりと止んだ。

リンケイは口袋の緒を締め、懐に収めた。

「大丈夫か」リュージュンはがたがたと震える少年の手を取り、立たせた。「お前、何処へ行くところだったんだ」

「あ、」少年は震えながらもリュージュンを見、その鬼の穏やかな表情に幾分心を落ち着けたようだった。「おれは、ご主人のいる町まで……この草原を抜けたところの、キンカイという町まで」

「そうか」リュージュンは、その町の方向に首を向け、また少年を見た。「また何が出てくるかわからんから、そこまで送って行こう」

「そうだな」リンケイも払塵を袴の後ろに収めながら追隨した。「俺も行こう」

「すみません」少年は縮こまった。

三人連れ立って歩きながら、少年はふと思った。

こんなに強い二人ならば、主人を牛頭馬頭から守ってくれることもたやすいのではないだろうか。

いや、きっとそうだ。

この二人に頼めば――

「あの」少年は口火を切った。「お二人に、お願いがあるのです」

「ん？」先に立って歩くリュージュンが、首だけを振り向ける。「お前も狐なのか？」

「い、いえ」少年はびっくりして首を激しく振った。「まさか、とんでもない」

「仲間の鼬を探せというのかな？」後ろを歩くリンケイまでが可笑しそうに訊く。

「そ、そうではありません」少年は歩きながら両肩の間に首を埋めた。彼は必死だった。

「冗談さ」リュージュンは呵々と笑った。「お願いとは何だ」

「実は、おれのご主人様を……コントク様を、牛頭馬頭の手からお守りいただきたいのです」少年は足元に目を落として告げた。「今、主人の屋敷に牛頭馬頭がやって来ていて、ご主人様を陰間へ連れて行こうと待っているのです」

「ほう」リュージュンは前を向いて歩きながら返事した。「何の為に？」

「わかりません」少年の声は沈んだ。「けれど、あまり喜ばしいことでないのは確かです」

「そうだな」リンケイが歩きながら頷く。「牛頭馬頭が迎えに来た、ということは、君のご主人に用があるのは閻羅王なのだろうからな」

無論この時点では誰も、その閻羅王がそのコントクを召喚する目的がまさにリュージュンを懲らしめる事にあるなど知る由もない。

5 鬼ごっこ

「主人のコントク様は今、キンカイの町で弟のジライ様とともに、コウヨウをしておいでです」少年は話した。

「コウヨウ？」リューシュンがまた首だけを振り向けて訊く。

「コウヨウ」リンケイも眩き、少年に目を上げる。「降妖か」

「何だ？」リューシュンが、少年の頭越しにリンケイに訊く。

「鬼退治だ」リンケイは簡素に答えた。「ジライという名、確かに降妖師として聞いた覚えがある」

「鬼退治、つまり悪行をなす鬼魂をやっつけるわけか」リューシュンはまた前を見て歩きながら確認した。

「そうだ」リンケイは頷いた。「これは陰陽師にあらず、降妖師の仕事となる」

「ふうん……それで、その鬼魂はやっぱり封じられるのか？」

「まあ、そうだな」リューシュンの問いにリンケイは答えた。「いわゆる“鬼中の鬼”となり、二度と身代わりを探すことも、投胎することもできなくなる」

「トウタイ？」

「人間として生まれ変わる、転生することだ」

「へえ」リューシュンが納得したとき、そのキンカイの町並みが彼方に見え始めてきた。「お前の主も降妖師なのか？」少年に訊く。

「いいえ、主人は土地爺です」少年は答えた。「弟のジライ様の手伝いをしているのです」

「土地爺？」リューシュンはきょとんとした。「土地爺ならば、お前の主人は鬼なんだろう。ジライというのはその弟といったが、弟鬼が降妖師をしているのか？」

「ええと」少年は頭の中を整理しながら説明した。「主人とジライ様は、本当の兄弟ではなく、

兄弟のように仲が良いお二人なのです」

「ふうん」リューシユンはすぐにまた納得した。「義兄弟ってことか」

「はい」少年は頷いた。「今キンカイの町で、ある鬼魂が夜ごと現れては人の屋敷を壊し、人を傷つけ、子供をどこかにさらって行ったりしているらしいのです。降妖師ジライ様の手にさえ余るほどの悪鬼だという噂です」

「そんなに性質の悪い鬼魂の退治に、土地爺ごときが行って役に立つものなのか？」リューシユンは素朴に訊ねた。

「随分な疑いようだな」リンケイが苦笑する。「お前も土地爺のくせに」

「俺はまあ」リューシユンは鼻の頭を搔いた。「自分でいうのも何だが、鬼や妖怪と闘って負けはしねえからな」

「コントク様も、大層頭の良い方です」少年は、リューシユンの機嫌を損ねないよう気遣ってでもいるのか、俯いて小さな声で言った。「多分、鬼魂を退治するための方法を考え出してお手伝いするのだと思います」

「へえ」リューシユンは感心したらしかった。

その返事の声聞き、リンケイはこの土地爺が聡明鬼と呼ばれる理由のひとつがわかった気がした。



キンカイの町は古くからあり、建物も道路も年季が入って歴史を感じさせるものだった。町の中央に敷かれた大路には人や牛馬が行きかい、周辺の店々も繁盛している様子だ。

この土地爺はたらふく儲けていることだろうな――リューシユンはそんなことを思いつつ、通りすがりの饅頭屋で饅頭を買い求め、少年に、それからちらりと横目で睨んだあとリンケイにやって、最後に自分も大口を開け頬張った。

少年ははにかみながらも嬉しそうにそれを頬張り、リンケイもにこにこ微笑みながらそれに続いた。

「これは玉帝様にぜひとも報告せねばなるまいな」リンケイは言う。「人間に饅頭を振舞う鬼、これはもう神仙として召し上げるべきではなきやと」

「阿呆か」リュージュンはむっつりと饅頭を頬張った。

玉帝の名を出されると、少し心臓が跳ね上がる。

まさかそんなわけはあるまいが、玉帝は本当に俺を神仙になどと考えているのか？

ふと浮かびかけるそんな考えを、リュージュンは頭の中の片手で押し退けた。

本当に、まさかだ。

饅頭を食らい尽した後しばらく歩いて、コントクとジライがいるという屋敷に三人は到着した。

「じゃあ、俺たちはこの近くで待ってるから」リュージュンがそう言い、リンケイと二人門を通り過ぎた。

「あ、でも」少年は戸惑った。「長く歩いて来てお疲れでしょう。中へ入ってしばらくお休みになって下さい」

「いいよ」リンケイは笑った。「君が主を務める屋敷というわけではないし、陰陽師が来ると降妖師殿のお仕事の邪魔にもなろうし、鬼が来れば尚更邪魔だろう」

「おい、それはどういう意味だ。饅頭を返せ」リュージュンが食ってかかった。

「じゃあ、あっちで茶の一杯でも振舞おう。来い」リンケイはさっさと歩き出す。

「それじゃ、お前の主人が出て来たらまた同行するから、後でな」リュージュンは片手を挙げ少年と別れた。

「聡明鬼」店で茶を一口すすってから、リンケイは問うてきた。先ほどまでと違い、切れ長の目は真剣なものになっている。「感じるか」

「うん」リュージュンは特に「何をだ」などと訊くこともなく、あっさり肯定した。

匂いだ。

この町に入ってから、死の匂いが彼の鼻に届いていた。

焼かれた皮のような、喉の奥まで痛くなるような匂いだ。
これは自ら命を絶った死霊のものだ。

だが近くではない。
大体の方角は見当がつくが、ここからは少し離れている。

だから、死霊の方もまだリューションを見つけてはいない。

リューションは、陰陽師と別れるべきだと思った。
はっきりとした根拠はないのだが、自分の中に鬼魂が入ってくるところを見せるべきではないと感じていた。

だが陰陽師の方も、むろん“匂い”としてではないだろうが、この町に潜む陰曹地府の暗い影の存在を感じているらしい。

「恐らく、こいつだな」リンケイは瞬きもせず手元の茶を見つめて言う。「この邪鬼が、この町でよからぬ振る舞いをしている犯人だろう」

「だな」リューションは軽く頷いた。「しかし町全体を覆うほどの霊気、かなりの力のある奴と見えるな」

「うん」リンケイはまた茶をすする。「競争、だな」呟いて、またふっ、と微笑んだ。

「競争？」リューションはぽかんと訊く。

「ああ。俺と、お前と、そして降妖師――誰がこの者を退治するか」

「はっ」リューションは鼻先で笑い、茶を飲み干した。「くだらねえ」

「しかし今のところ有利なのは降妖師かも知れんな、なにしろ賢い土地爺と二人がかりで挑む

んだ」

「ああ、そうかもな」リューシユンはまったく興味のない振りを装った。

「どうだ、聡明鬼。俺とお前も、組むか」リンケイは自分とリューシユンを交互に指差して言った。

「ええ？」リューシユンは思わず声を高めた。「まさか本気じゃねえよな？」

「うん」リンケイはあっさりとした。 「そんなことすると、お前とつながるからな。やめとこう」

「まったく」リューシユンはため息をついた。「お前、完全に遊び感覚でやってるだろうーていうか、お前」

「ん？」

「この仕事は降妖師の仕事であって陰陽師の仕事ではないとか、さっき言ってなかったか？」

「ああ、陰陽師の仕事じゃない」リンケイは頷いた。「だから、遊び感覚なのだ」

「お前なあ」リューシユンはだらりと肩を落としてうなだれた。それからすぐに立つ。「そんじゃ、俺はひとつ真面目にやってくるからよ……お前はここで待ってろ」

「うん」陰陽師は微笑んだ。

無論彼が、鬼の言うことなど聞くわけがなかった。

そして聡明鬼にも、そのことはわかっていた。

どこで撒くかー

リューシユンは歩きながら、感覚を周囲に張り巡らせた。

天心地胆を探る感覚だ。

天心地胆とは、陽世と陰府、陰陽が交わる地点のことだ。

やがて彼は一つ、その地点を探り当てた。

これは陰間に通ずる者、つまり鬼にしか見えないものだ。

なので人間である陰陽師には、それは見えない。

リューシユンはそこから陽世をいったん抜け出そうと考えていた。

陽世を抜ければ陰陽道、人間の世界である陽世と地獄とをつなぐ空間に出る。

しばらくそこを歩いて、しかるべき場所で再び陽世に戻る。

しかるべき場所とは要するに“匂い”のいる場所だ。

そして彼は人ごみに紛れ、まったく自然に姿を消した。

「ん？」リンケイは足を止めた。

注意深く聡明鬼を追っていたが、今その姿が風に吹かれて散った花びらのごとく姿を消したのだ。

彼はしばらく、聡明鬼のいた場所を見つめた。

だが聡明鬼は確かに、消え去っていた。

「撒かれた」リンケイは苦笑した。だがその苦笑は困った風のものではなく、むしろ楽しげなものだった。

死ねばいいー

再び陽世に現れると同時に“そいつ”の声は聞こえてきた。

「あつっ」リューシユンは思わず声を挙げ頭を両手で抱えた。

“匂い”はたちまちリューシユンを見つけその中に入ってきたのだが、その瞬間リューシユンを激しい頭痛が襲ったのだ。

焦げ臭い、えぐい匂い。

自死の鬼魂。

年端も行かぬ、少年だった。

こんな幼い人間が、自分の命を絶ったのかー 啞然とせざるを得なかった。

だがリューシユンはその時、それがただそれだけの事情を持つ鬼魂ではないことを知った。

この自死鬼――そう遠くない昔に転生した者のようだ。

つまり鬼魂だったものが再び人間として生まれ変わり、そして生まれ変わった自分の命を自分で絶ったのだ。

――また、複雑な奴だな。

頭を抑えながらリューシユンは思い、さらに頭はずきずきと痛みを増していった。

「あうう……つく」リューシユンは歯を食いしばった。

死ねばいい、死ねばいい――

死ねばいい――私なんか。

声はさらに大きく、リューシユンの中で叫び続ける。

「後……悔……して……いるのか」リューシユンは頭を抱えながら途切れがちに訊いた。「転…
…生、した、こと……を」

鬼魂は答えなかった。

「お前は……前世で……横死……したんだろう」頭のとっぺんが、ずきずきと激しく傷む。
今にも脳天がぱっくりと割れそうだ。

恐らくこの者は高みから転落し、頭を強く打って死んだのだろう。

高い所から、自ら飛び込んだのだ。

だがその前世、つまり飛び込んで失った命の前の命、それは位の高い、人々に員外と呼ばれ尊敬される立場の者だったようだ。

今リューシユンの中に、その時の景色までが朧に写りこんでいるのだった。

これは、聡明鬼に取って初めて味わう感覚であった。

員外であったその者はしかし、その位と人望とを妬む輩の卑劣な手によって毒を盛られ苦しみ

ながら命を失うという、凄惨な最期を遂げたようであった。

そして彼は鬼魂となり、三年の月日を耐え忍んで、終に再び人間へと投胎、つまり転生した。

しかしその、新しく生まれ変わった命を、彼はほんの十数年で、自ら絶ってしまったのだ。

死ねばいい――

か細い声が再び語り出した。

「お前は、転生する時、身代わりを立てたんだろう」リューシユンは目をぎゅっと瞑りながらも問うた。「そいつのことを考えたか」

声が止む。

鬼魂となった員外が再び人間として生まれ変わる時、彼が縛り付けられていた地に身代わりの鬼魂を呼ばなければならなかったはずだ。

リューシユンは、身代わりとなった者の無念さを考えたのか、その上で自らの命を絶ち「死ねばいい」と自らを呪っているのかと訊いたのだ。

くすくすくす、としばらくの沈黙の後、もと員外であった者はかそけく笑い出した。

「何が可笑しいんだ？」リューシユンは問うた。

「身代わりは」鬼魂は囁いた。「生まれ変わった」

「何？」

「私が身を投げたのは、私が前世で命を絶たれた地――身代わりの者が縛られていた地だ」

「――なんてこった」リューシユンは、頭痛のことも忘れ呆然と口にした。「鼯ごっこじゃねえか」

この者は員外として殺され、三年間殺された地に鬼魂として縛り付けられた後、自分の身代わりとなる人間の命を奪って代わりに再び人間へと生まれ変わった。

だがその十数年後、身代わりを殺した地で自らの命を絶ち、こんどは自らが“身代わり”となって、かつての自分の身代わりを人間へと生まれ変わらせたのだ。

なんとも複雑な話だが、要はこの者と哀れな身代わりの者が、代わる代わる死んだり生まれ変わったりしたということだ。

「で、今はお前がこの地の鬼となっている」リューシユンは相変わらず呆然と呟いた。「そして俺の中に入った」

「お前の中に入った」鬼魂は繰り返した。「ああ……そうだ」

鬼魂の顔にはみるみる血の気が刺していった。

歓喜の表情だ。

いつもの、見慣れた表情だ。

リューシユンはしばらく、その頬の薔薇色への変化を見た。

「お前は、なんで自らの命を絶った」やがて聡明鬼は訊いた。

「罪ほろぼしだ」もと員外の者は、喜びに全身浸りながら幸福の表情で答えた。「こんなつまらない人間として生まれ変わったことには何の喜びもなかった——だから私の前世の身代わりとなった男への、罪ほろぼしをした」

「それで、身代わりの男は喜んだのか？」リューシユンはまた訊いた。「転生したところで、前とまったく同じ人間として生まれ変わることはできないだろう。それは罪ほろぼしになったと言えるのか？ 人生の途中で突然命を絶たれた、その男の無念は消えたのか？」

「——」もと員外は黙り、ゆっくりと目を開けてリューシユンを——リューシユンの中からリューシユンを、見た。

「第一、お前にも転生した先で親がいただろう。その親はどんなに悲しんだか、それはどうなんだ」

「黙れ」もと員外は目を釣り上がらせた。「土地爺の分際で私に楯突くのか」

「楯突くわけじゃないさ」リューシユンは苦痛に顔を歪めた。また頭がひどく痛み始めた。「ただ俺は」

「黙れ」もと員外は遮った。

「いいや、黙らん」リューシユンはしゃがみ込みたくなるのを必死で耐えた。「俺には、お前のそのやり方は、どうにも利己的で自己満足の為だけのものに思える」

6 対峙

「自己満足か」もと員外は繰り返し、ふん、と鼻で笑った。「知ったようなことをほざくわ」

「確かに知っちゃいない」リュージュンの頭痛は波のように彼を襲った。まるで鼓動のように、叩かれる気がする。

確かに知ってはいない、この鬼魂の残してきた本当の行いと想いについては。

それにリュージュンが、自分の体内に取り込んだ鬼魂の言葉に異議を唱えるなど、今までになかったことだ。

だが此度のこの鬼魂について、リュージュンにはどうも腑に落ちない点が散見するのだった。

いつも取り込んでいる鬼魂の類とは、性質が違うように思える。

「身代わりとなった者は、喜んでいたので。転生することができる、もう一度人間として生まれることができる。私に感謝さえしていた」

「そりゃ、お前が自分を殺した犯人だと知らなかったからだろうよ。まあ、でもそんならそれはいいとして、今お前はキンカイの町でいろいろ悪さをしているのか？」リュージュンは問うた。

もと員外は答えず、ただじっとリュージュンを見た。

ずく、ずく、と、リュージュンの脳天には相変わらず痛みがもたらされる。

おかしい、と聡明鬼は思っていた。

いつもより、死霊が自分の中に入ってからの変化のしかたが緩慢すぎる。

いつもはもっと、リュージュンに投げられた苦痛が消えていく過程が明確に感じられるのだが、今この鬼魂のものは、最初の強さをずっと維持しつづけている。

だけではなく、いったん弱まってきたかと思わせながら、また強まって――勢いを取り戻して、いまだリュージュンに苦痛を与え続けているのだ。

いつもとは、違う。

この死霊、何者なのか――

リュージュンは、強く目を閉じた。

「なるほど、そういう技が使えるのか」不意にリュージュンの背後から声が聞こえた。

ハツとして振り向くと、リンケイがそこに立っていた。

「陰陽師」リューシユンは目を見開いた。

「しかしそのままでは聡明鬼、お前の体にかかる負担が大き過ぎるだろう。ひとまず出すぞ」リンケイはそう言い、袴の後ろから払塵を抜いた。

「お前、どうしてー」リューシユンがそこまで言った時、リンケイの手首が軽く動いて払塵がヒョウと鳴り、リューシユンの頭頂をぴしりと打った。

「痛てッ」リューシユンはまた強く目を瞑った。

ごうっ

風が起こり枯葉を巻き上げた。

「ってえ」リューシユンは涙目になって頭を撫ぜたが、頭痛は夢であったかのようにさっぱり消えていた。

「うむ、やはり鬼の頭をこれで打つと良い音が鳴るな」リンケイは満足そうに手の中の払塵を眺め頷いた。

「お前なあ」リューシユンはうんざりした声で言った。「なんでここがわかった？」

「靈氣を追って来た」リンケイはすました顔で答えた。「こう見えても俺には靈氣が読めるしな」それは笑いを巧妙に隠したすまし顔だった。

「ああ……まあ、そうか」リューシユンはちょっと気まずげに頭をやたらと撫で回した。当たり前の話だ。撒こうが撒くまいが、結局陰陽師がここに来ることに支障はなかったということだ。

「それよりも、この鬼魂よ」リンケイはくるりと首を振り向け、黒い渦となって大気中に立ちほだかる邪悪な靈を見た。「お前はどう見る？」

「うん」リューシユンもそれを見た。「普通の鬼魂と違うのは確かだな……自死鬼とは思いますが、

ただの自死鬼じゃないようだ」

「自死か。もしかしたら」リンケイは払塵を体の前に構えながら考えを述べた。

「ん？」リューシュンは訊き返す。

「自らの意志ではなく、何者かによって自死に追い込まれたのかも知れんな」

「ほう」リューシュンは興味深そうに頷く。「そう見えるか、陰陽師には」

「うん。何か妖的な存在に、操られているんじゃないかという気がする」

「妖的な存在？」リューシュンはちらりと横目で見た。「妖怪か」

「もしくは精霊」

恐らくこのもと員外である少年は、本当に自分が死ねばいいという思いで飛び込んだのではなく、妖怪または精霊に突き落とされたか、或いは飛び込まなければならないという暗示にかけられたのだろうということだ。

「その、妖怪か精霊が、見えるのか。陰陽師には」リューシュンは訊いた。

「なんとなく、な」リンケイは涼やかな眸をす、と細め、黒い渦の周囲を探る。「どこかその辺に潜んでいるような気配を感じる」

「ふうん」

「お前の方こそ、死霊と会話していたようだが、それは体内に死霊が入っている時だけなのか」

「そうだな、はっきりと声が聞こえるのは、鬼魂が俺の中に入っている時だけだ」

「そうか」

二人は横に並んだ状態で言葉を交わしていたが、その眸は決して黒い渦から逸らされたりしなかった。

渦は禍々しく揺らめきながら、まるで二人の会話を盗み聞きしているかのように不気味に佇んでいた。

「動かないな、こいつ」リンケイが静かに呟く。「降妖師の技か」

「いかにも」二人の背後から男の声がした。

はっとして振り向くと、齢五十頃の男が二人――正確には人間の男と鬼の男――が、立ち並んでいた。

名乗られずとも二人の名に察しはついた。

コントクとジライだ。

だがリューシュンもリンケイも、特にその名を呼んで確かめるつもりはなかった。

「我々は降妖陣を敷きそこからこの鬼魂を操る精霊の隠れ場所を探っていた。だが突如として鬼魂の居所を見失い、慌てて鬼魂の巣食う場所まで馳せ参じたというわけだ。しかしこうして来てみると、鬼魂はまた元通りここに存在している。君たちが何か技を施したのか」男の一人――人間の方――が問いかけた。

陰陽師は黙っている。

リューシュンに任せるつもりのようだ。

「技というか、まあ俺が鬼魂をちょっとばかし、捕まえていた」リューシュンはぼやかして答えた。「けど今はまた、放してやっている」

「ほう」土地爺が興味深そうに返事した。「よく見れば、君は聡明鬼だな」

「どうも」リューシュンは、何故だか少し身が引き締まる思いがした。

陰間での彼の振る舞いは、土地爺たちには知れ渡っている。

自分に死の匂いを受け入れる能力のあることが閻羅王の耳に入るのは、今はまだ避けたいと思っていた。

「ではこの鬼魂は確かに、何者かによって操られているというのですね」リンケイが素早く質問を差し挟んだ。「それは妖怪ですか？」

「いや違う、精霊だ」ジライが答える。「兎の精霊のようだ」

「兎？」リューシュンとリンケイは声を揃えた。

彼らは思い出していた。

さきほど草原でリンケイが封じた、かぶらのような狐の精霊。

あ奴が確か、自分の他に兎と鼬（いたち）も生き埋めにされたと言っていなかったか。

そしてあ奴は、兎と鼬がそれぞれ埋められた地を探し出してくれと、リンケイに頼んできたのだ。

「もしかしたら、あの狐の言っていた“主”、三箇所もの土地を応じた強欲な勢力者というのは」リンケイが考えを述べる。

「だな」リューシュンも頷く。「この鬼魂の一家の主であるとみて間違いないだろう」

7 鬼情

「君たちもこの僵死鬼（きょうしき）の一家を知っているのか」コントクが訊く。

「僵死鬼？」リューシユンとリンケイは揃って訊き返した。「こいつ、僵死鬼なのか」リューシユンがなかば呆然と繰り返す。

「僵死鬼というのは？」リンケイがまた訊く。

「一度抜けた自分の死体にまた入り込んだ、いってみりゃ死に損ないの鬼魂のことだ」リューシユンが説明する。「確かに僵死鬼なら見境なく人を襲い殺めるし、何人手にかけても転生などしないから性質が悪い」そしていつもの鬼魂と勝手が違っていたことも、ひとつには僵死鬼であることが由来しているのだろう――内心でリューシユンはそっと頷いた。

「ふむ、この僵死鬼と既知の仲というわけではなかったか」コントクが再度訊ねる。「ではなぜ、この者を知っているのかね？」

「たまたま、その兎の精霊の仲間に遭遇したんだ」リューシユンはコントクに答えた。「狐だったかな。もう一匹、鼬もいるという話だ」

「その狐の話では、強欲な勢力者――恐らくこの僵死鬼の一家の主が、狐、兎、鼬の三匹をそれぞれの土地に生き埋めにさせ、陰陽師によって土地を応させたとのことだ」リンケイが後を継ぐ。「狐も相当にその勢力者を恨んでいて、勢力者の墓場となった土地へ行き一家に崇ろうと目論んでいたほどでした。その兎の精霊がこの狐と同じ思いを抱いていないと言い切れましようか」

「なるほど。理解した」コントクとジライは目を見交わし頷いた。「自分を犠牲として土地を応じた主への恨み、それがこの所業の因だったのだな」

ごうう

正体を知られたことに対しあたかも怒りと憎悪を露にしたかのごとく、黒い霊気の渦はさらに巨大さを増し、枯葉ばかりでなく小石までをも巻き上げた。

ひと呑みで生き物の生命を奪ってしまうであろう、悪意に満ちた力強さがリューシユン達四人

を圧倒した。

しかしそこから前へ進み出て来ずにいるのは、この四人の法力がそれぞれ負けじと押し返しているからに他ならない。

更に今その四人は孤立していた各々の霊力をひとつに合わせることを意識に上らせ始めていた。

それは即ち四人分の器に収まりきらぬ程の大力が、その空間に生まれでたということだ。

「つまり、生き埋めにされた兎がそれを恨みに思い、自分を埋めさせた勢力者の一家の者を僵死鬼に変え、それを操って町に災いをもたらしていたというわけですね」リンケイが確認する。

「となると、まずは兎を封じ、次に僵死鬼を封じなければならないな」ジライが懐をまさぐり、一枚の札を取り出した。「陰陽師どの、ここで出遭ったも何かの縁、ひとつ貴殿の法技を借りることはできまいか」

「もちろん、喜んで手をお貸ししましょう」リンケイはすぐに答えた。「私が兎の精霊を口袋に封じればよいのですね」

「うむ、そして私が僵死鬼を」ジライは手にした札を見下ろし、そして強き光をたたえた眼を上げた。「この霊符にて封じましょう」

「霊符」リューシュンが呟いた。「鬼魂を、封じるものか」

リンケイがちらり、とリューシュンを見た。

鬼魂――兎の精霊から解放された死霊は、聡明鬼の体の中に再び入ることはないのだろうか。

聡明鬼の体の中に、再び取り込むべきものではないのか。

「その札で封じられると、鬼魂はどうなるんだ？」リューシュンはジライの手の中の霊符を指して問うた。

「無論鬼魂は力を失い、もはや陰曹地符に逝くこともできず、永久に腐った死体の中に留まり続けることとなる」ジライは淡々と説明した。

「それは」リューシュンはいささか愕然となった。「もう、投胎することもかなわなくなる、ということか」

「無論その通り」

「そんな」リューシユンは呆然と囁いた。

リンケイは傍からリューシユンの表情を見、彼が衝撃を受けていることを見た。
それを見て、ふと不可思議の想いに捕われたのだった。

――鬼が、人間の魂の行く末に情を揺すぶられるか。

そして次に彼の中に出てきた言葉は、

――変な奴だ。

であった。

しかし幸か不幸かこの陰陽師にとって「変」という状態を表すものは、大変興味をそそられるものであったのだ。

「陰陽師どの」ジライが告げた。「私がこの五行鏡にて、僵死鬼を操る兎の居場所を吐かせます。貴殿はそこへ向かっていただきたい」彼は霊符をコントクに預け、自身の手に掌ほどの大きさの黒縁の鏡を取り出していた。

「承知しました」リンケイは頷いた。

霊気の渦は今にも四人の上から覆い被さろうと丈高く聳え震えていたが、ジライが鏡を向けると一瞬ぎくりとしたかのように身を引いた。

「五金（ごごん）よ」ジライは風の唸りを威圧する大声で叫んだ。「一金（いちごん）に帰せよ。木火土金水、鬼怪の居所や何処」

「やめて下さい」小さな、震える声が突然聞こえた。

リューシユンは、眼を見張った。

一人の痩せた少年が今突如として、黒い霊気の渦巻きの中に震えながら立っていた。

この少年こそが渦の正体、兎にそそのかされ騙されて、脳天から地に落ち自死鬼、否、僵死鬼

となったもと員外であることに間違いはなかった。

「お前はー」リューシュンは呼びかけた。

「何か見えるのか、聡明鬼」リンケイが隣から訊く。「あの、黒い渦の中に」

「え」リューシュンは陰陽師を見た。「お前には見えないのか、あの子供が」

「子供？」コントクが訊く。「渦の中に？」

「幻影だ」ジライが遮る。「聡明鬼、騙されるな。兎の仕業だ」

そうだろうかーリューシュンはもう一度、渦の中の瘦せた少年を見た。

それは彼の中で、彼に苦しみを投げて寄越した、自ら身投げした光景を見せつけてきた少年その人だとリューシュンは確信した。

他の者たちには見えていないというのが、その証拠だ。

自分にだけ見える、自分にだけ感ずることのかなう、鬼魂だ。

「お願いします。ぼくを、苦しめないで」少年は胸の前に手を組み合わせ、懇願した。「どうかこのまま、お引取り下さい」

「しぶとい渦め」ジライが歯痒そうに呟く。「早くお前を操る精霊の居場所を言え」五行鏡を渦の方へとさらに近づける。

「ううっ」少年は苦痛に蒼白な顔を歪めた。「や、めて……」喉を締められているかのような声を出す。

「霊符を投げ込むか」コントクが言い、手に持っていた札を差し上げる。

「う、ぐ、うう」少年は喉元を押え首を振る。

「やめろ」堪らずリューシュンが叫ぶ。「この鬼魂、すまないが俺に預けてくれ」

ジライとコントク、そしてリンケイが聡明鬼を見た。

「預ける、だと」ジライが不審げに問う。「お前一人でどうする気だ、聡明鬼」

「来い、小僧」リューシユンは降妖師には応えず渦の中の少年に大声で呼びかけた。「さっきのやり方を覚えているだろう。俺の中に入れ」

「聡明鬼」思わず声をかけたのはリンケイだ。「大丈夫なのか」

「奴が俺の中に入ったら、俺に五行鏡を向けてくれ」リューシユンは渦を凝視したまま告げた。

「そうか。内と外から、だな」リンケイがすぐに了知し、他の二人に向かって頷いて見せた。「この鬼に任せてよいと思います」

コントクとジライはやはり互いに眼を見合わせたが、彼らが返事をするよりも先に黒渦が動き、引き寄せられるかのように聡明鬼の鼻腔から中に潜り込んで行った。

「ああ、つううっ」リューシユンに再び、先ほどとは比較にならぬほどの苦痛が襲ってきた。頭を抱え、両膝を地に突く。

「こ、これは一体」コントクとジライは驚愕した。

「鏡を」リンケイが叫ぶ。

ジライがすかさず五行鏡をリューシユンに向け「兎の精霊の居場所を言え」と命令する。

「今すぐにやめさせろ」少年だと思っていたものは、リューシユンの中に入ったとたん先ほどと同じような高圧的で居丈高な年長の男の声に変わった。恐らく前世の員外だろう。「分をわきまえぬ、不屈き者めらが」リューシユンの中で喚きちらす。

「お、前……」リューシユンは自分の頭蓋に爪をめり込ませるかというほどの力で頭を抱えていた。「あ、操ら……れて……るんだろ」

「私は操られてなどいない。馬鹿者が」

「兎を、この、地に……埋めたのは……お前か」

「兎？」員外の死霊は初めてその言葉を聞いたかのように問い返してきた。「私の墓場に、兎を

」

「そう……土地を、応……する……ために」リューシユンはもはや、自分が声に出して喋っているのか、心の中だけで念じているものなのかわからなくなっていた。

「兎……ああ」員外は気づいたようだった。「そうだ。確かに陰陽師に言われた通り、ここに兎を生き埋めにした」

「そいつだ」リューシユンはどうにか顔を上げ、彼の中の員外に真っ直ぐ伝わるようゆっくりと話した。「そいつが、お前の、一家に崇っている」

「兎が」員外はぼんやりと繰り返した。

リューシユンは激しい眩暈に襲われた。「ううっ、くっ」片手を地に突き、さらに身を伏せる。地面の上をごろごろと転げまわりたい衝動に彼は駆られた。

「私も及ばずながら加勢します」リンケイがジライの鏡を持つ手に自分の手を添えた。「この者には正法のみでは通用しないと見える」

「ぐあああッ」法力の増加に伴い強まった苦痛で、員外が火炎のごとく叫び、それは即ちリューシユンの口から迸った。

「このままでは聡明鬼の身が危ないのでは」コントクが危惧を感じて口走る。

「大丈夫です」リンケイが請合う。「あいつはこれ位で参る玉ではない」

お前が、言いたいことを言ってくれる――リューシユンは意識のどこかでぼんやりと陰陽師に毒づいたが、自分の中で暴れる員外をどうにかしなければならなかった。

しかし彼はその時、土地爺コントクがその手に霊符を持って自分に近づこうとする姿を視界の隅に認めた。

鬼魂を、永久に封じる札――

「おい、お前」リューシユンはがぼっと立ち上がり、仁王立ちとなって天を仰ぎ叫んだ。「員外と呼ばれていたんだらう。町の人々を愛し尊崇されてきたんだらう。忘れたか。本当ならお前は

上天へ行き神仙となってもよかったんだ。土地を三つも応したのはお前の妻と子と孫も皆、一家の魂の安寧が永く続くように願ったからなんだろう。それがどうして兎なんかに負けてしまっているんだ。眼を覚ませ。気づけ。お前の魂を悪徳に染めようとする鬼怪は、どこにいる」

リューシユンの中で員外は、呆然とリューシユンを見た。

リューシユンをまたしても眩暈が襲う。

それは即ち、員外自身において何か変化が訪れていることの現われだと思われた。

リューシユンは膝を突かなかった。

空が回る。

大地も。

だがリューシユンはそれに耐えた。

天を仰ぎ、天を支えとして、自分を奮い立たせていた。

立たせ続けていた。

「桃の木」ついに員外はそれを告げた。「ここから北東に進めば二股に分かれた桃の木が生えている。その木の下に、兎はいる」リューシユンの唇を借りて、彼は話したのだ。

「承知した」次の瞬間、リンケイが疾風のごとく走り出した。彼の姿はたちまち粒のように小さくなった。

「よし」リューシユンは眼を瞑った。「待っている。すぐに、お前を――逝くべき所へ、送ってやる」

ジライとコントクはしばし呆然とリンケイを見送った後、次に呆然とリューシユンを見、次にやはり呆然と顔を見合わせた後「桃の木か」と言い残してリンケイの後を追った。

リンケイは桃の木のあるところに辿り着くまでを無駄にはしなかった。

彼は走りながら印を結び呪を唱えた。

意識は勿論目指す方角、二股に分かれているという桃の木にある。

その木の姿こそいまだ目に見えてはいなかったが、彼は彼の内にその像を描き法眼にてそれを強く見据えた。

まだ見ぬ桃の木が、うち震えているかのように見えた。

そして現実の樹木の元へ着いた時リンケイは大きく跳躍し、その根の埋まっている大地を全法力をかけてどん、と踏み鳴らした。

真っ黒な、邪悪を絵に描いたかのような妖気が音を立てて飛び出してきた。

「陰陽の理の下、御前を封ず」リンケイは叫んで唇に口袋を挟み、斬妖剣をぎらりと抜いた。

妖気は空中に大きく伸び上がり、空を覆う暗雲となった。

その暗雲の中に二つ、紅く光る巨大で不気味な目が並んでいた。

ひと睨みですべての命の営みを止めてしまいかねないほどの、邪気が放たれている。

8 約束

リンケイは摺り足で移動しながら、眸は頭上に被さる黒雲から逸らさずにいた。兔の化けた雲を睨みつつ、桃の木の根元に少しずつ近づく。紅い眼を持つ暗雲は、リンケイの狙いを讀んだかのように雷を降らせた。リンケイは跳び、雷光の矢をかわした。まともに喰らったならばその瞬間黒焦げになっていただろう。

リンケイは地に降り立つと同時に、斬妖剣を両手に持ち地中深く突き刺した。

黒雲は揺らいだが、すぐに持ち直して再び雷光を放つ。リンケイはまた跳んだ。幾度か、それが繰り返された。

だが不意に、兔の黒雲が凍ったかのように動かなくなった。リンケイは一瞬訝ったが、すぐにそれが降妖師による定身法の業だと知った。陰陽師に遅れ馳せ参じたジライとコントクが、兔の黒雲に法珠を向けていた。

リンケイは走り、高く跳ぶと桃の木の枝を次々に蹴り進み、そして兔の黒雲に正面から跳びかかった。

斬妖剣が光り、黒雲を真二つに切り裂いた。

大地をわななかせるほどの悲鳴が轟いた後、兔の黒雲は粉微塵に散り、そしてリンケイの広げた口袋の中へと吸い込まれ消え去った。



兎の精霊が封じられるや、改めて鬼魂の来し方がリユージュンの中を逡巡った。

員外の男はいつも和やかな微笑みで人々の世話を焼き、慕われ、頼られていた。彼には家族も多く、いつも皆の幸せを願っていたのだ。

彼は生前墓を作る際、名のある陰陽師に相談した。

陰陽師は土地を応するために人間の子供を生き埋めにするやり方を提案した、だが自らも幼子を持つ員外に、それは心を痛めることであり、彼は悩んだ。

代替の方法として陰陽師は、小動物を使い応することを示した、だがもしかするとそのやり方では、陰陽の位相の歪みから何か不幸なことが員外の身に起きるやも知れぬとのことだった。

彼はそれでもいいと、三つの地を応した。

少しでも、彼の一族の魂が転生の日を迎えるまでの年月安らかに眠ってられるように、より上天に近く質の高い土地をと願ったからに他ならなかった。

だが陰陽師の予言通り、員外は毒殺という恐るべき最期を遂げた。

彼は兎を生き埋めにし二股の桃の木が生えた土地を手筈通り墓場としていたが、毒殺された後彼の遺骸はその墓に埋められた。

その時まだ兎は精霊と化してはいなかったが、地下でずっとその時を待っていた。

彼は自分の近くにやってきた員外に、三年待った後身代わりを立てて転生し、更なる名誉と権力、そして今度こそ途中で途切れてしまった人生を、誰にも邪魔されず満足の下に終えることを夢見させた。

員外は、素晴らしかった自分の人生が毒によって断絶されたことを口惜しく思うばかりに兎に気を許してしまい、三年の時をかけてすっかり兎の言いなりになってしまったのだ。

そして三年の月日を待って、もと員外は身代わりに他の人間の命を桃の木のある場所で奪い、転生した。

転生した先は農家で、裕福ではなかったが父も母も明るく温かく、兄弟もおり、もと員外は「カイザ」と名づけられた。

だが兎は転生後もカイザの中の員外の心を誘導し、彼の心を希望と真反対の方へ、つまり陰府のごとく暗く絶望のある方へと引きずり込んだ。

即ちカイザの中の員外に、前世との落差をまざまざと痛感させ、こんな貧しい農家に生れ落ちた自分には何の価値もないのだと思い込ませた。

身代わりを立ててまで転生などしたところで、こんな情けない身分ではどうしようもない。なぜ自分は転生などしたのだろうか――

そして兎はついに、精霊となったのだった。

兎の精霊は今こそ恨みを晴らさんとばかり、まずはカイザに、お前が身代わりにした人間の身代わりとなれ、と命じた。

つまり桃の木のある土地、員外一族の墓場にてみずから飛び込み、頭から落ちて鬼魂となれ、と。

カイザはふらふらと心を失ったまま言われる通りにした。

員外の身代わりとしてその地に縛り付けられていた人間は喜びながら転生していったが、カイザはもはや、自分が何者であるのかの意識すらなかった。

カイザ、という新たな名さえ、既に忘れていた。

彼の中にあるのはただ、員外であった自分と、自分の命を毒によって奪った人間への激しい怒り。

彼は人間に、不幸と災いをもたらし続けると強く心に決めたのだ。

かくして兎の精霊の思惑通りに、彼の鬼魂は遺骸の中に戻り、僵死鬼として動き始めたのだった。

当たり前なことなのに、受け入れられなかった。

ごく自然なことなのに、許せなかった。

自分のありのままが、すべてのありのままを、否定していた――

その慙愧の念に、リューシュンは打ち震えとめどなく涙を零した。

そうしながら、

――いろいろ、あったんだな。

そんなことを、思う。

リュージュンは、カイザの、そして員外の歩いてきた道、痛みと悲しみと苦しみのすべてを、受け取った。

彼の中にカイザと、員外と二つの顔があり、その両方とも次第に安らかで温かみのある色へと――いつも見るもののよう――変わっていった。

兎の呪縛から解かれたからだ。

「何をしなきゃ不可ないだろうか、何をしていれば正しいと誉めてもらえるのか――そんな事ばかり考える必要はない」リュージュンは口に出してそう言った。

カイザと員外は揃ってリュージュンの言葉に耳を傾けた。

「何をやってるのが自分に心地好いか、それが結局は正しいんだ」リュージュンはゆっくりと続けた。

二人は目を閉じ、更に安らかな顔になった。

「まあ、俺はそんな風にやってるから、閻羅王に睨まれるんだがな」リュージュンはそう言うと自分の事ながら自分で苦笑した。

二人は少し愉快そうに、笑顔を見せた。

そうして二人は、極楽浄土へと旅立って行った。



「これでキンカイの町に平和が戻った」ジライはすっかり赤くなった顔をほころばせ悦んだ。「本当に、あなた方のお陰だ。有難う」

「さあさあ、まだまだたんとご馳走がありますから、存分に召し上がって下さい」コントクも、リューシュンとリンケイを心からもてなした。「聡明鬼、君はこの前の森羅殿での宴会の時ほど腹に収めていないのではないかね。遠慮することはないぞ」

「はは」リューシュンは後頭を搔いた。「どうも」

「森羅殿というは、閻羅王の棲むところだな」リンケイは杯を口に運びながら、独り言のようにさりげなく確認した。「俺も一度見てみたいものだ」

「いずれはな」リューシュンはくいつと酒を飲み干した。すぐに小間使いの少年がおかわりを注ぐ。「お前も鬼魂になれば、行くことになろうよ」

「ははは」リンケイは楽しげに笑った。「残念だな。俺は上天側だからな」

「そんなことはわからんさ。陰陽師であろうと、陰間に引っ張られる奴は多くいる」

「らしいな」リンケイは眉をひょいと吊り上げた。「嘆かわしいことだ」

「他人事かよ」リューシュンは呆れたように言い、肩をすくめた。

「それで、聡明鬼」コントクは少し姿勢を正し、改まったようにリューシュンに質問した。「君の、あの法技なのだが」

「法技？」リューシュンの方がびっくりした。「俺には、そんなものはないが」

「何を謙遜している」コントクとジライは笑った。「鬼魂を体の中に取り込む、あれが法技でなくてなんだというのだ」

ごほっ、とリューシュンは酒を喉に詰ませかけた。「あれ、は」

「さすが聡明鬼と呼ばれることはある」コントクは深く頷いた。「あの法技はいったい、どのようにして身につけたものなのかね？」

「ー」リューシュンは進退窮まった。まさか真実のことを今ここで話すなど、彼には考えられないことだった。

「変な鬼でしょう」代わりにリンケイが応えた。「こいつには、鬼のくせに情にもろいという、更に変なところがあるのです。恐らく鬼の生まれ損ないの類なのだろうと、私は思います」はははは、と大きく笑うと、骨付きの羊肉にがぶりと喰らいつく。

「お前」リューシュンは横目で陰陽師を睨みつけたが、なんとなく救われたように気になっていた。「まあ、確かに俺は、鬼の出来損ないだとよく言われる」

「ほう」コントクは頷いた。

「そういう鬼も、いるものなのだな」ジライも納得したようだ。

少し面白くはないが、リューシュンはそのまま置くことにした。

「ところでコントク殿には、牛頭馬頭の迎えが陰曹地府より来ているということをお聞きになりましたか」リンケイはさらに巧みに話を逸らした。

「ああ」コントクは眉をひそめてまた頷いた。「閻羅王が私に何か用があるらしいですな」

「しかし、のこのこついて行くのも考えものですな」リンケイは首を傾げた。「閻羅王は何しろ、鬼を鬼とも思わぬ血も涙もないお方ですからな」

「うむ」三人ともが頷く。無論そんなところを閻羅王に見られたならば、鬼二人においては十八層地獄行きを免れたものではない。

「ここはひとつ、牛頭馬頭をどうにかして追い返そうではありませんか」リンケイは眸をきらきらさせた。酒の勢いも手伝っているのかも知れない。

「鼬（いたち）、だったな」リューシユンが口を挟む。「もう一匹の精霊」

「なるほど」リンケイが何故か納得する。「それを使うか」

「どういうことでしょうか」コントクとジライが首を傾げる。

「まずは鼬の埋められた土地を探しましょう。少しお待ちください」リンケイは立つと、部屋の窓の近くへ歩き、外へ向けて声を放った。「リョーマよ、これへ」

たちまち空が翳り、見上げる三人の目に、頭が龍で体が馬という巨大な生き物の姿が映った。

「こいつの背中にお乗り下さい。鼬の精霊のいる土地、こいつならばたちまち嗅ぎつけることでしょう」リンケイはにっこりと微笑んで三人を促した。



「牛頭馬頭、只今戻りました」閻羅王の待ちかねた使徒どもは、玉座の前でかしずいた。「仰せの通り、コントクをお連れしました」

「――」閻羅王は返事もしない。

牛頭と馬頭は、そっと目を上げた。

閻羅王が、凍り付いている。

息もしていないかのようだ。

二人はちらりと目を見交わし、閻羅王の考えを読み取ろうとした、だが彼らにそれはかなわなかった。

「さあ、閻羅王様の前へ出ろ」牛頭がコントクの背を押した。

「かしずいて挨拶をせよ」馬頭もコントクの背後から命ずる。

コントクはびくびくと小刻みに震えながら、押されるがまま閻羅王の前へ進み出た。

だが彼は、言葉を知らないかのようにただ震えるのみであった。

きよろきよろ、と辺りを見回し、また首を引っ込めてぶるぶると震える。

「コントク」閻羅王が初めて口を開いた。「土地爺、コントク」

コントクは答えない。

ぶるぶると震えている。

「これ、返事を」牛頭が叱った。

「ーを連れて来いと、儂は言った」閻羅王の言葉は続いていた。「土地爺コントクを連れて来い、と」

「は」馬頭はきびきびと頭を下げた。「仰せの通りにいたしました」

「土地爺コントク」閻羅王はさらに続けた。

「は」牛頭も頭を下げた。

「ーだと申すのか、この小汚い生き物が？」

閻羅王の声に、牛頭馬頭はきよとんとして顔を上げた。

すると今そこにいたはずの“コントク”は、枯れ枝のごとく痩せ衰えた鼯の姿に変わっていた。

「あ」牛頭馬頭は揃って声を挙げた。

「阿呆か」閻羅王は怒鳴った。「阿呆なのかお前らは。それとも儂を馬鹿にしておるのか。これのどこが土地爺コントクなのか。この鼯が陽世で人間どもを総べておるのか。そういう鼯なのか、この臭い、みすぼらしい、腐った木の枝のような鼯が」怒号は永久に続くものかと思われた。



「ありがとうございました」少年は深々と頭を下げた。

コントクの屋敷の外、しばらく歩いた四辻でのことだ。

鼬をコントクに化けさせた後、リンケイはさすがに疲れたと見え、リョーマという生き物の背に乗り辞していた。

リュージュンはひとしきりジライとコントクの礼を受け、自分の町へと帰ろうとしていた。

それを見送りに来たのが、最初コントクを迎えに行こうとしてリュージュンとリンケイに偶然出会い、主コントクの救援を頼んだ小間使いの少年だったのだ。

「あなた方のお陰で、ご主人は助かりました。本当に、ありがとうございました」

「なに、大したことはしてないからな」リュージュンは肩をすくめた。

「またいつか、お会いできますか」少年は憧憬の眼差しで鬼を見上げた。「おれの名は」

「言うな」リュージュンは手で制した。「俺も今は名乗らん。名を呼ぶとつながると陰陽師が言った。鬼である俺と、人の子であるお前がつながっていいものかどうかわからないからな。いつかつながってもいいのだとわかったら、その時俺の名を言おう。そしてお前の名を聞こう」

「ー」少年は不思議そうな顔をしてリューションを見たが、すぐになっこりと素直な笑顔を見せた。「はい。いつか、必ず」

そうして二人は名乗らぬまま、互いに手を振り別れたのだった。

9 犬と鼬

春うららかな日差しの差す庭に、小さな池がある。

水面はきらきらと陽光を映し、時折魚の跳ねる度ちよぼん、と長閑な音を立てる。

リンケイは縁側で柱に背を預け、茶をすすりながら気持ちの好いこのひと時を楽しんでいた。

かささ、と小藪の方で葉音が鳴る。

子犬一人の前腕ほどの大きさの犬が、くんくんと土の匂いを嗅ぎながら姿を現す。

「リョーマ」リンケイが呼ぶと子犬はくるりと振り向き、すぐにたたと走り寄って来た。

沓脱石の上に蛙のごとくぴよんと飛び乗り、精一杯伸びをして前足を縁側にかけるが顔は半分ほどしか見えていない。

「かえすがえすも不思議なんだが」リンケイは子犬の頭を撫でてやりながら独り呟いた。「お前何故、注力を解くと犬になるのかな。馬か、蛇にでも変わるならまだわかるが、何故犬と化すのか」

リョーマと呼ばれた子犬はうっとり目を閉じ幸せそうに頭を撫でられていた。

リンケイがのんびりと座りながら考えていたのは、聡明鬼のことだった。

先日、この鬼と組み精霊の呪詛による災いを除け、さらに土地爺が陰曹地府に引き立てられるのを防いだ。

聡明鬼と呼ばれる、閻羅王を閻羅王とも思わない豪傑の鬼、剛毅の鬼が存在するという話は聞き知っていた。

知的好奇心の強いリンケイは、いつか一度は会ってみたいと思っていた。

それが実際初めて間近に見た時、つまり狐の精霊を除けたあの草原で初めて言葉を交わした時から、何か鬼であって鬼ではないような、不思議な印象を聡明鬼に対しずっと感じているのだ。

――これは、何なのだろうな。

そんなわけで暇ができるついで、その聡明鬼に対する印象についてあれこれ考えを巡らせてしまう癖が、最近のリンケイにはついてしまっていた。

何かおやつを与えられることを望んでいるかのような眼を上向きに向けてくるリョーマに、リンケイは茶受けの干し芋を少し千切って放ってやった。

子犬は身を翻してそれを追い、くわえて振り回しながら食べ始めた。

「もしかするとあいつの不思議さにも勝るかも知れんな、お前の不思議さは」リンケイは言い、茶をすすった。



陰曹地府（いんそうちふ）に四季というものはなく、暖かい、涼しいなどという快適さを現すこともない。

ここに存在する者が笑う時、それは何か悪巧みを思いついたか、それが成功して得をしたか、そんな時だけだ。

だが今閻羅王に笑みというものは縁がなかった。
その悪巧みを思いつけずにいるからだ。

聡明鬼に真実を吐かせる策を、妙案を思いつくことのできる者はいないだろうか。
最近の閻羅王はすっかり、暇さえあればそのことばかり考えるようになっていた。
自分が直接聡明鬼に問い質したとしても、奴は決して素直に真実のことを語りはしないだろう。
下手をするとまたまんまと騙されて恥をかくことになる……

閻羅王はいらいらと肘掛を指で叩いた。

かしゃーん

遠くの方で何かが壊れる音がした。
指をぴたりと止め、閻羅王は目玉だけをじろりとその方向へ動かした。

つるつるつる、という音が聞こえるかのような走り方で、木の枝のように細長い獣が閻羅王の玉座のまん前を素早く通り過ぎていった。
一瞬の出来事だった。

「ああっ、何てことを」

「閻羅王様の大切になさっている壺が」

「またあ奴か」

「あのどぶ鼬（いたち）めが」

牛頭と馬頭の悲鳴に似た叫びが聞こえてくる。

土地爺コントクに化かされていた鼬だが、いつの間にか森羅殿に居座り、最初は枯れ枝のごとく痩せさらばえていたものがどこで餌を調達したかすっかり元気に、旺盛期の樹木の枝ほどに肥え太っていた。

閻羅王もそんな生き物ごときに構ってなどいられなかったが、他の者たちも同じく放ったらかしにしていた挙句のことだ。

今では忘れた頃に今のように何かを壊しては人目を引く――というよりも鬻ぎをかうようになっていた。

閻羅王は眼を閉じ、ふうと嘆息した。

聡明鬼に太刀打ち出来るほどの、叡智に長けた者がどこかにいないものか――自分の周りには、否この陰間には存在しないというのが、甚だ情けない話だが真実といえるだろう。

何しろあんな、小汚い鼬ごときに振り回される体たらくだ。

「何をそんなにお悩みになってんですかい、旦那？」訊く者があった。

旦那？ 儂のことか？ 閻羅王は眉を寄せて眼を開いた。

先刻駆け抜けていった鼬が玉座の前でちょこんと座り、長い尻尾をくるくると自分の体の周りに巻きついたり解いたりしている。

閻羅王はしばし言葉もなく、その生き物の真っ黒い眸と見つめ合っていた。

「もしかするとコントクってえ人間に関わることですかい？ コントクって、あっしに術をかけた奴らの内の一人っすよね。あっしがそいつの姿に変えられて、それで旦那は騙されちまったって事でしたね」鼬は甲高い声でぺらぺらと喋った。

閻羅王のこめかみがぴくぴくと震えた。

人間であれば血筋が浮き出るところだろうが、閻羅王に血はない。

だがその分閻羅王の怒りは地獄の熱そのものとなりすべてを焼き尽くすのだ。

「おっと、まだあっしを十八層地獄へ落っことすのはお待ちになった方がいいですけど、旦那」き

きき、と鼬は鳴きながら両前足を擦り合わせた。

それはどうやら愛想笑いの声のようだった。

「貴様」閻羅王は口を開いた。「何か知っておるのか。貴様が儂の役に立つとでもいうのか」

「もちのろんでさあ」鼬は尻尾をくるくると空中で回した。閻羅王は眩暈を起こしそうになり、眼をしばたたかせた。「ふふふ、あの時はあっしも餓死寸前ですっかり弱っちまってましたから、おめおめと奴らの呪法の餌食になっちまいましたがね、今となっちやもうほら、この通りでさあ」そこまで言うと、鼬は突然くるりと宙で一回転し、次の瞬間再びコントクの姿に変わっていた。

「なんと」閻羅王は玉座の上で身を乗り出した。

「あっし、これでも精霊の端くれっすからねえ」コントクがもう一度一回転すると、また鼬の姿に戻った。「もちろん何にだって、自力で化けることぐらいお安い御用でさあ。この前は弱ってたせいで力を封じられちまってただけですがね」自分が弱いわけではないということを鼬はちらちらと言葉の端々に巡らせた。

「ふむ。その力を使って、儂の為に働くというのだな」閻羅王は顎に指を当て確認した。

「へい。何なりと、お申し付けくださいませ」鼬はぺこりと頭を下げた。

「聡明鬼を知っておるか」閻羅王は訊いた。

「へい、もちろんでさあ」鼬は小鼻に皺を寄せ口惜しそうな表情を見せた。「あっしに術をかけた奴らの一人ですからね。崇っても足りないぐらいの憎い奴でさあ」

「なんと、ではコントクと聡明鬼は揃ってお前をコントクに化けさせたのか」閻羅王は驚いた。

「へい。あと人間の陰陽師と降妖師もいやしたぜ」鼬はますます口惜しそうにききき、と甲高い声で鳴いた。「なるほど旦那は、あいつらをぎゃふんと言わせたいとお望みなんすね？」

「う、うむ」閻羅王は少し躊躇した。

一体どこまでのことをこの鼬に話してよいものだろうか。

鼬を見下ろせば、真っ黒な眸でじっと真っ直ぐにこちらを見上げている。

そんなに悪辣なことをし遂げる者には見えない。

しかし牛頭馬頭よりは、複雑な策略を思いつく頭があるように思える。

「ではお前のなすべきことを申しつけよう」閻羅王は言った。「この聡明鬼という者に、閻羅王の言うことを何でも聞く、どんなことでも閻羅王の言葉に従うという気持ちにさせよ。それが出来ればお前をこの森羅殿において、儂に祇候（しこう）し衣食の不足なく住まうことを許そう。とにかく何でも儂の言う通りにしなければならないのだと、あ奴に思い込ませよ」

そしてそれが成功した暁には、生死簿の鬼魂の名前が減っている理由を吐かせればよい。もしその上でも理由など知らぬというのであれば、十八層地獄へ行け、と言えればいい。あ奴は閻羅王の言葉に従い、自ら炎熱地獄へと身を投じるだろう。

我ながら良い思いつきをしたと、閻羅王は思った。
そして久しぶりに、眉間を開いてくすくすと笑ったのだった。



リューシユンは今日もまた一人、海岸を散歩していた。
潮の香りが心地好い。
海風は涼やかに頬を撫でてゆき、足元に踏みしめる砂もまたさくさくと気持ちの良い音で鳴く。
時折貝殻だの流木を拾い上げてはその形をさまざまな角度から眺めて楽しむ。

「聡明鬼ではないか」呼ぶ声に振り向くと、先日行動をともにした土地爺コントクがにこにここと上機嫌の顔で砂を踏みしめ近づいてくるところだった。「こんなところで遭うとは」

「ああ。どうも」リューシユンもにこりと笑みを返した。

あの精霊の事件まではほとんど会話を交わしたこともなかったが、元々が同じ土地爺という職業同士、それだけでもどこか通じるような感覚をおぼえる。

余り他者と深い関わりを持たぬリューシユンだが、コントクの方に体ごと振り向き向かい合った。

「あんたも、散歩か」

「ああ。今日は暖かく気持ちがいいな」コントクは海風に髪をそよがせながら眼を細める。

「あれから、牛頭馬頭はしつこくやって来たりしてないか」リューシユンは拾った桜色の貝殻を

掌の上で転がしながら訊いた。

「うむ」コントクはふと、少し物想う顔になった。「それがな、牛頭馬頭は来ないのだが、なんだか陰間で起こっていることを、噂に聞いたのだ」

「へえ」リューシユンは真顔になって、コントクを見た。「何が起こってるんだ？」

「実はな、この前馳を、私に化けさせて森羅殿へと連れ帰らせただろう」

「ああ」

「あの馳が、今じゃすっかり森羅殿の中で威張りくさって、閻羅王が食べるはずのご馳走をいつの間にか平らげてしまい、ぶくぶくと肥え太って、もはや怪物並みの凶体にまでなっているということだ」

「へえー」リューシユンは少し面白そうな顔になった。「あの馳、とっ捕まえた時には今にも死にそうに痩せてたのにな」

「そうだろう」コントクは頷いた。「一体、どれだけのご馳走をくすねたものなのかわからないが、牛頭馬頭始め閻羅王に仕える鬼たち皆、手に負えなくなってしまうらしいぞ」

「ははは」リューシユンは空を向いて笑った。「なかなかやるなあ」

「しかしな、聡明鬼。これが笑い事ではなさそうな雰囲気なのだ」コントクは項垂れた。

「どうして？」

「実は私コントクが、閻羅王の元へ行くことを嫌がりその馳を使って閻羅王の呼び出しを無視したばかりか、閻羅王を馬鹿にしたということで、すっかり閻羅王の怒りを買ってしまったのだ」

「それは違うさ」リューシユンは肩をすくめた。「あれは、たまたま俺たちがふざけて馳をあんたに化けさせたのを、牛頭馬頭が勝手に間違えて陰間に連れ帰ってしまっただけだ。あんたが閻羅王を騙す為に仕組んだことじゃない……まあ、表向きは、だけどな。でもどっちにしろ、閻羅王がそのことであんたを責めるのは筋違いだ。そう言ってやれ」

「それがなあ」コントクは、はあ、とため息をついた。「閻羅王はもう誰の言うことも聞く耳持たないようになってしまっているらしい。もう、金輪際誰の言葉も信用しないと」

「身勝手だなあ」リューシユンは眉を寄せた。「そんなら、手下を使わず自分で連れに來りゃいいのに。閻羅王は身勝手で、怠慢だ」

コントクはそっと肩をそびやかした。

噂に違わぬ、閻羅王を閻羅王とも思わぬ剛毅の鬼だ。

「なあ、聡明鬼」コントクは一步リューシユンに近づいた。「このままだと私は、いずれまた牛頭馬頭に、または鬼差にでも捕えられ、怒り狂う閻羅王の前に引っ立てられて行ってしまうだろう。しかしその前に、あの鼬をなんとか始末してしまえば、もしかすると閻羅王の怒りを鎮めることができるかも知れぬ。だが怪物と化した鼬となると、私一人では力不足だ。そこでどうだろう、またこの前の四人で陰曹地府へ行き、皆で力を合わせれば鼬の一匹や二匹、たちどころに仕留められると思うのだが」

「ああ、まあな」リューシユンは人差し指を顎に当て空を見上げた。「けど、俺とあんたはいいにしても、陰陽師と降妖師は人間だ。陰曹地府に行くとなるとあいつらを一時的にでも鬼魂にしまわれないといけなくなるが.....その辺りの術は土地爺の俺たちには使えないからなあ」

「陰陽師や降妖師自身が何か法術でそうできるかも知れんぞ」コントクは身を乗り出す。「ひとつ皆で、閻羅王に恩義を売りに行こうではないか。そうすればまた陽世に戻った後も、大きな顔をして暮らせるというものだ」

「そうか」リューシユンは腕組みをした。「じゃあ、まずは陰陽師のところへ行ってみよう」

そうして二人は海岸から町の方へと歩を進めた。

コントクは心の内で上々の出来に満足していた。

このままこの前の四人で陰間へ行き、そこで閻羅王に、聡明鬼以外の三人を十八層地獄へと落してもらう。

もちろんコントクだけは、地獄に落ちた“振り”だけをして、元の鼬に戻り隠れておく。

閻羅王は、友人たちを助けたくば自分の言うことに従え、と脅す。

聡明鬼は情にもろいらしいから、悩んだ挙句閻羅王に従うだろう。

後は鼬の森羅殿での優雅な生活が保障されるというわけだ。

ききき、とコントクはごく微かに笑いを洩らした。

「リョーマが飛んで行ったのは確か、この辺りだったかな」リューシユンは道を歩きながら、きよろきよろと辺りの屋敷を見回した。「おおい、陰陽師はいるか」歩きながら声を張り上げる。

コントクは、振り返りくすくすと笑う人々の視線に思わず首を縮こませた。

「聡明鬼か」どこからか小さく応える声が聞こえた。

「そうだ。どこだ、お前んち」

「今迎えを寄越す」

ほどなく、白い着物を着た少年がたたと走り寄って来て、リューシユンとコントクにぺこりと頭を下げ、眼で促しながら道案内を始めた。

幾度か曲がり、小さな橋を渡って少し歩いたところに、リンケイの棲家はあった。古めかしいが手入れが行き届き、香草がほどよく庭から香ってくる。

「これはお揃いで。ようこそ」リンケイが笑顔で二人を迎え入れた。

「なかなか小綺麗にしてるな」リューシユンは庭と屋敷を見回して感心した。「一人で住んでるのか」

「一人さ。まあ、手入れは式神がやってくれているがね」リンケイは変わらず清流のきらめきを思わせる語り口で話す。

二人をここまで連れて来た少年は音もなく空中を滑るように飛んで行き、厨で茶の支度を始めたようだった。

うるるる

その時、小さな唸り声が聞こえたかと思うといきなりコントクに子犬が飛び掛りその衣に噛み付いた。

「あっ」リューションとリンケイが驚きの声を挙げ、
「ひゃああ」コントクが悲鳴を挙げた。

「お、おいお前」リューションがリョーマを引き離そうとするが、子犬はコントクの衣をしっかりと啣えて離さない。

「ふむ、このリョーマがこんなに懐くとはな」リンケイは顎に手を当てて珍しがった。「人には滅多に近寄らないというのに」

「おい、呑気なことを言っていないで何とかしろ」リューションは子犬の小さな体をどう掴んでいいものか加減がわからず、おたおたしながらその飼い主に訴えた。

「たたた、助けてくださいませ」コントクは焦りの余り常時とはうってかわった口調になり懇願した。「い、犬は苦手なんすよ、あっし」

リューションは片眉をついと寄せてコントクを見たが、何も言わなかった。

「これ、リョーマよ、お客がお困りだろう。離れなさい」リンケイは子犬の胴体を両手で抱え、引っ張った。

きゅうう

リョーマは少しばかり不服げな声を喉の奥に発したが、少し引っ張られた後でやっと口を離れた。

はっはっと、舌を出して荒い息をする。

リンケイに抱えられながらも、短い尻尾を千切れんばかりに振っている。

「失礼しました。コントク殿」リンケイは苦笑しながら犬を地面に置いた。

「い、いえーうわあ」コントクは衣を直そうとしたが再びおののき始めた。

何故なら一旦離れたリョーマが再び彼の足元周囲をくるくると駆け巡りだしたからだ。

「うわ、うわ、ちょっとあんた」コントクは再び常時とはうってかわった口調になり慌てふためいた。「もう勘弁してくださいませえ」

「いやあ、なんとも気に入られたものだなあ」リンケイは心底感嘆の声を挙げた。「リョーマに

ここまで気に入られるとは、ううん、とても人間に成し得ることではない。土地爺にしても、少なくとも聡明鬼に成し得ることでもない」

「悪かったよ」リューションがぼそつと言い返したが、リンケイはかまわず続けた。

「いやまったく、精霊か妖怪でもない限りは、こんなことは成し得ないだろうなあ」

「え、え」コントクは泣きべそ顔で足元の子犬と陰陽師を代わる代わる見た。「いや、あの」

「お前、さっき『降妖師』と言ったよな」今度はリューションが、コントクに言葉をかけた。「なんでそんな呼び方するんだ？ 自分の弟のことを」

「弟？」コントクは眼を丸くして訊き返した。

「よし、リョーマ、かかれ」リンケイが声を張り上げる。

わう

一声勇ましく吠えたかと思うと子犬は飛び上がってコントクの顔に貼り付いた。

「うわああっ」コントクは尻餅を突き仰向けに倒れた。

リョーマはその顔を前足で搔いたり、ぺろぺろと舐め回したり、甘噛みしたりして思う存分遊び始めた。

「ひいい。許して、ごめんなさい」コントクは堪らずついに鼯の姿に戻り、つるっと犬の下から滑り出たかと思うと一目散に逃げ出した。

わう、わうわう

たちまちリョーマも嬉しそうに全力で追いかけて始める。

リンケイの屋敷の、小さいながらよく手入れの行き届いた庭で二匹の小動物がめまぐるしく駆け回り、香草も花も何もかもが踏み荒らされ、しまいには池の中にまでどぼんと飛び込みばしゃ

んと飛び出てくる有様だった。

「あーあ。はは」リンケイはさすがに苦笑するしかなかった。「次の手入れは、俺も手伝うことにしよう」

「そうだな」リュージュンが頭の後ろに手を組み答える。

「もちろんお前もだぞ。聡明鬼」リンケイは微笑んで付け足す。「お前が連れて来たんだからな」

「ーわかったよ」リュージュンは口を尖らせながらも了承した。

丁度そこへ式神が茶菓を運んできた。

リュージュンとリンケイの二人は縁側に腰を下ろし、うららかな春の暖かさを楽しみながら、しばしのんびりと茶をいただいた。

犬と鼬は疲れを知らぬかのように駆け回り続けていた。

海の中を泳いでいるようだった。
水の力が、全身を押し潰そうとしてくる。

息ができない。

目の前はたちまち暗くなり、何も掴むことの出来ぬところをただがむしやりに搔き、掴もうとする。

苦しい――

耳の奥で甲高い音が鳴り響き、全身が痺れ、痙攣し、熱くなり、そしてすべての感覚は唐突に失われた。

暗い。

果てしなく、どこまでも続くかのような暗闇が目の前に、否、自分の周囲すべてに在った。
ここはどこだろう――リュージュンは、陰曹地府よりもまだ暗い空間があることを初めて知った。

陰陽道ともまた違う。
風はそよとも吹いていない。

熱くも、冷たくもない。
痛くも、苦しくもない。
体が、あってないようだ。
手を持ち上げ見下ろすが、何も見えない。
そこには聞かないのだ。

――俺は……死んだのか？

リュージュンは問うた。
頭の中で問い、それから声に出してみようとした。

だが声は聞こえない。
そこには聞かなく、音さえも存在しないのだ。

――それとも……夢を見ているのか？

夢ならば、と自分の頬をつねってみようとする。
だがやはり自分の手も、頬もどこにあるのかわからない。
そこには闇しかなく、夢も幻も何も見えないのだ。

リューシユンは突如、思い出した。

肺の病で亡くなった人間の鬼魂が、自分の中に入って来た。
その人間が投げて寄越した苦しみを彼はすべて受け取り、そのあまりの苦しさに気を失い――

そのまま、こと切れたのか。

――そんなことも、あるのかな。

リューシユンは静かに、そう思った。
慌てることも、恐れることもなかった。
不思議なほど、彼は静かな気持ちでいられた。

何故なら、玉帝が見ていることをどこかで感じているからだ。

玉帝が、何をか思って今、自分を召し上げようとしている――
そういうことを、リューシユンは誰に教えられることもなく、肌で知っていた。

どれほどの時が経っただろう。
時、というものが、今いる“ここ”には存在するのか。

そんなことを想った途端、リューシユンの周囲は壁が倒れるように開かれた。

広大で、輝き、美しい色を帯びた、それは玉帝のいます世界だった。
上天だ。

たとえどのような才を持つ者であったとしても、この光景のありのままを表現し得ることは決してないだろう。

そう思えるほどに“そこ”は広大で、美しく、聖上の彩りを放っていた。
だが、

――懐かしくて……悲しい景色だ。

上天の景色を見て、リュージュンが最初に感じたことはそういうことだった。

自分でも不思議だった。
何故「懐かしい」のか。
そして何故「悲しい」のか。

「聡明鬼」

自分は聡明鬼、そう呼ばれる土地爺なのに――

「聡明鬼」

リュージュンははっと眼を開けた。
陰陽師が上から覗き込んでいる。
慌てて身を起こし、辺りをきよろきよろと見回す。
川原の土手、草むらの上だった。

リュージュンは風の音を聞いた。
否、それは風の音にあらず、リュージュンの息の音だった。
リュージュンの体が奏でる、生の音だった。

手を見下ろせばそこに自分の手があり、頬に触ればそこに自分の顔がちゃんとある。

「気持ち好きそうに寝ていたな」リンケイはリュージュンの横に座り込んだ。

「……そうか」 リューシユンは多少ばつが悪そうに頭の後ろについた草を掻き落した。

「いや、嘘だ」 リンケイは川を見たまま言った。「気持ちの悪い午睡とはほど遠いものだったよ
うだな」

「ー」 リューシユンは陰陽師の涼しげな横顔を見た。「見てたのか」

「うん」 リンケイは川を見たまま答えた。「てっきり、死んだかと思った」

「俺が？」 リューシユンは吹いた。「あいにく俺は鬼だからな」

「そうか、言い方が違ったな」 リンケイはそこで初めて聡明鬼を見た。「十八層地獄へ落ちたか
と思った」

リューシユンは返事せずため息をついた。「楽しそうに言う事でもないんだがな」

「しかし、相当に苦しいものようだが……お前はそれが嫌ではないのか」 リンケイは真面目な
顔つきになって問うた。

“それ”とはつまり、鬼魂の匂いを体内に取り入れ、その苦しみと哀しみをすべて受け取って自らが
苦しまなければならないという、リューシユンの能力のことだ。

リューシユンははたと陰陽師を見、それから川を見渡し、それから空を見上げた。「嫌…
…と思ったことは、ないな」

「ほう」 リンケイは感心したように言い、幾度か頷いた。

「何故だ？」 リューシユンは逆に問うた。

「いや、普通に」 リンケイはにこにここと笑った。「鬼というものは、自分の快樂にならないこと
はすべからく忌避するものだからな」

「人間でも同じだろう」 リューシユンは不服げに言い返した。

「はは、確かに。鬼も、元から鬼だったわけじゃないからな」

「そうだな。元は、人間だ」

「お前には、その時の記憶があるのか」リンケイはまた問うた。

「記憶？」

「人間だった頃の、記憶が」

「ー」リューシユンは眸をさ迷わせた。「いや……俺には、ない」

「そうか」リンケイは頷いた。「いつから土地爺をやっている？」

「三年前からだ」リューシユンは答えて、それから少し身を引いた。「やけに俺について詳しく聞きたがるな。何を企んでる？」

「企む？ 俺がか？」リンケイは意外そうに眼を丸くした。

「まさかお前も、閻羅王が仕向けた何かの精霊なんじゃなかろうな」リューシユンはずっと眼を細めた。

「ふむ」リンケイは膝から頬杖を突き、楽しそうな顔になって川を眺めた。「俺に化けるとすれば、そうだな……虎かな」

「いいや、猫だろう」リューシユンは決めつけた。

「せめて豹辺りにならんか」

「お前は狩りをするにもどこか全身全霊を賭けてはいないように思える。喰うに困らん飼猫が、退屈しのぎに小鳥や鼠をいたぶるような感覚で狩るんじゃないのか」リューシユンはにこりともせず言い募った。

「手厳しいな」リンケイは苦笑した。「だが否定はできん。俺は仕事柄、よく人同士の相性を見てくれと頼まれるが」そこで急に声を潜める。「実はこれに関して真剣に占ったことがない」

「なんだって」リューシユンは思わず片眉をしかめ声を高めた。

「しい」リンケイが指を唇に当てる。「しかしこれにはわけがある」

「どんな」

「人同士の相性を占う方法というのは、実に多岐に渡っている。そして一つの方法で占えばこの上なく良い相性の者同士であったとしても、別の方法で占うと一転、最悪の関係になるということがしょっちゅう起こる」

「何だ、それ」リューシュンはもう片方の眉もしかめた。「わけがわからん」

「そう、まさしく答えはその言葉に尽きる」リンケイは聡明鬼に向かい、大きく頷いて見せた。「まこと人と人の相性とは、わけのわからんものなのだ」

「じゃあ、そう言ってやればいいじゃないか」

「そういうわけにもいかないのだ。それでは金が取れん」

「あ」

「人というものは、良きにつけ悪きにつけ、はっきりとした結果が目の前に出されぬ限りは納得しないものなのだ。あなた方の相性、そんなものわけがわかりませんか、金にならん」

「――人間そのものこそ、わけがわからん」リューシュンはもう一度ため息をついた。

「まあそれはそれとして」リンケイはするりと話を戻した。「三年前から土地爺をやっていると言ったが、その前はどこにいて何をしていたか、覚えているのか」

「――」リューシュンはまた眸をさ迷わせた。

覚えていない。

答えはそうだった。

しかし流石に、そう答えることができなかった。

否、答えてもいいのかも知れなかった。

この陰陽師、この男にであれば、そう答えても差し支えなさそうに、リューシュンには感じら

れた。

しかし、その答えはリュージュン自身に衝撃を与えるものだったのだ。

覚えていない。

何故だ？

「三年前、土地爺になった時から、お前にはその能力があったのか」リンケイはまた訊いた。

「最初はなかった」リュージュンはなかば茫然としながら答えた。「だがある日、玉帝が」

「玉帝が？」リンケイは静かに訊き返し、リュージュンは大きく息を呑んだ。

二人はしばらく黙り、景色の中の色と音だけが日常と変わらぬ営みを続けた。

「そうか、それでか」やがて陰陽師が、変わらぬ静かな声で言葉を継いだ。「どうもお前が、生粋の鬼には思えずにいた理由は」

リュージュンは返事もできずにいた。

彼はただ茫然としていた。

先刻、夢うつつに見た上天の光景――懐かしくも悲しいあの光景を、思い出していたのだ。

「俺は」リュージュンは、まるですがるような想いで陰陽師に訊ねた。「何、なんだ……どこから、来たんだ」

リンケイは少しの間静かな面持ちで聡明鬼を見、そして「はっきりとは、わからん」と答えた。「俺は上天側にいると自分ではそのつもりでいるが、玉帝の真意までは測り知ることができんからな……けれど推測できることとしては」

「何だ」

「お前は、上天より堕ちた者、なのかも知れんな」

「――」リューシユンは再び言葉を失い陰陽師を見た。「堕ちた……？」眩くように訊く。

「うん……推測だがな。推測、というよりも、空想かも知れん」

「ちょっと待て」リューシユンにはわかeni眼を覚ましたかのように慌てて片手を挙げ陰陽師を制した。「お前、まさか俺が、元々は上天にいたのだと、思ってるんじゃないよな？」

「まあ、元々上天にいて堕ちてきたのか、鬼の分際で上天に忍び込もうとして玉帝に叩き落されたのか、そこらへんは明らかではないがな」

「叩き――」

「冗談さ」リンケイは口許を隠し微かに吹いた。「堕ちるということは無論、元々は上天に棲んでいたという前提の上での話だ」

「俺……が？」

「何しろ記憶がないのだろう、お前」リンケイはリューシユンを指した。「人間であった記憶も、鬼であった記憶も。何故か。そのどちらでもなかったからだ」

「――」

神々しき光に満ちた世界。

確かに、あの世界に、あんな世界に立ち入るなど、鬼の身分で到底叶うはずがない。
なのに自分はあの景色を、確かに「懐かしい」と感じたのだ。
あれはかつて一度見た、景色なのだ。

正しいのかも、知れない――この、陰陽師は。

「玉帝と、話したのか」リンケイがまた訊く。

「――いや」リューシユンは、あの日のことを思い出しながら答えた。

玉帝が目の前に現れ、リューシユンに手を触れてあの能力を注ぎ込んだ日のことをだ。

「姿は見たが.....話はしていない」

「そうか」リンケイは少し身を乗り出した。「玉帝はどんなお姿をしておられる」

「どんな、って.....人間と似ているかな」リューシュンは天を見ながら答えた。

「美しいのか」

「そうだな」

「そうか」リンケイはふう、と息をついた。「閻羅王にも、玉帝にも会うことができるとは、世界広しといえどもお前ぐらいのものだろうな。聡明鬼」

「ああ.....そうだなあ」

「いや、そんな呑気な言葉で済むことではないぞ。これは本当に、すごいことだ」リンケイがリューシュンを見てたしなめるように言うが、そう言うリンケイ本人の声こそが呑気に聞こえてしまうものだった。「いいなあ、お前。羨ましい」

「そうかなあ」

「うん、そうだ。俺になど、逆立ちしたって叶わぬ夢のような話だ」

「そんなことないだろう。鬼魂になれば閻羅王に会えるし、神仙になれば玉帝に会える」

「どっちにも会えることはないではないか」

「転生するたびにかわりばんこにすればいいんじゃないのか」

「お前、変なことを考える奴だな」リンケイは眉をしかめて笑った。

「お前に言われるとなんだか吃驚する」リューシュンは眼を細めて呟いた。

さらさらさら、と川の水が絶え間なく流れてゆく。

枝葉や花卉、草や石、色々なものが水の上に落ち込み水の中に転がり込む。

それらすべてを呑んで、川は留まることなくさらさらさら、とただ流れ続ける。

「けど、何でー」リューシユンは言おうとした。

自分の中にわだかまる疑問を、謎を、腑に落ちない想いを言葉にしようとした。

「ー」けれど何とっていいのかわからなかった。

何で玉帝は、俺に？

何で玉帝は、俺を？

何を玉帝は、俺に？

何で俺は？

俺は、何だ？

結局はまた、そういう問いになる。

自分は、何なのか。

「嫌だと、思ったことはないのだろう」リンケイが言葉を継いだ。

「ーうん」

「川と、一緒だな」リンケイは小石を投げた。

ちよぷん、と小さな音がして、波紋が流される。

「川と？」

「ああ。川と」リンケイは遠くを見て、そして微笑んで言った。

「ーそうか」リューシユンも遠くを見た。

すべてを受け入れ、流してゆく。

少なくともそれは、あるべき姿であり絶やさざるべき道なのだろうと、リューシユンは感じていた。

11 降臨

満月の夜だ。

月は煌々と冴え渡り、小さな星など一粒たりとも見当たらない。

こんな夜に人は、鬼怪を恐れる必要もないため大らかな気持ちで屋外に莫塵を敷き、月を愛で夜空の下に咲く花を愛で楽しく語らいながら酒を呑む。

人々の赤ら顔がにこにここと緩むさまを見ることが、リューシユンは好きだった。

同じ土地爺の中にはそういうのを嫌う者も多い……というよりもむしろ嫌っている者の方が多い。

それはきっと、閻羅王がそういうものを嫌っているからなのだろうとリューシユンは思っていた。

前からそう思っていたが、最近はさらに加えて、それだからこそ自分は人々の笑顔が好きなのだろうな、とも思うのだ。

閻羅王が嫌うものを、自分は好いている。

閻羅王が好きなものを、自分は多分嫌っている。

きっと、そうなのだろう。

何故なら――

「お前は、上天から墮ちた者、なのかも知れんな」

陰陽師の声が蘇る。

まさか、と首を振る気持ちがまったくないでもない。

信じ難いと思う気持ちも、欠片ほどはある。

今リューシユンは、陰陽師がそれを言った川原の土手に一人、月明かりに照らされながら座っていた。

「あの陰陽師に呼び戻されてしまいましたね」穏やかで、どこか甘い香りのするような声が右手から聞こえた。

リュージュンが右を向くと、すぐ隣に玉帝が座っていた。

「あー」リュージュンは驚きの余り息を詰まらせた。

玉帝はリュージュンに向かって微笑んだ。

見た目は、人間とまったく変わらない。

たおやかで、透き通るような肌を持ち、長髪は金色、眸は碧――それはリュージュンと同じ色だ――月明かりに照らされながらも、逆に月に光を分け与えているかのような、美しい姿だ。

その玉帝が、リュージュンと同じように草の上に無造作に膝を立てて座っている。

「この前、お前が肺の病で亡くなった魂を取り入れた時、私が呼び寄せたのは知っていますね」玉帝は訊いた。

「――ああ」リュージュンはその時のことを思い出しながらぼんやりと返事した。

「もう少しで私の元に辿り着くというところで、陰陽師がお前を呼び戻したので、私とお前は話すことができませんでした」

「――ああ」リュージュンはまたぼんやりと答えた。

「あの時私は、お前に告げておきたいことがありました。今それを伝えます」玉帝は微笑みを絶やすことなくそこまで言い、それから月明かりの下でも変わらずさらさらさら、と流れ続ける川を見遣った。

リュージュンは少し待った。

「もうすぐ、一蔀（いちぼう）の境の年が来ます」玉帝は言った。

「イチボウ？」リュージュンは訊いた。

「はい。一蔀とは干支が一巡する六十年の二十一倍、つまり千二百六十年のことです。これが終わり、そしてまた始まるその境の年には、大きな変革がこの世にもたらされます」玉帝は説明した。

「変革……」リューシユンは呟いた。

「どのようなことが起きるのか、この時点ではっきりと断言することはできません」玉帝は静かに続けた。「けれど私には、今まで起きてきたどの変革よりも恐ろしい、凄惨な事態に、このたびの葦の移り変わりの時には陥る予感がします」

「――」リューシユンは瞬きも忘れ、玉帝の横顔を食い入るように見つめた。

「それはたぶん、閻羅王に力を貸す者が現れることによってそうなるのだらうと思われます」

「力を貸す？ 閻羅王に？ 誰が？」リューシユンは身を乗り出して訊ねた。

「それがまったくわからないのです」玉帝はリューシユンを見た。微笑みは消えていた。「まったく、闇に隠されたように見えない」

「――」リューシユンは再び言葉を失った。

「けれどそれができるのは鬼として陰曹地府へ向かった者、つまり人間であった者に違いありません」玉帝は再び川を見遣った。「だからこそ、お前に力を授けたのです」

「力を――つまり、鬼魂を上天に行かせる、ための」リューシユンは確認した。

「はい」玉帝はリューシユンを見た。またその顔は微笑んでいる。「陰曹地府へ行かせないために」

「そうだったのか……けど、俺一人ではすべての鬼魂を上天に行かせるなんて無理だろう」リューシユンは訊いた。

「確かに、そうですね」玉帝は微笑んだまま頷いた。

リューシユンはその仕草に、ふと陰陽師を思い出した。

「そこでこれからお前には、どの人間が閻羅王に力を貸そうとするのか、その者を探し出して欲しいのです」

「えっ」リューシユンは眼を丸くした。「探す？」

「はい」玉帝は再び頷いた。「そしてその者が鬼魂となるや、ただちにお前の中に取り込んで、陰曹地府へ向かわぬようにして欲しいのです」

「――」リューションはやはり瞬きを忘れていた。

「やってくれますね」玉帝の微笑みは変わらず、そして玉帝の、リューションに向けられた想いもまったく変わらないようだった。

リューションには、それがわかったのだ。

玉帝が、次の言葉を続けるそれよりも前から――否、元よりずっと。

玉帝は言った。「我が弟よ」

12 感受

何だろう――

リンケイは床の中でふと眼を開けた。

今しがた何かの夢を見たのだろうか。
それが自分でもよくわからずにいる。
ただわかるのは――

自分の中に流れる血が、どくどくと少しばかり強く体を揺すぶっていることだ。
いつもより、強く――激しく。

このような状態になる時というのは――色々とあるが大概は、何か陽世の外から来たものの存在が在る時だ。

かさかさかさ

障子の向こうで葉擦れが聞こえる。
リョーマもまた、何かを感じ胸騒ぎを覚えているのだろう。

かさかさかさ
かさかさ

けれどリンケイは、いつものようにただ「何かがいる」というだけではない、もっと別の感覚が今、自分の中にあると気づいていた。

リョーマの動きにしても、いつもの“鬼怪”の気配であるならばむしろもっと、落ち着いて鎮座しているはずだ。

かさかさ

かさかさかさ

そのリョーマが、今こんなにも動き回っている――何かに怯えているのだろうか――否。

アオオオオオオ

唐突に、子犬は遠吠えをした。

リンケイは起き上がり、立って障子を静かに開けた。

オオオオオオン

リョーマの遠吠えは、ほぼ真上に懸かる月に向けられたもののように見えた。
そしてその声は今日、どこか物悲しげな、切なげなものに聞こえるのだ。

リンケイは子犬の所作を見つめ、それから月を見上げた。

いて、くれている

突然に、そう思った。

リンケイは月を見つめる眸をはっと見開いた。

何かが、いてくれて、いる。

そうか.....

リンケイは、くるくると無闇にその場で歩き回り、くんくんと矢鱈に鼻を鳴らし、しまいには地面に伏せて頬を土になすりつけまでするリョーマの所作を見下ろした。

「これは……恋のようだな」

眩き、そしてふっと微笑む。

端的な言葉ではあるが、何かに――誰かに深く愛されていることを知り、自らもその愛に答えたいと願う、そしてもっと深く、この愛を感じていたいと思うし、自らも深く伝えたいと思う。

その想いが今リンケイの、そしておそらくはリョーマの、血の流れを強く激しくしているのだ。

けれど何故今、その“存在”がここ陽世に来ているのか？

心の内なる問いとともに、答えも心の内にあった。
聡明鬼だ。

きっとその“存在”は、聡明鬼に会う為に今ここ陽世に来ているのだ。

アオオオオオン

もう一度、リョーマが月に吼えた。

「いいなあ」リンケイはため息をついた。「うらやましいぞ、聡明鬼」



何だ――

閻羅王はしばし息を潜め、たった今自分の中に生まれた妙なざわめきの正体を見極めようとした。

胸がざわつく。

何かがやって来たのか？

ふと思う。

たとえば精霊――この前の、ふざけた鼬（いたち）のような類が、また間違っただろうか。

しかし――

閻羅王は今、体が何かに締め付けられているかのような、窮屈な感覚を味わっていた。

これが長く続けば、顔をあおのかせてぜいぜいと喘がねばならなくなりそうな気がする、そんな、じんわりとした苦しみだ。

卑しい鬼や精霊ごときが来たくらいではこんな“力”を感じることなどない。

圧される――

そうだ。

今閻羅王が感じているのは森羅殿が、否、陰府全体が押し潰されそうになっているという、恐るべき圧迫感なのだ。

これ、は――

汗が滲む。

来て、いるのか。

閻羅王は牛頭馬頭を呼ぼうかと思った、だがそれはやめた。

奴らに、この感覚が同様にあるのかどうか疑問だ。

少しでも陰間の者としての能力を持っているならば、当然感じてはいるだろう。

しかしだからといって、奴らにどうすべきか手立てを思いつけるわけがない。

どうする、つもりだ――

閻羅王は強く眉を寄せ待った。

まさか今すぐに、陰陽間の戦を始めるつもりではないだろうが、しかし――

生死簿――

突然に、そのことを思い出す。

どちらにしろ、陰曹地府に堕ちるべき鬼魂をかすめ取って行くだけでは気が済まないということだな。

それから、聡明鬼のことを思い出す。

あいつは、またこの陰府へと、やって来るのだろうか――何食わぬ顔をして。

「上等だ」

口元に、不敵な笑みを閻羅王は浮かべた。

「心してかかって来るがよいわ」



いい夜だ。

月が、金色に眩く輝いている。

わざと、ゆっくり歩く。

敢えて、のんびり歩く。

時々立ち止まり、瓢箪から酒を直に飲む。

幸せだ。

今ならば、天から何が転げ落ちてこようが、逆に地獄へ転がり落ちてしまおうが、何だって許せる気がする。

人というのは、簡単なものだ。

実に簡単なことで、幸せにも不幸せにもなることができる。

明日、とても辛いことが起きるのかも知れない。
だがその翌日、また幸せなことが起きるのだろう。
その繰り返しだ。

どさり、と草の上に座る。
懐から干魚を取り出して噛む。

月は真上にある。

瓢箪から酒を呷り、ふう、と大きく息をついて、それからばさり、と仰向けに寝転ぶ。
青い匂いが鼻に届く。
眼を閉じて深く息を吸い込む。

それを思い切り吐き出すはずだった。

だがそれよりも速く、胸のど真ん中にざくり、と刃が差し込まれた。

息は紅く染まり、月は凍ったかのように見え、最期に視界に入ったのは腰に下げていた巾着を
むしり取る手と、自分を刺し殺した者の後ろ頭だった。

大気を掻くようにして身を起こし、走る。
どこに向かえばいいのか。
だが、走らねばならない。

走る。
月があるはずなのに、辺りは暗い。
道がそこにあるのかもわからない。
大地を踏んでいるのかすらもはっきりしない。
それでも、走る。

誰か――助けて――

叫ぶ、否、叫んだつもりだが自分の声が聞こえない。

誰か――

「おい。こっちだ」

突然聞こえた声にはっとして立ち止まる。

鬼が、立っていた。

ああ、陰曹地府からの迎えか――地獄に、行くのか――
そう思う。

「心配するな」

鬼が、笑う。

つられて笑おうとしたが、自分の顔がわからない。
泣きたくなる。

鬼が、すう、と息を吸う。

次の瞬間、すべてのものが見えた。

自分の、来し方。

親、師、友、妻、子。

自分を刺して逃げた、盗賊。

夜空と、風と、草と、月。

やっと、涙が出た。

人というのは、簡単なものだ。

実に簡単なことで、生きることも死ぬこともできる――

「辛かったな」

鬼が、痛みと悲しみに顔を歪めながら、そう言う。

ふふふ。

確かに、そうだ。

けれど大丈夫だ。

すぐにまた、幸せな想いに包まれるのさ。

だからあんたも「心配するな」と言ったんだろう。

そうだ。

その通りだー

玉帝の姿がそこに在り、手を差し伸べている。

ああ。

なんて美しく穢れなきお姿だろう。

手を、伸ばす。

玉帝がその手を取り、明るく温かいところへと引き上げてゆく。

幸せだ。



オオオオオオン

「わかったよ、リョーマ」リンケイはふっと息をついた。「逢いたいんだろう。無理だろうとは思うが」指を唇に当て、呪を誦える。

子犬はたちどころに巨大な馬と龍の混合物へと変化した。

「せっかくの月夜だ」リンケイはその背に跨る。「法具を集めに行っておこうー間もなく使うことになりそうな気がする」

13 邂逅

石を拾い、形を確かめ、あるものは捨てあるものは懐紙にくるむ。

月夜に照らされた磯波は、さわさわと浜に寄せては返す。

リンケイが法具とするための石を物色している間、リョーマは時折波間から飛び出してはまたざぶんと海中に飛び込むことを繰り返していた。

頭が龍、体が馬というその奇異な体が、月明かりを背にし空中で鮮やかに舞う。

幾度か繰り返した後、リョーマはざばりと海から飛び出し、そのまま浜辺へと降りた。

「採れたか」リンケイが手を差し伸べる。

リョーマは啜っていた二枚貝をその手の上に落す。

リンケイは腰から払塵を抜き取り、貝殻の合わせ目に差し込みそれを開けた。

黒く輝く大玉の真珠がその中に在った。

「うん。いい形だ」リンケイは満足げに頷いた。「これに呪を吹き込めば、かなりの破壊力を持つことになるだろうな……よしリョーマ、次は白真珠を探して来なさい、治癒の術に使うためにな」リョーマの体を撫でる。

ぐるる

一声答えるやリョーマは再び天に昇り、そしてまっ逆さまに海へと潜り込んでいった。

破壊……か。

リンケイは、ふ、と息をついた。

そして、治癒。

一体、何を？

何を破壊し、誰を治癒するのか？

実際のところ、何なのかはわからない。

けれど、遠からずそれをしなければならぬ日がきっとやって来るという確信めいたものが、リンケイの胸中には在った。

それは、玉帝の存在を今宵感じているからなのかも知れない。

ほの甘く、心をくすぐるような、言葉にならぬ安堵と慕情。

いい大人の顔をして生きてはいるが、実は自分はこの間にも小さく弱き生き物なのだ実感せざるを得ない。

だがそれは、決して否定的な感情ではないのだ。

小さく、弱い。

それでいい。

何故ならば玉帝が、いて、くださるからだ――

「綺麗な黒真珠ですね」声がした。

はっとして顔を上げると、いつの間に来たのか一人の人がそこに立っていた。

人――？

リンケイはしばし瞬きを忘れた。

月が出ているとはいえ、深い夜の刻だ。

それなのに、まるで太陽のようにその人は輝いていた。

金色の長髪がそういう風に見せるのだろうか。

眸は碧――どこかで見た、色だ――そう、この色は――

「聡明鬼」リンケイは声もなく呟いていた。

そう、あの鬼の眸と、同じ色だ。

「彼は、私の弟なのです」玉帝は静かに告げた。「あなたも、少し気づいていたようですね」

「弟――」リンケイはそれでも、頭を強く揺すぶられたような衝撃を味わった。「なんと……」

「ただ、彼にはもう、上天にいた時の記憶はまったくありません」玉帝はほんのわずか悲しげに目を伏せた。「然るべき理由により、私は彼を上天から追放しました」

「追放？」リンケイは訊き返した。「何かまた、よからぬことをしてかしたのですか？」訊いてしまってから、あ、と口を押える。「これは大変な無礼を……弟君のことを」

「気にしないでください」玉帝はふわりと笑った。心臓を温かくさせる微笑だ。「もう今は、違うのですから……けれどそれでも私は」もう一度、目を伏せる。「彼を、完全に心から断ち切ってしまえずにいるのです」

「それは」リンケイは、己の血潮の流れが今も強く自分の中に踊っていることを感じながら訊ねた。「この黒真珠を使わねばならぬようなことが、間もなく起こるから……ですか？」

「あなたにこそ聡明という名がふさわしいかも知れません」玉帝はまた微笑んだ。

「勿体無い」リンケイは首を垂れた。

「彼を……弟を、助けてくださるのですね」玉帝はリンケイの手にある黒真珠の上に、その美しい手をかざした。

真珠の輝きが一層強くなる。

「微力ながら」リンケイは答えた。

「私は彼が、この陽世においてさぞや苦しく辛い日々を生きねばならぬことになるのだろうと思っていました。ところが、あなたに出会い、あの少年に出会い、土地爺と降妖師に出会い――こんなにも幸せそうに、楽しそうに生きる彼を見ることになろうとは、まったく考えもしませんでした」玉帝は言った。

「そうでしたか」リンケイはふと頬をゆるめた。「私も――他の者たちもきつと、聡明鬼に会えて楽しいと思っていますよ」

「人間とはなんと素晴らしいものなのだろうかと、私は改めて思うのです」玉帝は感慨深げに深く息を吸い、そう言葉をつなげた。

「玉帝様に恥じぬよう、生きているだけのことです」リンケイは自分がまさに今至福の中にいるのだということを感じているのだった。

「私は安心して上天に戻ることができます」玉帝は音もなく浮かび上がった。「もう一度、あなたをお願いします。どうか私の弟の力になってやってください」みるみるその姿は天に昇ってゆく。

「玉帝様」リンケイは上空を仰ぎ、呼びかけた。「私もあなた様にお願いがあります。弟君の――聡明鬼の記憶を、上天にいた時の思い出を戻してやっていただけませんか。私も是非、それを見たい――あいつの口から話してもらいたい、それを聞きたい」

「それはできません」小さくなった玉帝の声が空から降る。「彼はもう二度と上天へは戻れず、記憶も二度と戻りません」

「――」リンケイはもう何も言えなかった。

玉帝の放っていた慈愛の光と熱が消えたからなのか、最後に聞いた玉帝の言葉があまりにも悲しいものだったからなのかわからないが、その後リョーマがやっと見つけた白真珠の貝を啜えて海から飛び上がり傍に佇むまで、リンケイは砂の上に座り込んだまま身動きすらできずにいたのだった。

14 探り合い

リンケイが海辺で玉帝と邂逅していた頃、リューシュンの方は陰陽界を独り歩いていた。満月の夜、いつものように森羅殿にて閻羅王の催す宴が開かれているのだ。

だが此度の宴に参加するかについて、リューシュンは実のところ少し迷っていた。それは他でもない、玉帝に彼もまた遭ったからだ。

「我が弟よ」

別れ際、玉帝は確かにそう言った。
リューシュンの心中、いつもと同じとは言えなかった。

驚愕もある。
信じ難い気持ちもある。
玉帝が自分を試しているのではないかという疑いもある。

そしてほっとする想いも、ある。

そんな入り組んだ心根を持ったまま、彼はついに森羅殿へと辿り着いた。

宴はとうに始まっている。
賑やかな音楽や話し声、笑い声が聞こえてきていた。

リューシュンはゆっくりと戸口に立ち、しばらく佇んだまま中の様子を眺め渡した。

一人、また一人と聡明鬼の到着に気づいた者たちは、言葉と息を呑み込んでその場に釘付けになった。

そうしてやがて殿内は、水を打ったように静まり返ったのだ。

リューシュンは殿内の一番奥、彼から最も遠く離れたところから、貫くがごとく自分に送られてくる視線のあることに直ちに気づいた。

そちらを見遣る、しかしそうするまでもなくそれが閻羅王のものだということも知っていた。

閻羅王とリューシユンは、他の者が存在しないかのように互いに睨み合った。

「腹が減ったな」やがてリューシユンは声にした。「飯を持って来てくれ」眸は閻羅王にひたと宛てられたままだ。

「はい、ただ今」小鬼が慌てて走り回る。

「酒もな」リューシユンはまだ閻羅王を見据えたまま付け足した。

「はい」小鬼が悲鳴のような声で答える。

他の土地爺たちはもはや先程までの談笑に戻ることもできず、閻羅王と聡明鬼の間に飛び散る閃光にただ肝を冷やすばかりだ。

「聡明鬼」閻羅王がことさら穏やかな声音で呼びかける。

それが却って、聞く者たちの――無論リューシユンを除いて――神経を、冷やりと凍りつかせる。

「何だ」リューシユンは不敵の微笑すら眸にたたえて答える。

「玉帝に、お前は会ったのか」閻羅王はまるで父が子に問うようにそう訊いた。

殿内の空気が、改めて張り詰める。

玉帝――？

全員の顔が、あるまじきものを見る顔に変わる。

「いいや」リューシユンはさらりと否定した。「なんでだ？」逆に問う。

「ふん」閻羅王は鼻先で笑う。「特に、どうという根拠もないが……お前は、玉帝とつながりがあるのではないかと思ってな」

殿内がにわかになぞめく。

「なんと」

「聡明鬼が？」

「玉帝と？」

「どういうことだ？」

「土地爺の聡明鬼と、玉帝が？」

「鬼と、上天の主が？」

「おい、いい加減なことを言うなよ」リューシユンは苦笑した。「皆が戸惑ってるじゃないか。俺は玉帝とは何の関係もないぞ」

「そうだな」閻羅王はあっさり認め、からからと笑った。「なに、宴の席を盛り立てるための冗談にすぎん。忘れてくれ」

「面白くねえ冗談だ」リューシユンもからからと笑った、が他の鬼たちは笑うどころではなかった。

笑っているリューシユンにしても、胸中においては笑うどころではなかったのだ。彼は笑いながら、殿内をくまなく見渡した。

今この中に、閻羅王に力を貸そうとする奴が紛れ込んでいるのか――？

そいつはまだ陽世で人間として生きているのか？

それとも今すでに鬼となっており、つぎに投胎しその後閻羅王に力を貸すのか？

そいつは今、一体どんな姿でどこに居て何をしているんだ？

小鬼が料理と酒を運んで来、リューシユンはそれを口にしながらも、頭の中ではそのことばかりがよぎっていた。

「聡明鬼」背後から呼びかけられ、振り向くとコントクだった。「今日もなかなかの聡明鬼っぷりだな」笑いながら杯を差し上げる。

「どういう意味だよ」リューシユンは吹いて、自分の杯を持ち上げコントクのものに当てる。

「先ほど閻羅王様が玉帝のことを言っていたが、あれは何か意味があるのか？」コントクは杯を口に運びながらさりげなく訊く。「まさかとは思うが」

「まさか、だよ」リューシユンは肩をすくめた。「大方この前言ってた、生死簿の件がまだ片付いてないんだろう。あれを玉帝のせいにして、おまけに俺のせいにもして、それで頭がこんがらがっていると見える」酒をくいと呷る。「迷惑な話だ」

「ははは」コントクはさすがに大っぴらに笑うこともできぬと見え、杯の陰で慎ましやかに笑った。「まあ、今宵は飲もう」小鬼から酒瓶を受け取り、リューシユンの杯を満たす。

「ああ」リューシユンも返杯し、どうにか宴はいつものように進み始めた。



鼬（いたち）は遠くからリンケイを見つけていた。

見まがうはずもなかった。

自分を、精霊と成りひとまずは落ち着いていた地から突然引きずり出し、土地爺に化けさせ陰曹地府へ落したばかりか、自分に犬をけしかけ散々な目に合わせてくれた憎き人間だ――というのは無論逆恨み以外のなにものでもないのだったが、鼬にとってそれは正当なる怨恨の因に他ならなかった。

その憎き陰陽師が今、満月の光の下砂浜にぼんやりと座り込んでいる。

どのように懲らしめてやろうか。

鼬は遠巻きながら息と気配を殺し、じっと様子をうかがった。

距離が離れているとはいえ、相手は陰陽師、しかもなかなかの手練、法力強き物知りだと鼬は見ていた。

ゆめゆめ油断してはならない。

それに奴には、あの恐るべき獣の従者がついていて――鼬にとって実はそれが一番の厄介事なのだった。

あの、リョーマと呼ばれていた、犬。

しかししばらく見ていたところ、今宵その犬はあの男のそばに侍っていないようだった。
陰陽師は、独りだ。
聡明鬼も、いない。

独りならば、なんとか一泡吹かせてやることも叶わぬことではないんじゃないか――鼬はそう考え、逸る心を抑えて作戦を立てた。

だがやるべき事は、実に簡単なのだった。
自分はただ、あの男の目の前を何食わぬ顔して通り過ぎればよい。

それだけで、人間であるあの者には不吉なことが起きる。
「鼬の道切り」と人が呼び忌み嫌う、呪いのひとつである。

今陰陽師は独り砂浜に、魂を抜かれたかのように茫然と座っている。
動きもしない相手の目の前を、すたすたと通り過ぎるだけでよい。

鼬は走り出した。
足元は砂、さらに磯波の寄せては返す音により、走る音はきれいに消される。
鼬は走りながら、ききき、と忍び笑いを洩らした。

眼にももの見せてくれる。

陰陽師の姿が段々と近づいてくる。
それにつれて脚の運びも速くなってゆく。

あと少し。
あと数歩で。

今、陰陽師の前に差し掛からんとしたその時。

ざぼん、と大きな音を立て、海の中から巨大な龍と馬の混合した生き物が飛び出した。

鼬は身を凍りつかせ、砂を蹴散らして立ち止まり、月を背に宙に舞うリョーマの姿に眼を奪われた。

そしてリョーマと鼬の眼が合った。

慌てて逸らした鼬の眼に、今度は自分に向けられた陰陽師の、どこか疲れたような視線が突き刺さった。

「あ」鼬は一瞬戸惑ったが、すぐにまた走り出した。

とにかくこの人間の目の前を通り過ぎてしまえば――

「キュウキュウニヨリツリヨウ」リンケイが虚ろげに呟いた。

その瞬間、鼬の体は上空に吹っ飛んだ。

抗う術もなかった。

陰陽師の目の前を走り抜けること叶わず、雑霊としてあっさりと祓われたのだ。

そして彼が吹っ飛ばされた先には、リョーマが大きく口を開けて待っていた。

龍の口がぱくり、と鼬の体を甘く啜え、そのまま海中へざんぶと潜り込んだ。

満月の下でリンケイは頬杖をつき、そっとため息をついた。

「恐らく、正法による呪具や法具では間に合わないのだろうな」

主人の憂える姿にも介さず、きいきいと悲鳴を挙げる鼬を啜えたままざんぶ、ざんぶと繰り返したり入ったり、リョーマは楽しげに遊び続けた。

その鬼の姿を見た者には死が訪れる、といわれていた。

偶発的なものなのかも知れないが、水死、転落死、食中り、轢死その他突然のように死が訪れる。

鬼自らもそのことを知っており、なので自分の姿を見た人間についてはその後、陰からその様子を伺うことにしている。

そして自分を見た人間が死んだ時には、遠慮なくその死骸を喰らう。

その人間が埋められた墓まで行き、夜中にそれを暴いて喰らうのだ。

自分を見たせいで死んだものは、自分のものだという理屈だ。

故人の墓を荒らされ、骨の一本も残さず喰らい尽くされる遺族の嘆きは地を震わすほどだった。

しかし復讐をしようとその鬼、無情鬼に立ち向かう者はほとんどおらず、もしいたとしてもその場は逃げられ、そして後日その者までもが突然死を迎え、同じく無常鬼に喰らわれてしまうという有様なのだ。

無常鬼を見たのち死んだ者の遺族は、大概泣き寝入りをするしかなかった。

降妖師に頼む者もかつては無論いた。

無常鬼を封じ、二度と陽世の人間の目に留まることのないようにしてくれと。

だが、そういった依頼に完璧にこたえることのできた降妖師は今までに一人もいなかったのだ。

理由のひとつには、そもそもそれを引き受ける降妖師が少ないということがあった。

このすばしっこい鬼に、万が一逃げられたとしたら？

そうすると次に骸となって喰られるのは、降妖師本人だということになってしまう。

降妖師の世界にいるのは、危険を回避する才に長けた者ばかりのようだった。

そんなわけで、今となってはもはや降妖師にこの無常鬼の退治、封印を依頼しようとする者すらいなくなっていた。

しかしここ最近になって、降妖師に代わりもしかすると力になってくれるのではないかと陰で囁かれ始めた者があった。

なんでも土地爺の身分でありながら陰曹地府の閻羅王に恭順の意など一切示さず、好き勝手に振る舞い、そして何故か閻羅王でさえもその力を恐れているようだという。

その者、聡明鬼と呼ばれているらしい。

噂は静かに広まってゆき、町の人々の心にほんの一筋の光が差し込まれた。

人々の口に聡明鬼の名の昇る機会が増え、ついに有志によって、聡明鬼が治めている町まで行き無常鬼を退治してくれるよう依頼することとなった。

だがそうなる時までを、無常鬼がのほほんと何も知らずに過していたわけではなかった。

たとえ無情鬼がその姿を見せていないとしても、それはその場に無常鬼がいないということではなかったのだ。

無常鬼は巧妙に姿を隠し、人々が聡明鬼について話していることをちゃんと耳そばだてて聞いていた。

無常鬼は土地爺ではないので、聡明鬼を見たことはなかった。

そして自分が一介の土地爺風情に退治されるなど露ほども心配したり気にかけてたりしてはいなかった。

そんな奴、片手でひねりつぶしてやる。

無常鬼は冷淡に笑い、いつも被っている黒い帽子を目下まで下げた。

だがそれよりも無情鬼にとって、人々がその土地爺に希望を託し笑顔を取り戻しかけていることが気に食わなかった。

なので、土地爺など恐るるに足りないのは勿論だが、その前にその希望の芽を摘んでおいてやろうと考えた。

その町から聡明鬼の治める町までは、山を二つも越えなければならなかった。

有志三名が連れ立って旅に出たのだが、一つ目の山の頂に差し掛かったところで、無常鬼はおもむろに彼らの前に立ちはだかったのだ。

まさか自分たちを追って無常鬼が姿を見せるとは予想だにしていなかった有志たちは衝撃を受け、一人は心に異常を来したあげく崖から転落し息絶えた。

二人目は山を下りかけたところで蛇に噛まれ、その猛毒で麓に辿り着く前にこと切れた。

三人目は、何がなんでも聡明鬼に会い事の次第を伝えるのだという強い意志を持ち、二つ目の山に臨んだが、季節外れの雪嵐に出遭い道半ばで斃れたのだった。

無常鬼は会心の結果に高笑いし、まずは崖下で原型を留めぬ様に成り果てている男の骸を拾いたいらげた。

それから蛇の毒にしてやられた男の骸を麓近くの林の中で見つけ、両手でその躰を捻って毒を絞り出してからがつつと喰らった。

さらに二つ目の山に飛び、山頂近くで斃れている男の半分凍った亡骸をがりがりとして齧り尽くした。

さあ、これで待てども待てども帰って来ぬ輩どもの安否にいつまでも心惑わせ続けるがよい。

いくらお前たちが祈ろうとも願おうとも、お前たちの希望を託した者どもはこの世にすでにいないのだ。

無常鬼は、自分の退治されることを望んでいる町の人々に向け哄笑を放った。

莫迦どもめ。



三人目の男は、自分が斃れたことに気づかずにいた。

ただ、猛烈に寒いという思いだけが彼の心を占めていた。

けれど、自分には行かねばならない。

こんな寒さなどものともせず、山を下り聡明鬼を訪ね、無常鬼の退治を頼むのだ。

ただそのために町の皆の希望と期待を背負って、ここまでやって来たのだ。

よりによって道中、まさか無常鬼に出くわすとは想定していなかったけれども、しかしそれでも当初の目的を消し去ることなどできない。

他の二人は死んだ。

だから自分だけは、なんとか聡明鬼の元へ行かなければ、必ずそうしなければならないのだ。
絶対に。

彼は何度も何度もそのことを心の中で繰り返し、極寒の中両腕を顔の前にかざして歩き続けた。
。

歯ががちがちと鳴る。
体も止めどなく震える。

「聡明鬼、聡明鬼に」
繰り返そう呟く。
「聡明鬼」

どこまでも、吹雪の道は永遠に続くかのようにだった。

聡明鬼。
聡明鬼。
聡明鬼――



リューシユンは宴の後ふたたび陰陽界を渡り、陽世へと向かっていた。

歩きながらもやはり考えるのは、一体誰が、どんな奴が閻羅王に力を貸すのか、だ。

今日の宴で眺め回したところ、やはりそこまでの力を持っていそうに見える者は見当たらなかった。

コントクは、共に精霊を封じ僵死鬼を上天へやったという事もありその賢さに一目は置くが彼

が閻羅王に力を貸すなどとはとても想像がつかなかった。

とはいえそれはコントクが今コントクにいるからであって、この先もしや転生した時には人格もがらりと変わるかも知れないし、さらにその後鬼魂となり閻羅王の元へ行った暁には、他を寄せ付けぬほどの絶大なる力を有していないとも限らない。

力を――

だがしかし、玉帝の言っていたように、今までの部の移り変わりの時とは比べ物にならぬほどの凄惨な変革を起こし得る力とは、いったいどのような力なのか。

それすらも、今のリューシュンにはわかっていないのだ。

すべてを駆逐する破壊力なのか。

人々をいちどきに死に至らしめるほどの、恐るべき妖力なのか。

変革とは、何なのだ――

「聡明鬼」

ごく小さく、呼ばれた気がした。

立ち止まる。

しばらく耳を澄ませるが、何も聞こえない。

気のせいかな？

再び歩き出そうと足を運ぶ。

「聡明鬼」

またしても、呼ばれる。

「陰陽師か？」リューシュンはそう聞いてから、まさか、と自分で否定した。

ここは陰陽界、鬼にしか来ることはできないところだ。

「寒い……」

小さな、虫の鳴く音のような声だ。

鬼魂か？

リュージュンの心の中に、灯がともるようにそういった考えが浮かぶ。

「お前……どこにいる？」リュージュンは訊ねた。「聡明鬼は、俺だ。ここにいる俺だ」ぐるりと辺りを見回す。

陰陽界は暗く、何者の姿も映さない。

リュージュンは、しばらくその場で様子を伺った。

だがいつまで待っても、鬼魂の気配を感じることもなく、その匂いを嗅ぐこともなかった。

やはり、幻覚なのか？

歩き出す。

十歩ほど行ったところで、

「聡明鬼」

また声がする。

声というよりも、そう呼ぶ言葉が、届く。

言霊、というものだろうか。

「どこにいるんだよ」リュージュンはもどかしくなった。「鬼魂なら、俺の中に入って来い」

「寒い……でも、行かねば」言霊は、もしかしたらリュージュンが自分の存在に気づいていることを知らないのかも知れなかった。「何があっても、聡明鬼に会って、話をせねば……」ただそういう、切ないまでの想いがどこからともなく言葉を送って寄越すのだ。

「寒いところに、いるのか」リュージュンは考えた。「寒さのせいで死んだ鬼魂ということか？ それならば……ここ最近、季節外れの吹雪が襲ったと聞いた、あの山の中か」

リューシユンは走り出した。
とある天心地胆を探す。

「寒い」

「聡明鬼」

「話すのだ」

「無常鬼を」

「退治して欲しいと」

「頼むのだ」

「聡明鬼」

「寒い」……

リューシユンが走る間、言霊は絶えず聞こえてきた。
やがて目当ての天心地胆が見えて来、リューシユンは大きく跳躍してその中に飛び込んだ。



雪嵐自体はすでに止んでおり、間もなく暁を迎える頃の、まだ暗い山の中の光景だった。
ひんやりとした陽世の大気を、リューシユンは思うさま吸い込む。

「いるか」声に出して呼ぶ。「聡明鬼だ。ここにいる」

途端、確かに死の匂いがリューシユンを見つけ、必死ともいえるほど大急ぎで近づいてきた。

「聡明鬼」

「聡明鬼」

「聡明鬼」

近づくほどに、言霊が興奮気味にその名を繰り返す。

「そうだ。俺が聡明鬼だ」答える。

そして言霊は死の匂いとして、リューションの中に取り込まれた。

孤独だった。

寒く、体は凍りつきそうになる。

足は惰性で前に出続けるが、もはや自分が歩いているという感覚すらなかった。

歩いているのではなく、空を飛んでいるようだ。

そんな中で突然、まったく出し抜けに、その声は聞こえたのだ。

「いるか」

ハッとして眼を見開く。

「聡明鬼だ。ここにいる」

声、なのか――？

「聡明鬼」

それよりも反射的に、そう呼んでいた。

「聡明鬼」

走る。

なんだろう、何か温かいものが、そこにある――あってくれて、いる。

「聡明鬼」

ただそう呼ぶ。

呼び続けながら走る。

何も見えないが、感じるのだ。

まるで太陽のような、何にも遮られることのない、何かに灯されているものでもない、それ自体の中から光と熱を、永遠に放ちつづけている存在が、ある。

あつて、くれている。

「聡明鬼」

「そうだ。俺が聡明鬼だ」

これが、聡明鬼なのか。

これが、そうだったのか。

そしてそれが、見えた。

鬼の姿をしている。

少し意外だった。

てっきり、玉帝様のように神々しい方が待ってくれているのだとばかり思っていたが、そうではなく――

鬼だ。

否、聡明鬼、その名からして鬼であることは知っていたはずだ。

なのに鬼がそこにいて、驚くというのも変だ。

そんなことを思ったのはそれでも、ほんの僅かの間だけだった。

その中に、まるで自分が煙と化したかのように、吸い込まれてゆくのを感じる。

聡明鬼の中に、自分のすべてが取り込まれたのだ。

これでやっと、聡明鬼と話ができる。

そして何よりも、極寒と吹雪からすっかり抜け出せたことが、至福だった。

思わず笑みがこぼれる。

「珍しいな」聡明鬼の声が聞こえる。

先刻よりも遥かに近く、明瞭だ。

顔を上げると、鮮明にその鬼の姿がそこに見えた。

腕組みをして立っている。

肌は浅黒く、漆黒の髪は蓬髪で、角と牙を持つ、まさに鬼そのものの姿だ。

だがその眸の色は碧、底なしかと思わせるほどに澄んでいる。

鬼の持つ眸とは思えぬほどの、気高き色だ。

「珍しい……？」戸惑いながら、訊く。

「ああ」聡明鬼は腕組みしたまま頷く。「死んで俺の中に入った鬼魂で、にこにこ笑うのはお前が初めてだ」

「そうなのか」さらに笑う。

寒さから解放されたというのに加え、えもいわれぬほどの幸福感が全身を包む、だがふと、

「――死ん、で……？」

聡明鬼の言った言葉に身を固まらせる。

「誰が？」

「え？」聡明鬼もまた驚いた。「お前……気づいていないのか」

「……俺は、死んだのか？」訊く。「いつ？」

だが脳裏にはすぐに、先に逝ってしまった二人の仲間の姿と、恐らく自分の最期の地となったのであろう雪山の景色とが浮かんでくる。

「道理で、俺の中に入ってきてるのにお前の生まれた時からの出来事が見えてこないわけだ」聡明鬼は納得したように頷きを繰り返す。

何のことなのかは、よくわからない。

「俺、は……」

「無常鬼、というんだな」聡明鬼は静かな声で確認した。「お前と、あと二人の前に突然そいつが現れた。そして仲間二人が死んだ――ただそれだけが今、見える」

「――」言葉が出てこない。

だが、何も言わなくても解ってもらえたのだ。

一からすべてを説明し、そして理解と協力を頼まなければならない、もし断られたとしても何とか喰らいついて、地にひれ伏してでも――そんなことをずっと思ってきた、だがそんな必要はまったくなかったのだ。

「俺に、無常鬼を退治して欲しいんだな。町の皆のために」聡明鬼は続けた。「わかったよ。無常鬼を、退治しよう」

「本当に」唇が震える。

「ああ。任せておけ」にこり、と聡明鬼が大きく笑った。

堰を切ったように涙が迸る。

やっと、やっと皆の願いが聞き届けられた。

聡明鬼が、無常鬼を、あの悪鬼を倒してくれると約束してくれた。

皆にこのことを知らせに戻ることが出来ないのが、少しく無念ではあるけれど。先に逝った二人にも。

お前たちの死は無駄にはならなかったぞ。

そうして俺の死も。

突然、生れ落ちた瞬間から死ぬまでに見たすべての景色がめくるめく疾さで現れた。

父、母、親族、友、師、妻、子――

崩れ落ちるように、へたりこむ。

そのまま仰向けに寝そべる。

地の上ではなく、宙に浮いている感じだ。

温かく、心地好い。

「お前は、温かいな……聡明鬼」しみじみと言う。

「温かい？ 俺がか？」聡明鬼は意外そうに訊いた。

「ああ。温かい……さっきまでの凍えそうな寒さが嘘のようだ。お前に出会ってから、こんなにも温かくなったよ」

そういう自分の頬が、子供のように薔薇色に染まっているのが分かった。

「そうか」聡明鬼はただそう答え、少ししてから「ジライという降妖師には、頼まなかったのか？」と訊いた。

「ジライ？」初めて訊く名だ。「いや、頼んだことはない……町の近くに住む降妖師はどいつもこいつも、助けてなどくれはしなかったよ」悲しみが胸に蘇る。

友の何人もが、そのため命を落すことになったのだった。

師も、親族の者も。

「そうか」聡明鬼は答えた。「ジライは、強い降妖師だ。きっと力を貸してくれる。俺たちに任せておけ」頷く。

「ありがとう」微笑んで、眼を閉じる。

今まで耳にしたどんな言葉よりも、その聡明鬼の約束は強い安心を呼び醒ますものだった。

最後に自分を見送ってくれた、妻と子の姿が現れる。

温かい涙がもう一度頬を伝う。

「もう大丈夫だ。安心して暮らせ……達者で暮らせ……幸せに暮らせ」

きっとその言葉も、聡明鬼は伝え届けてくれるだろう。

ひときわ強く輝く光の世界が口を開き、その中へとゆっくり歩き始める。

これでもう、大丈夫だ。



孤独だった。

寒く、体は凍りつきそうになる。

足は惰性で前に出続けるが、もはや自分が歩いているという感覚すらなかった。

歩いているのではなく、空を飛んでいるようだ。

リューションは、がちがちと歯を鳴らして両の肩をかき抱いた。

何も見えない。

真っ暗で、吹雪いているはずの雪すらも見えない。

だが頬も耳も、目も鼻も指先も、足も胴体もすべてが吹雪にさらされているのは確かだ。

うち震えながら、たった今体内に取り込んだ男の生の来し方が見え始めるのを待った。

けれどいくら待てどもそれは始まらなかった。

「……？」不思議に思い、男を改めて見遣る。

微笑んでいる。

幸せそうに。

どういうことだ？

こんなことは初めてだった。

自分の中に取り込まれた鬼魂はどれも、かなしみとくるしみを一身に背負い、そしてそれをリューションに丸ごと投げってくるのが常だ。

その顔は泣き、怒り、嘆き、いずれにしろ笑いなど、最も遠いものであるはずなのだ。

それが今、この男は、まるでもうすでにこの時点で上天に召し上げられたかのような、至福の笑みを浮かべている。

そう思う内にも、別のものが見え始めた。

鬼だ。

それはリュージュンが会ったことのない、つまり土地爺ではない鬼のようだった。

真っ黒な衣を纏い真っ黒な帽子を目深に被り、その下からまるで虚空を映したかのような、邪悪な眼が覗いている。

無常鬼――

男の中からその名が湧き水のように沁み出してくる。

さらに景色が変わる。

二人の男と一緒に歩いている。

二人は同じ町の住人で、町の人々を救うため代表として旅立ってきたものらしい――自分に会うために。

俺に？

リュージュンは驚いた。

この鬼魂は、鬼魂としてではなく、生きている時に思っていた、願っていたそのままの想いで、自分を探していたのか。

それじゃもしかして、この男は自分が死んだということを――

「お前……気づいていないのか」訊く。

訊く内にも仲間の二人が崖から落ちまた蛇に咬まれ、命を落したのが見える。

そうしてこの男自身は山で雪嵐に遭い、道半ばで斃れた。

「無常鬼を見たから死んだ」

そういう声が、悲壮なる叫びがまた男からリュージュンへと投げられる。

「助けて……無常鬼を退治して……町の皆を救って」

男は、ずっとリュージュンに伝えたかったのであろうその言葉群を、怒涛のように一気呵成に投げてきた。

その勢いのすさまじさにリュージュンは一瞬たじろぎかけたが、すぐに両の足を踏ん張り受け止めた。

「ああ。任せておけ」叫ぶように、力を込めて答える。

そうすることが、この鬼魂を安心させるために一番必要なことだと思った。

無常鬼というのがどういうものなのかは知らない。

だがジライに聞けば情報は得られるだろう。

それに――

閻羅王の姿が一瞬、心をよぎる。

土地爺ではないとはいえ、鬼であるからには無常鬼とやらも閻羅王の統治下にある者のはずだ。

統治下にないとしても、それならば尚更、閻羅王に睨まれていることだろう。

町ひとつを恐怖に貶めるほどの力の持ち主であれば、翻って閻羅王に力を貸し陽世を攪乱に陥れることも考えられるのではないか。

そういった思いもあり、無常鬼を倒すという言葉に偽りなど毛頭なかった。

リュージュンの強い約束の言葉は思った通り、男に歓喜の表情をもたらし、そして男は上天へ行った。

肌を突き刺す冷たさが、すうっとなくなった。

がっくりと膝を突く。

夜が明けようとしていた。

一日のうちでもっとも気温が低くなる刻だが、その大気はこの上なく暖かく感じられた。

ゆっくりと、息を吐く。

息はまだ震えているが、暖かい空気をリューシユンは思い切り吸い込んだ。

日が昇りきるのをぼんやりと待った後、リューシユンはようやく腰を上げた。

ジライに会いに行こう。

そう思っていた。

「無常鬼だと」ジライは目をかっと見開いた。「あの無常鬼か」

「どの無常鬼なのかよくわからんが」リューシュンは少し口を尖らせた。「真っ黒な衣を纏って真っ黒な帽子を目深に被っている」

「ふむ」ジライは頷いた。「あの無常鬼だな」

「そうか」

「あいつは……厄介だぞ」ジライは目を細める。「命の惜しい降妖師はまず請け負わぬ」

「そんなに強いのか」リューシュンは碧の眼を丸くした。

「そう強くはない……恐らくな……だが頗る逃げ足が疾い」

「ふうん」

「逃げられたが最後、その姿を見た降妖師は死を免れん。正に命を賭すことになる」

「無常鬼を見たから死んだ」

自分の中に投げて寄越された男の叫びが蘇り、リューシュンは碧の眼を細めた。

「俺らなら平気なんだろう。俺や、あんたの兄貴のコントクなら」自分とジライを交互に指す。

「そうだな、しかし鬼を封じる法力を駆使する段になれば、やはり降妖師の仕事となる。つまり私のな」

「俺とコントクで無常鬼を抑えつけておいて、その間にあんたが封じるというのではどうだ」

「それが最善、というか唯一の方法だな。だが油断できん。何といっても素早く、霧のように掴みどころのない奴だということからな」

「うーん」

日は中天に差し掛かりつつあった。

小間使い達が食事を運んでくる。

山菜を主にした質素なものであるが、器や添え物に趣を凝らしてあり、目を癒してくれる料理ばかりだ。

「いつも、すまないな。有難う」リューシユンは主であるジライと、運んでくる小間使い達にも礼を言った。

「ふふふ」ジライが笑う。「お前は本当に、鬼らしくない鬼だな」

「……」黙って肩をすくめる。

確かに、自分が本来は鬼ではないことを知ってしまった今となっては、そのような事を言われても心が揺らいだり拗ねたりすることはなくなり、その意味では心が安定したと言える。

そうだ、何しろ俺は鬼ではないのだから。

本当に鬼の成り損ないなのだと、妙な話だが自信を持ってそう言える。

「無常鬼を、陰陽界に引きずり出すというのではどうだ」食事をしながら、リューシユンが提案する。「俺とコントクとで無常鬼を陰陽界におびき出す。あんたは陽世に留まったまま、陰陽界の無常鬼に術を施す。そういうのは、できないか」

「ううむ」ジライは杯から口を離して唸った。「何しろ試したこととてない方法だからな……もしそれで失敗したとなると」

「そうか」リューシユンは料理を見下ろし考えた。「もし術がかからず、無常鬼がまた陽世に戻ってしまいあんたの目に止まったら、最悪の状況になるな」

「どこかに隠れておき、万一無常鬼が戻って来ても見ずにすむというような方法があれば」

「……あいつを、使うか」リューシユンが小さく呟く。

「あいつ、とは？」ジライが訊く。

「……」リューシユンは片方の眉だけをしかめる。「しかし……また、なんやかやごねてきそう

な気もするが」

「なんのことだ？」ジライはまったく合点がいかない。



「もちろん」リンケイはぽんと膝を打つ。「喜んで、お貸し致しましょう」

「おお。有難う」ジライは顔を輝かせた。

「……」隣のリュージュンはしかし、唇をすぼめたまま何も言わない。

「うちのリョーマにジライ殿を守らせ、その無常鬼から完全に隔てておくというのですね。それは名案です。是非力になりたい。無論この私も」

「いや、借りたいのはリョーマだけなんだ」リュージュンがすかさず言葉を挟む。「何しろさっきも言った通り、無常鬼を見た人間は死ぬといわれているからな。お前も人間の端くれだろう。危険だ。リョーマだけでいい」

「……」今度はリンケイが黙り込み、ゆっくりと瞬きをして、それからリュージュンを凝と見た。

「じゃあ、貸してくれるんだな。早速借りて帰るぞ。おいリョーマ」リュージュンはさっさと縁側に出て声を張り上げる。「リョーマ」

あう、あう

元気な鳴き声とともに子犬が走り寄って来た。

「よし、来い」リュージュンが両手を出しリョーマの小脇を抱えようとしたその寸前に、横からリンケイの手が犬をさらった。

顔を上げると、眼をすがめて無言のまま睨みつけてくる。

犬は何のことだかわからず、主人の頬をぺろぺろ舐めてみたりしている。

「貸してくれるんだろ」リューシュンはとぼけた口調で言った。「無常鬼退治の為に」

「どうして俺を仲間外れにする」リンケイはリューシュンを睨んだまま言った。「何か気に入らないことでもしたか」

「仲間外れ？」リューシュンはすっ頓狂な声を挙げた。「あのな、遊びの話をしているんじゃないんだぞ。どこが仲間外れだ、お前にはここにいてもらって、リョーマに法力を注いでいてもらわねばならん。立派な仲間だ」

「俺も行く」リンケイは低く、きっぱりと断言した。「それでいいな」

「駄目だ。危険だ」リューシュンも低く、きっぱりと断った。「無常鬼を封じることのできるのは降妖師だけだ。お前は来なくていい」

「一緒にいれば法力を増幅させられる。兎を退治した時のように」

「兎は見ても死ぬことはなかつただろう。今度の相手は厄介なんだ」

「厄介なのは承知。鬼だからな。鬼というのは厄介極まるものと相場が決まっている」

「お前、子供じゃないんだから」

「よいのではないかな」ジライが言葉を挟む。「陰陽師殿の仰る通り、二人してリョーマの背に乗り二人して法力を繰り出せば、その分効果が高まるだろう」

「有難うございます」リンケイはジライに向かいにこりと微笑んだ。「微力ながらお手伝いさせていただきます」

「――」リューシュンは言葉を失った。

「さあ、リョーマ」リンケイは子犬を地に置いた。「元の姿に戻りなさい」子犬の頭の毛に二度、短く息を吹きかける。

吹かれた子犬はたちまちにして巨大な霊獣の姿に変化した。

「――言っとくが」リューシュンはまた低く呟いた。「どさくさに紛れて陰陽界と一緒に踏み出

そうなどとするんじゃないぞ」

リンケイはリュージュンを振り向き「うん」と頷いて笑った。

そんなわけがない。

リュージュンには最初から解っていた。

リョーマを借りに陰陽師宅を訪れた時、否その前からだ。



無常鬼はその日死んだ人間の屍を喰らい尽くした後、ねぐらとしている山間の洞穴の中でごろりと横になっていた。

町の人間たちは、先に送り出した三人がとうの昔に命尽き果てたことを知る由もなく、今日か明日かとその帰りを――聡明鬼と共に――待ちわびている様子だ。

無常鬼は顔の上に被せた黒い帽子の下で、くっくつと独り笑った。

さてお前たちの期待する聡明鬼は、一体いつ来るというのだろうか？

来やしない。

永遠にだ。

くすくすくす

だがふと、聡明鬼というのが一体どんな間抜け面をしている者なのか、無常鬼は見てみたくもなった。

相手も鬼だから、自分の姿を見て死ぬということにはならない――そこが唯一面白くない点だ――が、こうまでも町の連中が焦がれる奴、一体どれほどの者だろう？

まあそうはいってもたかが鬼、大して恐るるに足りぬとは思うが、一度くらい見ておくのも一興だ。

無常鬼はむくりと起き上がった。

あの三人目を喰らった山を向こう側に降りれば、聡明鬼の治める町に着くという話だった。

どら、その町へひとつ出向いて、そこの町の間人をいくらか喰い散らかすついでに、無能な土地爺の慌てふためく姿を拝ませてもらうとするか。

ひひひひ

無常鬼は肩を震わせて笑いながら、出立した。



「そういうことなんだ、兄さん」ジライはコントクに、此度の無常鬼退治のことを話し終えた。
「是非力を貸して欲しい」

「なるほどな。わかった」コントクはすぐに了承の意を示した。「無常鬼か……まこと厄介な相手だな。よほど綿密な策を講じねばな」

「天心地胆から俺とあんたで無常鬼を追い出すわけだが、まずは無常鬼の居場所を突き止める必要があるな」リューシュンは自分とコントクを交互に指した。

「何か罠をしかけておびき寄せる方法はないだろうか」リンケイが考えを述べる。「猫にまたたびが効くように、無常鬼が好んで喰い付いてくるものはないのかな」

「それはやはり」ジライが陰陽師を見る。「人間だろう」

「確かに、そうだ」コントクが頷く。「無常鬼は人間を、殺めるより喰らうより、騙して困惑させ慌てさせるというところに愉しみを見出しているような気がする」

「そうなのか？」リューシュンが眉をひそめる。「それは、どうしてそう思うんだ？」

「むら、だよ」コントクが聡明鬼を見る。「まったく人の前に姿を見せない日が幾日も幾月も続いたかと思うと、一日の内に何人、何十人といわぬ人の前に姿を見せ死なせる日もある。そうい

ったむらのある所を見ると、あ奴決して腹を満足させる為にやっているとは思えぬ。気分を満足させる為だ」

「なんて奴だ」リューシュンは吐き捨てるように言った。

—人間が、好きな奴だからな。
リンケイは心の中で、そっと思った。
—到底許せぬことだろう。

「それでは、人間を使っておびき寄せましょう」リンケイは不敵な笑みを浮かべ言った。「無常鬼を」

「駄目だ」すかさず異を唱えたのはリューシュンだった。「そんなことをしては」

「最後まで聞け。何も町の住人たちを使おうと言っているのではない」リンケイが諭すように言葉を挟む。

「聞かなくてもわかる。お前、自分が囹になるつもりでいるんだろう。駄目だ」

「誰が囹になると言った」リンケイは肩をひよいとすくめた。「そんな事、頼まれても厭だ」

「あれ」リューシュンは勢いをそがれ呆けた顔になった。「じゃあ、一体」

「思いつかないか」リンケイはどこか嬉しそうに指を立て謎かけをする。「人間でありながら、無常鬼を見ても決して死なずにすむ者」

「……」リューシュンは眉を寄せ天井を見、そして「あ」とリンケイに目を戻す。

陰陽師はにこにここと頷いた。「あいつなら、リョーマがすぐに見つけてくれるだろう」

四人は庭に出て、巨大化したままのリョーマの背に一人ずつ乗った。

最後にリューシュンがその馬の体に手をかけた時、ふと背後に視線を感じ振り向くと、以前コントクの救出を頼んできた小間使いの少年が離れたところに植えられている庭木の陰から顔をのぞかせていた。

リューシュンはにこりと微笑みかけ、片手を挙げた。

少年はぱっと笑顔になり、大きく手を振り返してきた。



鼬は元いた土地、精霊と成り縛り付けられていた土地、つまり生きていた頃生き埋めにされた土地に戻ってきていた。

陰曹地府の森羅殿に戻れば喰うに事欠かず気楽に生活できるのだろうが、何せ閻羅王から請け負った任務を失敗させてしまったのだ。

のこのこ帰れば下手をすると十八層地獄に叩き落されてしまう。

だが幸い、憎き聡明鬼どもに法力でこの地から一度引き離されたことにより、他の土地へも自由に移動することができるようになった。

今はこの地に留まり、腹が減れば小鳥や虫を捕まえるか、或いは捕まらないときや面倒な時には人間に化けて町へ繰り出し、適当に盗み食いをしては鼬に化け疾風のごとく姿をくらますというやり方で食いつないでいた。

その日もそんな手法で腹を太らせ、意気揚々と自分の土地へ戻るところだった。

不意に日が翳り、心なしか肌寒さを感じた。

ぶるっと身を震わせ、夕立でも来るのかと見上げた空に、鼬は巨大な怪物を見た。頭が龍で、体が馬だ。

「――」言葉を失う。

するとその馬の体からひよいと顔を覗け「うす」と声かける者があった。聡明鬼だ。

続いて陰陽師、もう一人の土地爺、降妖師が次々に顔を覗けた。

皆、まるで久々の友との巡り会いを喜ぶかのように、にこにこ笑っていた。

「――」

何も返せぬまま、鼬の体はぱくりと龍の口に甘く啜えられ天高く持って行かれた。

無常鬼は山を降り、町へと向かっていた。

まだ人には会っていない。

傍には川があり、川向こうにはまた山がそそり立っている。

しばらく歩けば市の立つ賑やかな所へと出るはずだ。

しかし鬼は疲れを感じ、川べりに座ってしばし休むことにした。

鬼の耳に、川の水はころころと流れて聞こえた。

水が石に当たり、石が押し流され、その石がまた水を押しよける。

ころころころ

石の音、水の音。

それが鬼の耳にはそういう風に聞こえた。

無常鬼は日が沈む頃まで、独り川べりでその音を聞き続けていた。

そうして日がとつぷりと暮れた頃、

「よう」

声をかけてくる者があった。

とはいえ、そいつがそこに――ここにいるということを、無常鬼はどうに知っていた。

そして川の水の中から、じつと自分の様子を伺っていたことも、どうに知っていた。

水鬼だ。

水鬼は名の通り水の中に居り、人を水中に引きずり込んで命を奪う。

そうすることで投胎し、人間として転生するのだ。

「お前、無常鬼だろ」

水鬼は水面のすぐ下に顔を浮かばせ、水音に交えてそう訊いてきた。

「ー」

無常鬼は返事をせず、じろりと水面下の水鬼の面を睨み下ろし、すぐに目を逸らした。

「お前は、山二つ向こうの町に住んでいるはずだろ」水鬼は凶太い神経の持ち主と見え、無視されたことも意に介さずけずけと質問を続けた。「なんだってこんな所までやって来たんだ。島荒らしか。まさかこの水鬼様に何の挨拶もなしにここを通り抜けられると思っているわけじゃなかろうな、ええ」

面倒臭い奴だ。

無常鬼はそう思った。

いつからこの水中に巣食っている者なのかは知らないが、お前にこそ鬼としての弁えというものを教えてやろうか。

無常鬼は目深に被った黒い帽子を、さらに鼻まで引き下ろし、水鬼の姿を完全に視界から消した。

「おい」水鬼はいきり立った。「聞いているのか、この野郎」

ぴちゃん

魚が、水面から跳ねた。

「おい」水鬼はまた怒鳴った。

ちやぷん

跳ねた魚が、再び水面下に落ちる。

その時にはもう、水鬼の頭は首の上からきれいになくなっていた。

がりり

川べりで無常鬼は、引き千切った水鬼の頭を齧った。
角を肉ごと箸り取り、噛み砕く。

がりりり
ごり、ごり

ころころころ

川の音に交えて頭を齧る音がしばらくの間、鳴っていた。

「鬼が鬼に喰われるということ」やがて口を袖で拭い、無常鬼が独り呟いた。「それがどういうことか判るか」

傍に誰がいるわけでもない。
ただの独り言だ。

「それは要するに、二度とお前は転生などできんということだ。俺の腹の中で砕け、溶け、永久に俺の中に閉じ込められるということよ。さあ次はお前がこうなるのだぞ、聡明鬼よ」

ころころころ

くくくく

川の水の転がる音に紛れて、無常鬼の独り晒う声が山肌に響いた。



「そんな、無茶な」声を裏返らせて鼬（いたち）は叫んだ。「あっしが罔になって、その無常鬼とやらをおびき出すってことですかい」

「理解が早いな」コントクがにこにこして頷く。「さすがに賢い奴だ」

「へへへ、どうも」鼬は体をねじって照れたように笑ったが「いや、そんなことより無茶にもほどがあるってえ話っすよ」と続けて叫んだ。「確かにあっしなら、無常鬼を見ただけじゃ死なねえかも知れやせんが、頭から喰われたら、そりゃ死んじゃうでしょう」

「そうだな」

「確かに」

「死ぬな」

「うん」

二人の人間と二人の鬼は同時に肯定した。

「えっ本当すか」鼬は仰天した。「冗談のつもりで言いやしたが……精霊のあっしでも、死ぬんでやすか」

「相手が無情鬼ならば、死ぬな」ジライが説明した。「あいつは相手が鬼だろうが精霊だろうが、食って体内に永久に閉じ込めてしまう」

「……」鼬は体を小刻みに震わせ、あぐりと口を開けるばかりだった。

「恐れることはないさ」リンケイが懐から懐紙を取り出して微笑んだ。「ちゃんと策は考えてある」

「……」鼬はいまだ声も出ぬまま陰陽師を見上げる。

一声で自分を天高く放り出すことのできる物知りだ。

慰められたからといって安心できるはずはなかった。

「これにお前の名を入れた符（ふう）を書き、いざ喰われた時に間を置かず無常鬼の腹に押し、そうすればお前を呼び戻すことができる」リンケイは懐紙に文字を書く仕草をしながら説明した。

。

「本当ですかい」鼬は顔をぱっと輝かせたが「名前……？」次の瞬間顔を曇らせる。

「そう、名前だ」リンケイはどこか嬉しそうに微笑みを広げる。「お前の名だ」

「あっしに名前なんてもん」鼬の不安げな表情もまた広がる。「ありやせん、が……」

「ならばつけよう」言ったのはリンケイではなかった。

コントクとジライとリュージュンとリンケイの四人だった。

その時、近くに侍っていたリョーマが不意に仰のいて鳴いた。

四人と一匹は振り向いて霊獣を見た。

ひとしきり鳴き声が続いた後、リョーマは龍の頭を下げ皆を見下ろした。

「その名にしろと、言っているのだな。リョーマよ」リンケイが言う。

リョーマは馬の体の尾をくるりと回し、まるでそうだと言わんばかりに見えた。

「ではそうしよう」リンケイは他の三人を見渡した。「こいつの名は、ケイキョだ」

「ケイキョ。うん、いいな」

「ケイキョ。なんだか似合っているな」

「ケイキョ。決まりだな」

コントクとジライとリュージュンはすぐに同意した。

「ええ、そんな鳥の鳴き声みたいな名前、いやでやすよ」ケイキョは反対した。「もっとう、重みと厚みのある立派な名を」

「ケイキョ」リンケイはさらさらと懐紙に墨で書いた。「よし、これでお前を無常鬼の腹の中から引っ張り出せる」

「ようし、頼むぞ、ケイキョ」リュージュンはしゃがんでケイキョの背をぽんと叩いた。

「無常鬼退治はお前の働き如何にかかっている。しっかりな、ケイキョ」コントクも深く頷く。

「では早速、段取りを組もうぞ、ケイキョ」ジライが巻紙を広げ、そこに描かれた地図の上に朱

筆で線を引く。

が、不意にその手がびたりと止まった。

「どうした？」リューションがすぐに気づいた、だが彼自身にもその理由の察しはついた。

「鬼……だな」コントクが低く呟く。

「鬼？」リンケイだけが“これ”を捉えられずにいた、だがす、と眉をひそめる。「無常鬼の気配でも？」

「いや、無常鬼とは違う」ジライが眼を閉じ、うな垂れる。「これは」

「水鬼、だな」コントクが続ける。

「うん」リューションが頷く。

「水鬼？」リンケイが訊き返す。

四人とも、そしてケイキョとリョーマも、背後に流れる川を振り向いた。

さらさらさら

いつものように、落ち込んでくるものすべてを等しく、そして容赦なく流してゆく、川だ。

そこに今、落ち葉や花弁、石ころたちと同じく無抵抗に流されてくる“もの”が、あった。川原からでも見えるそれは、首から上を喰いちぎられた鬼の体だった。

「あ、うッ」突然リューションは呻き、自分の首を両手で押さえうずくまった。

「聡明鬼」リンケイが振り向き叫ぶ。

「水鬼が？」ジライが驚きを隠せぬ声で訊く。

だがリューションに答える余裕はなかった。

がりり

ごり、ごり、ごり

頭を、抗することも叶わず噛み砕かれる。

「うがああああ」その苦痛に、リュージュンは川原を転げ回った。

「なんと」

「鬼魂ばかりでなく、鬼さえも取り込むのか」

コントクとジライはリュージュンを茫然と見下ろすばかりだった。

「なんとか、手を打てぬものですか」リンケイが二人に問う、だが二人に為す術はなかった。

鬼退治を生業とするジライにさえ、今のリュージュンが示すような様態に対処する方法など見聞きしたこともないのだ。

「聡明鬼ー、いや、水鬼」リンケイはのたうちまわるリュージュンの傍にしゃがみこみ、呼び掛けた。「お前を苦しめるのは、無常鬼か。無常鬼にやられたのか」

「ぐあああああ」悲痛の叫びしか、リュージュンの口からは出てこない。



匂い、というものを感じたのは、敢えていえばほんの一瞬の間だけだった。

それは今までに嗅いだことのない、鬼魂の匂いとはまた違う類のものだった。

つまりあれが、鬼の匂いなのだなとリュージュンは頭の片隅でぼんやり思っていた。

匂いを感じた直後から、激痛が襲い始めた。

景色が猛烈な速度で飛び、あっという間に頸はがりがりやがて視界は真っ暗になった

。

「鬼が鬼に喰われるということ」やがてくぐもったような暗い声がどこからともなく聞こえた。
「それがどういうことか判るか」

「――」激痛は治まっていたが、リューシユンはぐったりとして声を発することも――言霊を発することもできずにいた。

「それは要するに、二度とお前は転生などできんということだ」声は続いた。「俺の腹の中で
砕け、溶け、永久に俺の中に閉じ込められるということよ」

そうか。

リューシユンは薄目を開けた。
陰陽師の衣の裾がうっすらと見える。

貴様が、無常鬼なんだな。

「さあ次はお前がこうなるのだぞ、聡明鬼よ」

けっ。

リューシユンは、震える手をゆっくりと伸ばした。
リンケイの衣の裾を、力なく掴む。

すぐにリンケイの手がその腕を掴み、コントクとジライの手も延びて来てリューシユンの体は
抱え起こされた。

この先にいるんだな、貴様。

リューションはゆるゆると川原の上に立ち上がり、ようやく碧の眸を川上の方へ向け見開いた

。

待っている。永久に闇に封じられるのは、貴様の方だ。

ケイキヨはびくびくと肩をすくめながら歩いた。

手には灯明を持っているが、風に今にもさらわれてしまいそうな、弱々しく頼りない光だ。

さらさらさら

傍らには小川が流れる。

はあ、とため息をつく。

こんなことなら、さっさと陰曹地府に戻るときやよかったぜ……

そう思い、眉をしかめる。

こんなことをさせられるのなら……

深夜だ。

川向こうの山の木々がざわざわと不気味に揺らぐ音がする。

何か不安な気持ちにさせる音だ。

あたかも何か不吉なものが近づきつつあることを報せるかのような――

黒い衣の者が居た。

ケイキヨはびくり、と足を止めた。

早速来やがったのか!?

「あんた、こんな時間に何をうろついてるんだい」

その者は訊ねてきた。

「用もないんなら、さっさと帰った方が身のためだぜ。水鬼に命を狙われるぞ」

ケイキヨは注意深くその者を見た。

黒い衣と見えたのは闇のせいで、どうやらそいつは確かにただの人間のようだ。

「ああ……今から帰るところだ」ケイキヨはぼそぼそと答えた。「あんたも、気をつけて」

「俺もこんな時間に出歩きたくはないんだがな」相手は苦笑した。「うちの女房が、今でかい腹

を抱えてるんだが、急に瓜が食べたいなんて言い出して、うーうー呻くもんだから寝るに寝られず採りに来たんだよ」

「そうか」ケイキヨはぼそぼそと答えた。

「それじゃな」男はケイキヨの側を通り過ぎて行った。

瓜、かー

ケイキヨはほっと胸を撫で下ろした。

そういえば川をしばらく下ったところに、野生の瓜のなる草原があった。

まだ食べられるほど熟しているものは少ないように思えたが、女房に夜通し呻かれるよりは、あれでもないこれでもない瓜を見定めている方が気楽なのだろう。

ケイキヨは気を取り直し、砂利を踏んで先にー川上に進みはじめた。

また、黒い衣の者がいた。

ケイキヨは再びびくり、と歩を止めた。

今度こそ、無常鬼か!?

「こんな時間に何をしているのだ？」相手は問うてきた。

でっぴりと腹の肥えた、体格のいい、それは鬼だった。

だが無常鬼でも、水鬼でもない。

どうやらこの地の土地爺のようだ。

「あ、ええと、ちょっと町で宿を取り損ねやして、へへへ」ケイキヨは腰をかがめて愛想笑いをした。

「そうか」土地爺は眉をひよいと持ち上げ、ケイキヨを見た。「なら、儂の家に泊まるがいい。ついて来なさい」

「あ、ええと、でも」ケイキョは戸惑った。

曲りなりにも彼には“無常鬼をおびき寄せる”という仕事が任じられているのだ。

「なに、遠慮することはない。食事もまだなんだろう。うちの者に用意させよう」土地爺はにこりと笑いかけると、さっさと歩き出す。

「――」ケイキョが尚も戸惑っていると、

「早く来なさい。水鬼の餌食になってしまうぞ」土地爺は振り向き、促した。

「へ、へい」ケイキョは仕方なく、今来た方向へと逆戻りにはなるが土地爺の後について歩き始めた。

――これで責められたって、あっしにはどうしようも――

「鬼が町を統べるということに、最近異を唱える人間が出てきているという話だが、知っているかね？」歩きながら鬼が訊く。

「え」ケイキョはきよとんとした。「い、いえ、あっしは特に何も……」もごもごと答える。

「そうか」土地爺はケイキョに背を見せ歩きながら言った。「どこかの町では人間たちが、徒党を組んで土地爺に立ち向かおうとしているらしい」

「へえ」ケイキョにとってはまったく初めて聞く話なので、興味をそそられた。「土地爺の旦那を襲ったりしてるんですかい？」

「いや、まだそこまでは行ってないらしい」土地爺は歩きながら首を振る。「だがもしかすると、時間の問題なのかも知れんな」

「時間の？」

「うむ……まあその町の土地爺は、謙虚さを忘れて暴君のごとく人間を脅かしているらしいかな。すべての土地爺がそうだと決め付けられたくはない。しかしひとつの町で暴動が起これば、それはじわじわと周囲に広がっていくだろう」土地爺は、ケイキョに話しているのか自分に言い聞かせているのか判別し難い口調で続けた。「今のうちになんとか、穏便に収めたいところだ」

「大変……ですねえ」ケイキヨは当たり障りなく受け答える。

「しかし事実、人間が鬼に逆らうなど言語道断と断じる土地爺も、このところ増えてきているのだ」土地爺は歩きながら、はあ、とため息をついた。「どこかで、鬼たちの意識も変わってきてしまったようだ」

「へえ」

「人間が鬼の言葉に耳を傾けるわけではないだろう」低く冷たい声が、後ろから聞こえた。

ぞっ

ケイキヨの背中の毛が総毛立った。

いま人間に化けてはいるが、にもかかわらず鬣が本来持つ背中の毛が総毛立ったのだ。

振り向く。

否、振り向こうとする。

だが首が回らない。

「誰だ？」土地爺は立ち止まり振り向いていた。「あっ」そして絶句する。「お前は――」

「人間が鬼の所業を邪魔立てするなら、分を弁えるということを教えてやらねばならん。それが土地爺としてなすべきことだろう」声は低く静かに、川のせせらぎの上に乗るようにして流れた

。

その間中、ケイキヨの背中の毛は逆立ったまま固まっていた。

「たとえば、こんな風にしてな」

そう聞こえたかと思うとケイキヨの頭は脳天から鷲掴みにされ、ぐいと向きを変えさせられた

。

弱い灯明の光の中、黒い帽子の下に、暗渠のような目があった。

まったくの闇で何を映しているのかわからない、否そんなことを知りたくもない、二度と眼を

合わせたくない目だ。

無常鬼――

初めて見る相手だがそれ以外の名を思いつくこともなかった。
ケイキヨは声にもならず顎をがくがくと震わせた。

くくくく

無常鬼は喉の奥で不気味に笑った。
「俺を見たな」満足そうに告げる。「今日、まもなくお前は死ぬ」
そうしてケイキヨの脳天から手を離し、

くくくく

再度笑う。

ケイキヨはその場にへたり込み、震えながらただ黒い衣の鬼、まさにおびき出すことに成功した標的の鬼の姿を瞬きもせず見上げた。

「なんてことを」土地爺が嘆く。「何の罪もない人間に、どうしてわざわざお前の姿を見せるのだ、無常鬼」

無常鬼の暗い目が、ちらりと土地爺に向けられる。
だが返事はない。

「お前は人間が怖がる姿を面白いと思っているのか」土地爺はさらに詰め寄る。

無常鬼の黒い衣の下から音もなく痩せ細った腕が伸びる。
手入れもなく伸び放題になった爪が土地爺の角に掛けられる。

その手首のさらに上から日に焼けた無骨な手が重なりがっきと掴む。

一瞬のうちに、角を掴まれた土地爺と、角を掴んだ無常鬼と、その無常鬼の手首を掴んだリューションと、三人の鬼の姿が朧な灯りの中に浮かび上がっていた。

だが無常鬼はにやりと口元を広げた。
「それで俺を捕まえたつもりか」
その声を残し、次にはもう姿が消えたのだ。

「く」リューションは素早く辺りを見回すが、闇の中に無常鬼の姿は見えない。

「ここだ」離れたところからコントクが叫ぶ。
川の流れの中、巨大な玄武岩の上だ。

「なるほどな、すばしこい奴だ」リューションが言い、水面を蹴るようにして岩の上へと走り跳ぶ。

「あれは――聡明鬼」茫然と土地爺が見送る。「一体――」

「聡明鬼の旦那は、無常鬼の退治を頼まれたんでさあ」ケイキョはよく見えない川の中ほどに目を凝らしながら説明した。「あっしが奴をおびき寄せるって寸法で」

「なるほどな。ということはお前は人間ではないということか」

「えっ、どうして」ケイキョは驚いて振り向く。「わかったんで」

無常鬼が、土地爺の角を掴みその頭を首から引き抜いて持っていた。

「うわああああ」ケイキョは口をあぐりと開け悲鳴を挙げた。

がりり

ごり、ごり、ごり

土地爺の頭を噛み砕く音が闇に響く。

一歩、二歩、震える足で必死に後退る。

だが無常鬼の痩せた指が、驚異の速さでケイキョの眼前に迫ってきた。

「あああ」

その不吉な指が、またしても無骨な手で掴み上げられる。

「てめえ、鰻みたいにつるつる逃げやがるな」リューシユンが忌々しそうにこぼす。

「だがこうならどうだ」コントクの声が聞こえ、その腕は無情鬼の背後から羽交い絞めに回された。「逃げられまい」

くくくく

無常鬼はただ笑った、そしてその笑い声は遠くから聞こえ、三人の目にすでに無常鬼の黒衣は映っていなかった。

「くそっ」リューシユンが苛立ちに叫び、ぐるりと体を回して周囲を探る。

次に喰られるのは――

ケイキョの内に閃く思いがあった。

次に喰われる者、それは間違いなく自分だ。

聡明鬼でも、コントクでもない。

その二人であるはずがない。

自分だ。

それが確信に変わった時、ケイキョは灯明を手にしたまま川下に向かって脱兎のごとく走り出していた。

「ケイキョ」

「どこへ行く」

リューシュンとコントクが背後から叫んだが、鼬は止まらなかった。
人間の姿のまま、二本の足で走りに走った。

「人間でないなら、俺を見ただけでは死なないな、お前」
すぐ横で、囁くような声が聞こえた。

「ひいいい」ケイキョは横っ飛びに飛んで砂利の上に尻餅を突いた。

いつの間に追いついていたのか。
それとも、最初から併走していたのか。

茫、と幻のように無常鬼の姿が闇に浮かぶ。

がくがくと奮えながらケイキョは座り込んだまま後ろに下がった。

無常鬼は黒い帽子に手を添え、目深に被り直した。

「お前は、人間に化けた精霊か」
今にも消えそうな声で問う。

ケイキョは震えるばかりで声も出ない。

「まあ、どっちでもいい」瘦せた腕が伸びる。「俺の腹の中で朽ちるがいい」

「させるか」リューシユンの叫びとその手がケイキョの視界の前を遮った。

「旦那」ケイキョはその背に叫ぶ。「あいつの帽子を払い落として」

一瞬、リューシユンは振り向きかけたが、ケイキョがそれを止めるよりも早く、無骨な手が言われた通り無常鬼の帽子を叩いていた。

それを見たケイキョは鼬が獲物に飛び掛るのと同じ仕草で砂利の上に落ちた帽子に飛び掛り、灯明の火を押し付けて燃やした。

「俺の帽子が」無常鬼が叫ぶ。

ほとんど肉のついていないその相貌が夜の星明りの中に浮かんだかと思うと、コントクの腕が再びその痩せた体を背後から羽交い絞めにした。

「こいつのすばしこさは帽子の力でやす」ケイキョが、燃えかすとなった帽子を蹴散らしながら言った。「帽子の力で姿を消したりまた現れたりしてたんでやすよ」

「そうか」リューシユンはケイキョに頷きかけ、それからすぐに無常鬼の黒衣の胸倉を掴み「行くぞ」と叫ぶ。

「うむ」コントクは力強く答え、二人の鬼は無情鬼を前後から掴んだまま走り出した。

「ジライ」コントクが走りながら弟を呼ぶ。「頼むぞ」

上空にきらり、と光る帯が現れた。
帯と見えたのは龍の首、その体は馬のものだ。

リョーマが夜空を翔る。

ジライの姿は地上からは見えないが、その背に乗っているはずだ。

「ここだ」リューシユンが合図し、無常鬼を掴んだ二人の土地爺は天心地胆に飛び込んだ。

ざああああ

陰陽界の風の音が三人を迎えた。

「離せ」無常鬼が突然もがき出した。「俺はここが嫌いだ」

「鬼のくせにか」リューシユンが鼻で笑う。「じゃあお前、閻羅王にも会っていないのか」

「会ってなどいない」無常鬼はコントクの腕とリューシユンの手から逃れようとしたがそれは叶わなかった。「離せ」

「助かろうなどと思うな」コントクが厳しく言い渡す。「これまでお前の為に犠牲になった罪のない人間たちのことを思え」

「知るものか」無常鬼は顔をそむけた。「人間など鬼に怯えて暮らすがいい。不躰で分を弁えぬばか者どもが」

「なんだと」リューシユンが胸倉を掴む手の力を強める。「なんでそんなことを言う」

「貴様らこそ、なんで人間に媚びる」無常鬼はやけになったのか、冷たくせせら笑った。「鬼のくせに人間に屈したか」

「言っていることがわからん」リューシユンは無常鬼の顎を下から掴んだ。「喋るのを自分で止めるか、俺に止めさせるか、どっちか選べ」

「聡明鬼」コントクが諫める。「怒れる気持ちはわかるが、弟に任せるんだ」

リューシユンはしばらく無常鬼の顎に爪を立て睨みつけていたが、投げ捨てるようにその手を離した。

「さっきの土地爺が言っていたことも、何か気になるな」コントクが羽交い絞めにしたままそう言った。

「人間の中に、鬼が続べることをよく思っていない者が出てきてるって話か」リューシユンが訊き

返す。

「うむーよもやこの無常鬼が人間をそそのかしたとも思えぬが」

くくくく

捕えられて尚、無常鬼は低く不吉な笑いを洩らした。

「俺は人間が嫌いだからな……否、反対に人間が、好きだからな」

「どっちだよ」リューシユンがうんざりした顔で訊く。「喰うのが好きなのか」

「人間が、ばかな醜態をさらしておきながらそれに気づかずにいるのを見るのが、堪らなく好きなのだ」無常鬼は答え、またくくくく、と低く笑った。

リューシユンの脳裏に、自分が死んだことにも気づかずリューシユンを探し続けていた鬼魂のことが蘇った。

「俺を恐れて、なんとか退治してもらおうと足りぬ頭を突き合わせて話し合い、結局皆殺しの目に遭うのだ」

ケケケケ、と無常鬼は初めて上を向き、甲高い声を発して大笑いした。

がつ、とリューシユンはその顔面を片手で掴み、指先に力を込めた。

「あぐぐぐぐ」

無常鬼が苦痛の声を挙げる。

「うううう」

「聡明鬼」コントクが呼びはするが、やめろとは言わずにいた。

「さんざっぱら面白がってきたわけだな」リューシユンは無表情に言った。「その、ばかな人間たちの必死な姿を見て」

無常鬼は何も答えられなかった。

リューシユンに顔面を掴まれたまま、陽世から送られたジライとリンケイの法力により黒粉と砕かれ、そのままジライの手に持つ護符の梵の中に封じられたのだ。

ざああああ

陰陽界の風が相変わらず耳を撫でる。

これは鬼魂と化した無数の人間たちの困惑と悲哀の叫びから成る風なのだという。

無常鬼が嫌ったのも無理はないな。

リューシユンは耳を撫でられながらそう思った。

助けて

助けて

助けて

ここにいる限り、そう耳元で乞われ続けるのだ。

リューシユンとコントクは、天心地胆より再び陽世へと戻った。

ジライが満足そうな顔で二人を迎える。

だがその後ろには、不満げな顔のリンケイが佇んでいた。

「俺も天心地胆の向こうを見てみたかった」

そんな不平を洩らす。

「まだ見ない方がいい」リューシユンはふう、とため息をついた。「悪いことは言わん。お前自身が鬼魂になるまで待ってろ」

苦しい。

体中を虫が這いずり回っている感覚が絶え間なく続く。

実際、黒い、ごく小さな胡麻粒のようなものが何匹、何十匹と、ざわざわ皮膚の上を行ったり来たりしているのも目に見える。

だが、いくら摘もうとしてもそいつは決して捕まらない。

まるであざ笑うかのように、指をすり抜けてゆく。

怒りに震え、もどかしさに泣き、一旦は諦め大の字にひっくり返りもするが、どうしてもこのむず痒さに苛まれ再び徒労と知りつつもその虫を捕えんと指で肌を突付く。

そんなことを、もうどの位続けているのか、もはや忘れてしまった。

いつから、これが始まったのか――そんなことを思うゆとりさえ、ない。

あの薬さえあれば――

切に、そう思う。

薬さえ飲めば、こんな状況から解放されるのに。

最後に薬を飲んだのはいつだろう？

医者は、まだ手に入らないのだという。

とても希少な薬草で、次いつ手に入るのか予想できないのだそうだ。

だからそれまで我慢してくれと。

ひたすら、この虫の所業に耐えてくれと。

死んでしまいたいとすら、思う。

そんなことを願うなど、到底正気の沙汰ではないことは判る。

つまり自分は今、狂っているのではないかと。

精神が、おかしくなってしまうのではないかと。

だが死ねない。

死にたいと思うのに、死ぬことができない。

それは、怖いからだ。

死が、やはり怖いのだ。

それは人として真っ当な思いで、そうすると自分はやはり狂ってなどいないのかと思う。

薬のできるのさえ待てば、この地獄から解放されるのだ。

自分はただ、その光にしがみついているだけだ。

あの薬さえあれば――



「今日だけは屋敷にいていただかないと困りますよ」スンキが言う。「リュージュン様」

「うん」リュージュンは目覚めたばかりのところで、まだ目がよく開いていない。

のそのそと床から起き上がる。

「朝飯はできてるか」

「どうの昔にですよ」スンキはため息をついた。「二度ほど温め直させました。今三度めをさせます」

「いいよ、冷めたままで」大あくびをしながらリュージュンは廊下に出た。

右に進む。

「どちらへ行かれるのですか」スンキが後ろから呼び止める。「厨は反対側です」

「あ」リュージュンは頭を掻いて向きを変えた。

「信用ならない男と言われますよ、リュージュン様」スンキはぶいと横を向く。

「誰に？」リュージュンは苦笑いしながらその前を通り過ぎた。

スンキは拗ねた少女のようにつんとして答えない。

「ところで、何時に来るんだ？」リューシュンは訊いた。「税を納めに来る役人ってのは」

「あと二時間ほど後です」スンキは手に持つ書類を見下ろして答えた。「コウセイという役人です」

「ふうん」リューシュンはのそのそと厨の入り口を抜け、卓についた。「おはよう」

「おはようございます、リューシュン様」使用人たちが揃って答える。「よいお目覚めでしょうか」

「うん」リューシュンはにこりと笑って答える。「気持ちのいい朝だな」

「もう昼です」スンキがまたしても背後から冷たく指摘する。

使用人たちは顔を横に向けたり俯いたりして笑いをかみ殺す。

「まったく……失礼ですが、昨夜はどちらへいらしていたのですか」スンキは小声で訊ねる。

「ん」リューシュンの笑顔がふっと曇る。

無常鬼を退治してきた。

なかなか、そうは答えられない。

「知り合いの土地爺と、呑んでた」スンキにだけ届くほどの声で、ぼそぼそと答える。

「まあ」スンキが珍しく驚いた顔をする。「そんなに仲の良い土地爺がいたのですか？ リューシュン様はこれまで……」

「最近な」リューシュンはひよいと肩をすくめる。「友達になったんだ」

「まあ」スンキがさらに目を丸くする。「友達、ですか」

「変か？」

「いえ……いえ、決してそのようなことはないのですが、この数年リューシユン様が他の土地爺と交流を持つことなどまったくなかったのも、そういうのがお嫌いな方なのだと私思っておりました」スンキはそこまで言って、そしてふと言葉を切らし視線をさ迷わせた。

――あ。

リューシユンは内心、冷や汗を掻いた。

スンキは今この瞬間『この数年』の前のリューシユンはどうだったのか、そして――

『この数年』の前の自分はどうかであったのか、と考えたのではないか。

「そうですね」しかしスンキは言葉をつないだ。「私があなた様にお仕えするようになったのは二年と半年ほど前ですが、確かにそれからこっち、あなた様がお友達と呑み明かして朝帰りするということは、今回がまったく初めてだと記憶いたします」

「そ……うか」リューシユンは喉が詰まったような声で答え、それからそっと安堵の息をついた。

――そうか、二年半前か……それじゃその前に何をしていたのか、普通に覚えているだろうな、何しろスンキは普通の人間なんだから。

食事が運ばれて来た。

冷めたままでいいとは言ったが、それでも料理は温かかった。

これを用意する使用人たちも、皆普通の人間だ。

「人間が鬼の言葉に耳を傾けるわけではないだろう」

突然、昨夜の無常鬼が放った声が脳裏に蘇る。

口に運びかけた匙がハッと止まる。

「いかなさいました？」スンキがすぐに気づく。「何か不都合でも？」

「い、いや」リューシユンは使用人たちの不安を取り除くため急いで料理を口にした。「土地爺のところに忘れ物をしたことを思い出してな」

「まあ。取りに行かせましょう」スンキが人を呼ぶため手を叩こうとする。

「いや、いい。急がないから」リューシユンは制止した。「相手もまだ寝てるだろうし」

「まさか」スンキはまたぶいっと横を向く。「リューシユン様ではあるまいし。とっくに起きて、お仕事をなさっていますよ」

使用人たちがまたくすくすと笑いをかみ殺す。

「貴様らこそ、なんで人間に媚びる。鬼のくせに人間に屈したか」

無常鬼の幻がまた叫ぶ。

どうしてだ――

リューシユンは、胸中に痛みのようなものを覚える。

どうしてそのように考えるのだ。

何故鬼と人間が、敵対して当然のものという風に捉えるのだ――

「お口に合わぬものがございましたか」料理長が傍から心配そうに声をかけてくる。「リューシユン様」

「え」リューシユンはハッと顔を上げ「いや、ちょっと昨夜呑み過ぎたようでな」

「これは.....大変申し訳ありません」料理長が深々と頭を下げる。「もっと食べやすく消化にいいものを用意するなど、配慮に欠けておりました。どのような懲罰にも服します」

「まさか」リューシユンは慌ててがつがつと料理を平らげた。「これしきのことで懲罰なんかな

いさ」

「そうですね」スンキも言葉を添える。「なにしろ二日酔いなんて、初めてのことでですから。リューション様におかれては」

「は……寛大なお心に深く感謝いたします」料理長は恐縮したまま下がっていった。

こういった、自分への細やかな心遣い、気遣いというものが、リューションにとってはいささか苦手なものなのだ。

苦手、というよりも、こんな自分風情にたくさんの人間が頭を垂れ敬語を使いこまごまと動き、鬼である自分が快適であるよう取り計らう。

こんな、自分風情のために。

居心地が悪いのでは決してなく、むしろ居心地がよ過ぎることに、ある種の申し訳なさを感じる。

だからつい、独りで屋敷を抜け出し山野をぶらつく癖が、リューションにはついてしまったのだ。

しかし今日は、大切な用事と大切な話があるというので、しばらくの間は我慢してここに留まっていなければならなかった。



牛に牽かせる車がかたごとと揺れる。

その中で今一度報告書を読むが、字が揺れて定まらない。

いたずらに目が疲れるだけだ。

閻羅王の千里牛ならばこんなことはないのかな――

ふと、そんなことを思う。

眉をしかめ、上を向いて目頭を押さえ、ふうと息をつく。

「あとどれ位で着くか」コウセイは従者に、後ろから声をかけた。

「は、あと半刻ほどです」従者は肩越しに首を振り向け答える。「どうかもう少しのご辛抱を」

「そうか」コウセイはまた、ため息をついた。

閻羅王の千里牛ならばとっくに着いているのだろうか、否、とっくに用事を済ませてもう家に帰っているのだろうか――

がたごとと揺れる車の中で、そんな根も葉もない空想を走らせなければならぬほど、長く退屈な道のりだった。

一体うちの土地爺はどうして、こんな田舎に――ほとんど隣町に隣接しているような山の麓なんかには屋敷を建てたんだろう？

もっと町中に住んでいてくれれば、納税にしろ報告にしろ、手早く楽にできるのに――おかげさまでこの町においてそれらの仕事をするのは、ほぼ一日を費やす必要のある、ちょっとした旅行になってしまう。

まったく、役人泣かせの土地爺さまだ――しかし。

頬杖を突いて、近づいてきた山の姿を窓越しに眺める。

あの方のことは、どうしても嫌いになれんのだな。

目を閉じる。

私だけじゃない……皆そうだ。

何故なのだろう。

あんな自分勝手な、いってみれば小童と同じ類の、礼儀も弁えぬ乱暴者なのにな――

ふと気づくとコウセイは、頬杖を突き目を閉じたままにやにやと笑っていた。

それに気づき、慌てて再度手元の報告書を見る。

それは緊急の連絡書だった。

昨夜、この町から山三つ超えた町の土地爺が、首から上の無い状態で見つかった。

鬼が、それも町を統べる土地爺が殺された――それをしたのは、もしかすると人間であるかも知れないという懸念が、今密かに水面下で囁かれているというのだ。

やがて車はリュージュンの住む屋敷へと辿り着いた。

ぴしりと姿勢よく佇み、肌の白い女が出迎える。

名はスンキと聞いている。

長い髪を高く結い上げているためかすらりと長身に見える。

歩き近づいてくる姿も真っ直ぐで、見ていて気持ちのよい、いかにも優秀であることを想像させる女だ。

逆に言うと、ちょっと取っ付きにくいというか、な――

そんなことを思いつつコウセイは車を降り、スンキの艶やかな微笑に出迎えへの礼を述べ、彼女について屋敷へと入った。

「主人はじき参ります。どうぞこちらで寛いでお待ちください」そう言いながらスンキは扉を押し開けたが、

「うっす」件の主人、リュージュンはすでに窓際に立っており、振り向いてにっこり笑った。

「――」秘書は言葉をなくした。

「うん、ああ、ありがとう」コウセイは何故かそんな彼女に申し訳なさを感じ、やたら愛想笑いを投げかけるとさっさと椅子に座った。

「お疲れさんだったな、コウセイさん」リュージュンも向かい側にどっかと腰を下ろす。

「――茶をお持ちします」低い声でスンキは言い、扉の向こうに消えた。

虫が這う。

虫が這っている。

どうしてこいつらは、俺の体を好んで這いずり回るのだろう。

俺の体の上が、皮膚の上が、そんなに居心地いいのか。

こいつらは、俺のことが気に入っているのか。

そんなことを思う。

だが、すぐに首を振る。

こいつらに特別な想い入れや感情があるわけがない。

なにしろ虫だ。

虫はただ、そこに餌になるものがあるから這いずり回っているだけなのだ。

搔く。

搔き筆る。

だが虫は消えない。

涼しい顔をして全員が変わらず這い続ける。

体中が赤くただれ、熱を持ち、意識は次第に朦朧としてくる。

もはや動く気力もなく、起き上がっていることもできない。

床に伏せたまま飲食も取らず、ぼんやりと戸口の方を眺めているだけだ。

医者はあるところから入ってくる。

念願の、命に代えてでも今すぐ欲しい、あの薬を持って――



「――」

リュージュンはすぐに答えられずにいた。

「首だけが、体から引きちぎられていた、ということです」コウセイはまるで外に聞かれるのを恐れるように、俯きがちにそつと言葉を添えた。「まるで獣が人の首を食いちぎるように、土地爺の首が」

「――」

「獣は、鬼を食いはしませんからな」コウセイはそつと首を振る。

その土地爺、知っている。

リュージュンは瞬きも忘れ、心の中でそう叫んでいた。

リュージュンたちが無常鬼を封じた後、川原に戻って見た時には既にどこかへ運び去られていた、あの犠牲者だ。

人間に化けたケイキョを自宅に泊めてくれようとした、言葉は変だが人の好い鬼だ。

「人間が.....やったって、言ってる奴がいるのか」リュージュンは、自らの頭の中を整理するためゆっくりとそう確認した。「一体、誰がそんなことを」

「はっきりとはわかりませんが.....どこからともなく、そんな声が拳がってきているということです」コウセイはさらに声を低くした。

「もう、なくなってる」

川原に戻った時、土地爺の体がすでに消えているのを見て自分がそう言ったのをリュージュンは思い起こしていた。

「大方、陰司からすぐに差官が来たのだろう」その時はコントクがそう推測したのだった。「鬼の生死についての情報は、すぐに閻羅王に届くからな」

「ケイキヨは何処に行ったんだろう」陰陽師が辺りを見回したが、鼬は自分の務めを終えた後さっさと行方をくらましていた。

「陰府からの使いに捕まることを恐れて逃げたのかも知れんな」ジライが冗談交じりに言い、その時四人は笑ったものだった。

だが――

「土地爺の体を見つけたのは、人間だったというんだな」リューシュンはもう一度、確認した。

「はい」コウセイは頷いた。「メイヨウの町の川原にて本日早朝、貝拾いに来た漁師が見つけたとのことですよ」

「メイヨウ？」リューシュンは眉根を寄せた。「今日の、早朝にか」

「ええ……何かご不審な点でも？」コウセイが慌てたように手元の書類を見直す。

「いや」リューシュンの方も慌てて手を上げ否定する。

メイヨウ。

違う。

リューシュン達が無常鬼を捕まえたのは、そこではなかった。

つまり、無常鬼に土地爺が殺されたのも――そこでは、なかったのだ。

誰かが、鬼の体をメイヨウまで運んだのだ。

「そのメイヨウの町で、今よからぬ動きが水面下で起こっているという噂があるのをご存知でしょうか」コウセイは呟くように言った。

「よからぬ動き？」リューシュンは一瞬、不意を喰らってぽかんとした。「水面下で……？」

だが彼の脳裏にすぐにひらめくものがあった。

それも、殺された土地爺の言っていた話の内容だ。

「鬼の統治に異を唱える者たちがいるってことか？」

「そうです」コウセイは、尊崇と信頼の眼差しを自らの上司に向けた。「しかし今回殺されたのはメイヨウの土地爺ではなく、北東に離れたヌユクの土地爺――見せしめにしたのでは、という、噂が」

「――」

まさか。

リューシユンはそう叫びたかった。

ヌユクからメイヨウまで、人間が鬼の体をそんな短時間で運べるものか。

運べるわけがない。

たとえ牛や馬を使ったとしても、そんなに早くは辿り着くはずがない。

そう、閻羅王の千里牛でも使わない限り――

「聡明鬼様？」コウセイが、遠くで呼ぶ。「どう、なさいましたか？」困惑の声が、彼方から響く。

しかしリューシユンは壁を見ていた、否、壁ではなく陰曹地府を、森羅殿を、玉座に居座る閻羅王を、見ていたのだ。

無意識のうちに立ち上がって。



がたん。

戸が音を立てた。

ハッと目を見開く。

次には手を突き体を起こし、次にはまろびながらも足を曲げ腰を浮かし、やせ衰えた体がかく

がくと震わせながら、足の裏で立ち上がる。

医者だ。

やっと、薬を持ってきてくれたのだ。

待ち焦がれていた、あの薬草を挽いた粉を。

あれを呑めば、あれを体に取り入れれば、すべてが幸福の光に包まれるのだ。

まるで玉帝の愛に包まれるかのように、すべてが輝きに満ちるのだ。

そう信じて疑わなかった。

しばらく待つ。

だが扉はその後、びくとも動かない。

違うのか。

医者ではないのか。

薬を持ってきてくれたのではないのか。

そろり、と足を踏み出す。

そんなことをするのは、いつ振りだろう。

ああ自分は、もう生きることをやめていたのではなかったか。

もう誰からも省みられることなく、このまま朽ち果ててゆくだけの運命なのだと半分諦めていたかも知れない。

そんなことを思う今この時、虫の存在を忘れ去っていることに気づきもしなかった。

がたん。

また、戸が鳴る。

目を見開く。

走っていた。

そんな体力がまだ自分にあっただのかと驚くことすら忘れていた。

否、間違いなく生きていたのだ。

自分には十分な体力が当然ながら残っていたのだ。

何故なら自分は普通に生きていて、そして――

戸を開ける。

「テンニ先生」

声が、足元から聞こえる。

見下ろす。

「お願い致します」

地に突っ伏したその男は頭を上げもせず悲壮な声で叫んだ。

「どうか、どうか先生の偉大なる法術にて我らをお救いください」

言葉を返すこともできず、見下ろし続ける。

すると男はがばっと顔を上げ、強い意志を込めた目で真下から訴えてきた。

「どうかあの鬼を、川原にうち捨てられていた土地爺と同じように葬ってください」

「――」

「これを」

男は小さな巾着をそっと両手に載せて差し出した。

「ムイの粉です」

聞くが早いか、ひったくる。

土間に飛び降り、甕のふたを払いのけ、柄杓に組んだ水の中にその袋の中身を一気に空け、またたく間に飲み干す。

一滴たりとも、その水をこぼすことなどなかった。

「うう」呻き声が勝手に喉から迸る。

体中の筋肉が目覚め、みるみるうちに力がみなぎってゆく。

虫は――もはや虫けらどもは恥じ入るように一匹残らず消え失せていた。

「どの、鬼だ」久しぶりに言葉を口にする。

「私の父だった者です」男は再び地に頭をこすりつけた。「病にて亡くなりましたが、棺が埋められる前雷が落ちたため、詐屍鬼となって我ら親族の者を襲うのです」

テンニは黙って聞いていた。

「川原にうち捨てられていた？」

ふと、訊く。

「そう言ったな。土地爺が？」

「あれは」男は意外そうな表情でテンニを見上げた。「あなた様のなされた事では、なかったのですか」

「知らん」テンニは首を振った。「いつの話だ」

「今朝早くでございます」男は頭を垂れた。「ヌユクの土地爺だという話です。首が無くなり、こと切れていたそうです」

「鬼が？」テンニは聞きなおしたが、すぐに「そうか」と頷いた。

何者の仕業であるのか、いくつかの推測がすぐに脳裏に浮かぶ。

「それは人間が為したことだという専らの噂でございます。てっきりテンニ先生がおやりになっ

たものだと」男は正直に答えた。

「鬼の首を取ることをか」テンニはそう言い、それから薄く笑った。「儂はそんなやり方などせん」

「も、申し訳ありません」男は声を裏返らせて謝った。「無論、先生の偉大なる法術にいささかの疑いも持つことなどございません」

「それはいい」テンニは首を回し、肩を回した。「じゃあ、行こうか」顎で男に立ち上がり案内するよう指示する。

「ありがとうございます」男は大急ぎで立ち上がり、腰をかがめるようにして先に立ち歩き始めた。



「閻羅王様」小鬼が小走りに来て報告をする。「聡明鬼が参りました」

「聡明鬼が？」閻羅王は玉座の上で眉をしかめた。「また急に、何用か」

「わかりません」小鬼は小さく答えた。「ただ、閻羅王に取り次げ、とのみ」

「どのような様子だったか」閻羅王は探りを入れた。「急いでいるようだったか、はたまた怒っているようだったか」

「ええと」小鬼は必死で聡明鬼の様子を思い出した。「特に、怒っているようにも見えませんでした。……目つきが、いつもよりも真面目なようでした」

「それは、怒っているということではないのか」閻羅王はまた訊いた。「あ奴が真面目な目つきをするとは、何か嫌な予感がする」

「あんたに聞きたいだけだ」入り口でリュージュンが声を張り上げた。「もたもたしてるからさっさと来ちまったぞ」

「あ、ええと」小鬼が慌てる。

「ふん」閻羅王はふんぞり返った。「儂に何を聞こうというのだ。滅多なことは口にせんぞ」

「あんた昨夜、土地爺の一人の骸を陽世で運んだか？」リューシユンは単刀直入に訊ねた。「千里牛を使って」

「ああ？」閻羅王は口をぽかんと開けた。「土地爺の？ 骸――骸？」逆に訊ねる。「土地爺が死んだというのか」

「なんだ」リューシユンは肩を落とした。「それすら知らないんだな……生死簿に載ってないのか」

「生死簿は人間が鬼魂となったものしか載らん――差官を呼べ。どこの土地爺が死んだのか」小鬼を怒鳴りつける。

小鬼は飛び上がり、疾風のように地獄の役人を探しに行った。

「ヌユクの土地爺だよ」

リューシユンは教えてやりながら閻羅王の正面、床の上にどっかと胡坐を掻いた。

「ヌユクの」閻羅王が繰り返す。「一体、何故ヌユクの土地爺が」

「――」膝の上から頬杖を突き、リューシユンは閻羅王をじっと見た。「じゃあ、昨夜あんたの他に千里牛を使った者はいなかったか」

「――」閻羅王もリューシユンをじっと見た。「一体貴様は、何を知りたいのだ。何が言いたいのだ」

「その土地爺を、人間が殺したという噂を流した奴がいる」リューシユンは言った。「あんたの差し金かと思って、確かめに来た」

「儂が？」閻羅王は訝しげに訊き返した。「何故そのようなことを儂がする」

「だな」リューシユンはこくりと頷き、立ち上がった。「陰陽師だとか降妖師だとか、最近頭のいい奴とばかりつるんでたから、ついあんたのことまで頭の回る奴だと思い違いしてたようだ――邪魔したな。そんじゃ」

扉が閉まり、しばらく閻羅王は一人玉座の上に取り残される形となった。

「閻羅王様、お呼びでございませうか」差官がやって来て、茫然とする閻羅王に控えめな声をかけた。

「――」閻羅王はゆるりとその方を向き「ああ」と言った。「ヌユクの土地爺が死んだというが」

「はい」差官は帳簿に目を落した。「今朝方、メイヨウの川原で首の無い骸となり見つかったとのことですよ」

「死因は何だ」

「頭を食い千切られていたということです」差官は表情を変えることもなく淡々と推測を述べた。「恐らくは無常鬼の仕業かと思われます。ちなみにその無常鬼もすでに、降妖師の法術により葬られたようです」

「降妖師」閻羅王はぼんやりと繰り返した。「頭のいい奴か」

「え？」差官は顔を上げた。

「――」閻羅王は差官をじっと見た。

「閻羅王さ」

「貴様聡明鬼」突然閻羅王は炎を吐くがごとく吼えた。「儂が頭の回らぬ愚か者だということか」

聡明鬼はその頃陰陽界を歩きながら、ケイキョに訊いてみよう、と思っていた。

方々に草の生えている、人の手の入らぬ荒地である。

「ケイキヨ」リューシユンはいつものように、遠慮もなくその名を高らかに呼んだ。「いるか。ケイキヨ。おおい」

件の鼯は土の下にいた――隠れていた。

陰陽師の霊獣リョーマに見つかったため、早いところ棲処を変えておこうと思った矢先だったのだが、まさかこんなに早くに再び聡明鬼の訪問を受けるとは想定していなかったのだ。

きっとまた、面倒なことに巻き込まれるに違いない。

くわばら、くわばらだ。

今おいらは留守にしていることにして、あいつが諦めて立ち去るまでじっとしておこう。

「いないのかな」案の定リューシユンは土の上で腕組みをし呟いた。「仕方がないな」

しめしめ。

もうすぐだ。

「また陰陽師に頼んで、リョーマに探してもらおうとするか」

聞くが早いかケイキヨは土の下から飛び出していた。「旦那。旦那、あつしはここにいやすぜ」

「なんだ、いたのか」リューシユンは腕組みを解いた。「寝てたのか」

「へ、へい。昨夜の疲れが出やして、ぐっすり」と

「精霊のくせにか」リューシユンは吹く。

「ええっと、そ、そ」ケイキョは慌てる。「そりゃ、昨夜の仕事はそりゃ精神を使いやしたから、いくら精霊といえど」

「そうか」あっさりと流した後、リュージュンは急に真顔になった。「その昨夜のことでちょっと聞きたいんだがな」

「え」ケイキョは思わず身を引く。

「お前、俺とコントクが無常鬼を天心地胆に引きずり込んだ後も、あの川原にいただろう」リュージュンは引いた身の上から覆い被さるかのごとく鼬の顔を覗き込む。「あの後、頭を食い千切られたあの土地爺の体、どうなった」

「――」ケイキョはびくびくと下から聡明鬼の顔を見上げた。「どう……といいやすと」

「誰かがどこかに、運び去ったとかいうことはなかったか」

「――」

鼬は思い出していた。

「行くぞ」

聡明鬼が叫び、鬼二人は前後から無情鬼の痩せた体を捕まえたまま、地を揺らすかと思えるほどの勢いで走り出した。

それが闇に消え、ケイキョはしんと静まり返った川原の上土地爺の骸とともに置き去りにされたことにやっと気づいた。

「ひいい」気づいた途端、恐怖と不気味さに体をわななかせ、腰を抜かしたまま砂利の上を後退る。

だがその時。

不意にごう、と上から音が鳴り、見上げると同時に顔に強烈な風がぶつかってきたのだ。思わず顔を腕で隠す。

風はただちに止み、はっと目を開けると今までそこにあった土地爺の体は消えていた。
慌てて見上げる。

ケイキヨの目に映ったのは、空を翔る獣の後姿だった。
その体は、馬のものだ。

そしてその獣の口には、首を失った土地爺の体が唾えられていた。
その口――

龍の口だ。

リョーマ――

ケイキヨはその時、ただ胸の内でその名を呼ぶばかりだった。
その背にはしかし、陰陽師たちは乗っていない。

リョーマでは、ないのか？

だがしかし、その姿は紛れもなくリョーマだ。
どこかに、主人たちを下ろして単身飛んできたのか？

何のために？

その骸を、鬼の体を運ぶために？
何処へ？

一体、何を考えているんだ？

「ケイキヨ」

声がする。

「おい、ケイキヨ」

はっと目を開ける。

顔を上げると聡明鬼がじっと見下ろしている。

心なしか、怒ったような目だ。

「い、いえ」 鼬は尻込みしながらおずおずと答えた。「あっしは、何も」

「嘘つけ」

「う、嘘なんて」

「何を見た」

「いえ、ですからあっしは何も」

「リョーマ」

「ひい」 息を呑む。「み、見てませんよそんな、リョーマなんか」

「リョーマを見たのか？」 リューシユンは驚いて訊き返す。

「あっ」 ケイキヨは口と目を丸くした。

リューシユンもまた目を丸くして鼬を見る。



「リョーマが鬼を運んだ？ なぜリョーマが？」 リンケイも驚いて目を丸くした。

「わからん」 リューシユンは鼬の首の後ろをつまんで持ち上げた。「こいつがそう言うんだ」

「は、離してくださいえ」ケイキョはもがいた。

「お前とジライは、俺とコントクが無常鬼を陰陽界に連れ出した後リョーマから降りたのか？」リューシュンはケイキョには答えず陰陽師に訊いた。

「ああ、お前たちが陰陽界に入ってからしばらく経った後でな」

「どうして」リューシュンは口を尖らせた。「万が一無常鬼が天心地胆から逃げ出していたら、真正面から鉢合わせしていたかも知れないんだぞ。なんで降りたんだ」

「最初は降りるつもりなどなかったさ」リンケイも文句を言う口調で答えた。「だがリョーマの背の上からでは、どうしても天心地胆の向こう側へ送り込む法力がぶれてしまうのだ。だから二人とも降りて、注力せざるを得なかった」

「そう、か……」流石にリューシュンも納得する他なかった。「で、その時リョーマは」

「うむ」リンケイは縁側に前足をかけ鼻先だけ覗かせて興奮気味に息を切らせている愛犬をちらりと見た。「確かにあいつはその時、一人空で待機していたはずだ……我々も天心地胆の方に気を集めていたからな、リョーマがその間に鬼の体を運んだと言われても、そんなことはない、言い切れん」

「そうか……」リューシュンはやはり、そう返すしかなかった。

「けど旦那」襟首をつままれた格好のまま、ケイキョがふと洩らした。「無常鬼を封じるってえそんな短い間に、鬼を運んでまた戻ってくるなんてこと、いくらリョーマとはいえできるものなんすかねえ」

あう、あう

リョーマが、鼬の声を聞きつけてか急に吠え出した。

早くこっちに來い、遊んでやるから、とでも言っているようだ。

「見ていた風な口を利く奴だな、お前」リューシュンはつまんだ襟首を上下に振った。

「は、離してください」ケイキョが悲鳴を挙げる。

「しかし鼬の言うことにも一理ある」ケイキョの名付け親でありながらリンケイはその名を呼ばずに言った。「俺たちが法術を終えた後、リョーマはただちに降りて来て傍についていた」

「連れて行って、みるか」リューシュンが不意に提案した。

「連れて行く？」リンケイが訊く。「――鬼の骸が見つかった場所へか」

「うん」リューシュンは頷く。

「誰を？」ケイキョが訊く。

聡明鬼と陰陽師は揃って鼬を見下ろした。



あう、あう、あう

リョーマは嬉しそうだ。

全速力で駆けている。

彼の少し前ではケイキョが、これもまた全速力で走っている。

細長い体がしなやかに地を滑るがごとく見える。

全速力、というのは少し違っているようだった。

ケイキョの方は紛れもなくそのようだが、リョーマはわざと速度を緩め、ケイキョに追いつかぬよう一定の距離を取って追走しているのだ。

場所は川原、メイヨウの地に入ったところだった。

ざざ、と音を立て砂利を蹴散らし、突如リョーマは走るのを止めた。

前を走るケイキョもすぐに立ち止まった。

振り向く。

リョーマは辺りの砂利に鼻をつけ、盛んに匂いを嗅いでいる。
嗅ぎながら、用心深くゆっくりと歩く。
右に行き、左に行き、立ち止まり、また右へ行く。

ケイキョは尻尾をくるくると巻きながら、不安げにその様子を見守っていた。

ぐるるる

リョーマは低く唸った。
ケイキョはびくり、と身をすくめた。
それは小さくあどけない子犬の態様に似つかわしくもない、猛獣の声だった。

だがケイキョには、リョーマが何に対して唸ったものか解っていた。
鼬自身、そこに漂っているただならぬ“気”——その残留を、髭に感じているのだ。

「そう……そう、それに」鼬は意識してか否か己にもわからぬまま呟いていた。「あの時おいらも、あそこにいた……鬼の首無し死体の隣に、おいらも……もしお前なら、リョーマ、鬼じゃなくおいらを、啜えてたはずだ」



朱砂を口にふくむ。
手には打鬼棒。

それで鬼を打てば、打たれた鬼は血と化して流れ去り、二度と投胎できなくなる。

「こちらです」男はテンニを振り向き、手で行く先を示した。
示された先には土饅頭が見える。

死者の墓だ。

あの土饅頭の下に、この案内人の父親が遺体となって眠っているのだ――否。

眠ってなどいなかった。

突然土饅頭は真ん中から割れ、中から鬼と化した父親が天高く飛び出して来た。

「わあああ」案内人は腰を抜かした。

その男の頭上を跳び越し、テンニは上空に向けて法珠を投げつけた。

それは鬼の額にぶつかるそばかり見えたが、すんでのところで鬼は首を傾けてかわし、そのまま地を揺るがして両の足で降り立った。

そして着地するや、テンニの顔面に向けて拳を突き出した。

テンニの側もぬかりなくそれを避け、口に含んでいた朱砂を、法力込めあたかも砂嵐のごとく鬼に吹き付けた。

鬼の、朱砂を浴びたところから煙が上がる。

鬼は苦痛に轟音のような咆哮を上げ、高く跳躍しながら後退る。

テンニは逃避を許さず、鬼の向かう同じ方向へと走る。

その速さはとても人間の走るものとは思えなかった。

黒い影が、音もなく瞬時に移動したかのように見えたのだ。

鬼は跳躍しながらも、到底逃げおおせるものではないとすぐに知った。

闘わねば、この者から解放されることはない。

詐死鬼のこの手でひと叩きするだけでよいのだ。

それだけで、相手は所詮人間、死に至る。

ぐおおおお

鬼は吼え、迫り来るテンニと真っ向からぶつかった。

と思ったのは、鬼の方だけであった。

突然、テンニの姿は鬼の視界から消えた。
鬼の拳はまたしても虚しく空を切ったのだ。

どこだ!?

慌てて振り向く。
後ろにもいない。
上か。
見上げる。
そこにもいない。

真に、消えたのか!?

「ここだ」

テンニは鬼の背に、まるで風に飛んできた落ち葉が貼り付くようにひっついていて、
そしてずりりと鬼の両肩の上に立つと、何のためらいもなく打鬼棒を鬼の脳天へと真っ直ぐに
打ち下ろした。

鬼は最後の咆哮を残して後、溶けて血と化し大地の上に流れた。
テンニは宙でぐるりと回転し、地に降り立って仕事の終了を確認して、仕事を頼んだ男の方を
振り向いた。

男は一部始終を、腰を抜かしたまま息も忘れて食い入るように見つめていた。

「儂のやり方は、こうだ」テンニは言った。「鬼の首だけ取るというようなことは、やらん」

だが男は聞いているのかいないのか、口をあんぐりと開けるばかりで言葉も発することができ
ずにいた。

テンニはふっと息をつき、鬼のいなくなった方向に再度向き直った。

首だけを食い千切る――無常鬼あたりがやりそうな仕方だ。
だがこの男、儂がやったと思っていた。
人間が鬼に対して、そんなことできるわけがなかりょうに。

だがそれを人間がしたと思いついでいる奴らがいるということだ。
裏を返せば――

人間が鬼に、そうできればいい。
人間が鬼に、そういうことをしてやりたい。

そう望む奴らが今、存在しているということだ。

「何か、見つけたようだな」川原を歩きながら、リンケイが呟く。

「ああ」隣を歩くリュージュンも頷く。

彼らの遙か先で、リョーマが砂利を盛んに嗅ぎながら歩き回っているのが見える。

「同類の、いわば敵の匂いが残っているということか」リンケイは推測する。

「敵？」リュージュンが横を向く。「同類なのにか？」

「同類なればこそ、さ」リンケイは答える。「覇権争いの本能だ」

「なるほどな」

「しかし龍馬は妖獣、並の人間にたやすく取り扱えるものではない」リンケイは歩きながら顎に指を当て、思案する。

「お前も人間じゃないか」リュージュンは歩きながら指摘する。

「並の、と言った」リンケイは顎に指を当てたまま横目でちらとリュージュンを見る。

「ああ」聡明鬼は納得し、空を向いてからからと笑った。「確かに、お前人間といっても半分妖怪みたいなもんだからな」

「半分鬼みたいな神に言われるとはな」リンケイは肩をすくめたが、憎くてそう言うのか嬉しくてそう言うのかは玉帝にすらはかり知れぬところに違いなかった。

そんなやり取りをする内、二人は二匹の傍に辿り着いた。

「並の人間に扱えないっていうんなら、龍馬を使って土地爺の骸をここまで運ばせたのは、並の人間じゃないってことだな」リュージュンは理屈を並べ直した。

「うん」リンケイは、いまだ険しい表情でいる愛犬の傍にそっとしゃがんで見守りながら頷いた。「陰陽師、降妖師、いずれにしろ法力を操る者だろう。そしてそいつの目的は」

「人間たちに、反旗を翻すことを鼓舞しようってわけか……だがそいつ、わかっているのかな」

リューシユンの疑問にリンケイは眸を向け「確かに」と答える。「それをするという事は、ただ土地爺を相手にするだけでは済まないということを」

「そう」リューシユンもしゃがみこみ、リョーマを見る。「最終的には閻羅王、陰曹地府すべてを敵に回すということになる、とな」



水を飲み干す。

一滴たりとも零すことなく。

柄杓から口を離し、テンニは天井を向いてふう、と息をついた。

先日、詐死鬼の退治を頼んできた男から受け取ったムイは、まだ大分残っている。

二日に一度、一匙分ずつ水に溶いて飲めば、月が一巡りする間ぐらいはもつだろう。

だがその後、どうする？

テンニは、医師の言った「薬草が手に入るまで、もうしばらく待て」という言葉を、もはや信用できなくなっていた。

医師の言う「薬草」とは、ムイのことではない。

そのムイに冒された体を元に戻すための薬だ。

中毒症状――あの汚らわしい虫ども――を和らげ、少しずつムイを必要としなくともよいように体質を変えてくれる薬だ。

だがその薬草自体が、なかなか手に入らないときている。

医者は耐えよ、と言う。

体中を、小さな黒い虫が何十匹、何百匹と這いずり回るのを、ただひたすら耐えて待て、と。鬼を退治できる男が、それぐらいできぬはずはない、と。

医者はそう言って、笑う。

その度に、鬼でなく医者を殺してしまおうかとさえ思う。

そしていっそ、自分をも。

それほどまでの苦しみだ。

先日はムイを差し出した男から鬼を退治してくれと言われたので直ちにそうしたが、もしその時「玉帝を殺してくれ」と頼まれたのであれば、自分は直ちに玉帝を殺しただろう。

逆に「閻羅王を殺してくれ」と頼まれたのであれば、直ちに陰曹地府まで閻羅王を殺しに行っていただろう。

それほどまでに、この体はムイを求めるのだ。

今のうちに、次を探さねば――

降妖師テンニは焦りを覚えた。

できることならば、もう二度とあの苦しみを味わいたくない。

ムイが、必要だ。



訪問者は、真夜中の闇に紛れてやって来た。

訪問者――といっても、仕事を依頼しに来たというわけでもなさそうだった。

なぜならその者は何も言葉を話さず、ただ手に得物を持ち、寝ていたテンニの喉元にそれを突き付けるだけで服従を要求し、襟元を掴んで起き上がらせるとそのまま外へ連れ出し――

怪物の前に、テンニの体を突き出したからだ。

テンニはそこで初めて息を呑んだ。

その生き物を――生きているのだろう、ゆっくりと体を上下させ、呼吸しているようだ――彼は生まれて初めて目にした。

頭が龍で、体が馬。

そして、見上げるほどの巨体。

テンニを連れ出した者たち――二人いた――は、黙ったままテンニの体を担ぎ上げ、投げ飛ばした。

様子を見るため力を抜いていると、その怪物の背にあらかじめ乗っていた他の二人の男たちがその体を受け止め、怪物の馬の背に跨らせた。

跨るといっても、足が下に伸ばせるわけではない。

鞍がついているわけでもない。

毛むくじゃらでゴつゴつと硬く骨張っている、甚だ乗り心地の悪い、さらにゆさゆさと揺れる不安定な背に、テンニは這いつくばるようにしてしがみつかねばならなかった。

そうかと思うといきなりその怪物は風を切って上空に昇り始めたのだ。

思わず目を閉じる。

ごうごうと風の鳴る音が長く続いた。

顔に当たるその風も、次第に冷たくなってゆく。

そして、草と樹木の匂い。

――山か？

思ってテンニは薄く目を開けた。

まだ暗い。

だが木々の高い影が目下にあるのはわかる。

龍馬はその木々の梢をどんどん飛び越してゆく。

山を越えてゆくものかと思われたがそうではなく、やがて龍馬は、中腹辺りの沼のほとりに向けて降下しはじめた。

降りてゆく先では、焚火があちこちに灯っている。

龍馬の背からテンニは突き落とされ、落ちた先でまたしても別の男らによって掴み上げられた。

捕まえられたまま、焚火の奥に設えられている天幕まで引き立てられ、乱暴に中に押し込まれる。

「降妖師を連れて参りました」テンニの両手を彼の背の上でひねり上げながら、男が叫ぶ。

顔を上げると、天幕の中には一段高い床が敷かれてあり、その上に一人の若い男が胡坐を掻いていた。

「ご苦労。下がれ」若い男は――二十歳そこそこに見える――静かに言い、手下はテンニをどん、と最後に突き放すと天幕から出て行った。

――ははあ。

テンニは、やはり此度の乱暴者どもの訪問は、仕事の依頼だったのだと判断した。

ずいぶんと手の込んだ、そして遠慮も会釈もない、傲慢な依頼の仕方だが、恐らくはそうだ。

こいつら――山賊か？

「貴様、閻羅王を殺せるか」若い男は、テンニに問うた。

「――」テンニはいささか虚を突かれた思いがした。

男は答えを待っている。

テンニはほんの少しの間だけ考えを巡らせてから、答えた。

「報酬次第でな」

「だろうな」男は面白そうに笑う。「金でもなさそうだな、その報酬。金であれば、あんな小汚い小屋には住まんだろう」

「ふふ」鼻で笑い「確かに金ではない。が、儂への報酬はちと高いぞ」テンニは告げた。

「何が要る」男は問うた。

「ムイ。粉に挽いたものを二日に一匙ずつ」

「……」

男はすぐに「承知した」と答えることなどしなかった。

その様子を見てテンニは、この男の言葉ならば医者よりは信用に値すると思ったのだ。

「フラ」男は不意に声を張り上げた。

「？」テンニは、意味がわからず眉を寄せた。

がたん、と戸板が鳴り、その下に空けられた穴から一匹の黒い犬が這入ってきた。

毛の短い、だがしなやかで艶のある、美しい犬だ。

フラと呼ばれたその黒犬は、大人しく主人の膝元に来て座った。

「そのムイとやらを、今持っているか」男はテンニに訊いた。

「持っているが」テンニは懐から巾着を取り出した。「どうする」男に向けて差し出す。

男は巾着の口を開け中身を確認し、そして犬の鼻先にそれを近づけた。

犬はくんくんとムイの粉の匂いを嗅いでいたが、しばらくすると鼻を持ち上げ主人の顔を見た

。気位の高い、自信に満ちた顔をしている。

「覚えたか」男は巾着の紐を絞り、テンニに投げ返した。「これでフラは、いつでもムイを見つけることができる」

「この、犬が」テンニは茫然と訊き返した。

「信じていい」男は言った。「俺の名は、キオウだ」

二者はしばらく無言で見合っていたが、やがて同時ににやりと笑った。
互いの生きる道を見出したということだ。



かくしてテンニは山賊の一味に加わる形となり、酒と食料、そして寝床を与えられた。
いずれにしろ天涯孤独の一人身であったから、突然の生活の変化を憂えなければならぬ理由などない。

ましてや命をつなぐムイについて保証を取り付けたのだ。
運が向いてきたと考えてもよいのではないか。

――それにしても。

キオウと名乗った頭の、傷ひとつない滑らかな肌が思い起こされる。

――一体、何者なのだ？

これだけの数――数十人は下らないだろう――の、凶暴な賊どもを従える、うら若き男。
何か、特別な能力を持っているのだろうか。

龍馬。

あれは妖奇の獣だ。
それすらも従えているということか。
一体、どのような力でもって――

貴様、閻羅王を殺せるか。

男はそう問いかけた。
あれだけの賊と龍馬を服従させ得るほどの男が、閻羅王を殺すことはできぬというのか。
そして降妖師である自分を頼ってきた――

――閻羅王を殺せぬ訳は――鬼、だからか。

テンニは頭上に広がる星空をじっと見上げながらそう解釈した。
確かに、それならば筋が通る。

――此度は鬼に雇われたか、降妖師テンニ――

溢れるほどの星を眺めながら、テンニは肩を揺らしてひそかに笑った。



同じ星空を見上げながら、キオウは母親のことを思い出していた。

自分を身籠ったまま命を落とし、地獄で自分を産んだ母のことを。

母は、蔑まれていた。

物心ついた時にはすでに、そのことに気づいていた。

否、そのことに気づいたから物心がついた、という方が正しいのかも知れない。

鬼にしろ差官にしろ妖鬼にしろ、地獄に棲む者共は母を、穢れたものとしてしか見なかった。森羅殿に立ち入るなどもつてのほか、陰曹地府の片隅に追いやられ、姿を見せるなど言われ、万一姿を見られた時にはひどく傷めつけられた。

その息子であるキオウに対しても、地獄の者共は容赦しなかった。

元々が、小さい者を慈しみ育てるなどという感情を持ち合わせる者たちではない。

しかし息子に投げつけられる罵詈や塵芥などはすべて、母がその背に受けてくれた。

キオウをしっかりと胸に抱いて、母は何も言わず耐えていたのだ。

そんな母を、愛しいと思っていた。

母がいてくれるから、自分は生きていられるのだということを知っていた。

自分が早く大人になり、力をつければ、強くなれば、母を守ってやることができる。

そのことに気づいてからキオウは、どのようにすれば強くなれるのかと考え始めた。

だがその答えはすぐに見つからなかった。

母は、一人で陰曹地府の中を歩いてはいけないと言った。

しかし成長するにつれ好奇心や探究心に目覚めていくキオウに、そのいいつけを守ることには無理があった。

ましてや、一日も早く母を守れるほど強くなりたいと願ってのこと、キオウは再々母の目を盗んではあちこち探検をした。

もちろんぬかりなく、地獄の者共の目に留まらぬよう用心してのことだ。

キオウは、陰陽界から天心地胆を抜けて陽間へと出られることを知り、そして母が、元はその眩しい陽間に生きる人間の女だったことを知った。

そして結婚し自分を身籠ったが、出産の時に命を落とし、鬼魂となって地獄へ行った後自分を

産んだのだ。

胸が痛んだ。

母は、鬼魂となった後も自分を産み、育て、守ってきてくれたのだ。

身代わりを見つけて転生することもせず。

自分だけが逃げて楽になろうなどと、母は微塵も思いはしなかったのだろう。

キオウは強く目を閉じた。

母を、幸せにしてやりたい。

転生させ、今度こそ不幸な死に方をせず、幸せの中で天寿を全うさせてやりたい。

母の、笑っている顔を見たい。

少しだけ、自分と母の未来に希望が見えたような気がした。

しかしそれは、束の間だった。

母が葬られた墓を参りたいとキオウは思ったのだ。

母の婚家――自分の生家となるはずだったその家の人間に近づき、墓の場所を訊ねた。

訊ねる理由は、自分の親が十数年前この家の女性に大変世話になり、いつか礼をしたいと言っていたが叶わぬまま病で他界してしまった、その女性も亡くなったと聞いたので、せめて親の遺志を継ぎ、墓参りしたいということにした。

その家の人間はしばらく考え、話し合っていた。

すぐには、誰のことなのかわからないようだった。

キオウもまた不審に思った。

十数年前、子を産む際に命を落とした嫁のことを、知らぬはずがない。

「奥様は、現在もお元気に生きていらっしゃいますけど」

家人の、困ったような顔で言われた言葉は、すぐにはキオウの中に染み込んでこなかった。

意味がわからなかった。

「いや、確か、子を産む際にお亡くなりになったと……」キオウはもごもごといい淀んだ。

「少し、お待ち下さい」家の小間使いは――キオウより少し年嵩の少年だった――は、面倒くさそうに眉をしかめながら屋敷の中へ入って行った。

キオウは待った。

大分待たされた。

お待ち下さいというのは嘘で、向こうとしては正体不明の怪しげな若造が諦めて帰るのを待っているのかも知れなかった。

だが決して諦めるつもりはなかった。

一晩中でも、三日三晩でも、風雪雨嵐に打たれようとも、待ち続けてやる。

やがて出てきたのは腰の曲がった年老いた男で、下から見上げるようにキオウの顔を見るや、目を見開き皺だらけの顔を震わせて、言葉も出ずにいた。

キオウは睨みつけるように老人をじっと見下ろした。

「十数年前」老人はかすれた声で呟いた。「子を産む際に亡くなった、前の奥様」

「そうだ」キオウは一言答えた。「その人の墓に参りたい」

「そなたの名は」

「キオウ」

「――キオウ」老人は声もなく繰り返した。「ハユク様の……子か」

「――」キオウはつい頷きそうになり、すんでのところで止めた。

ハユクとはキオウの母その人の名に他ならなかった、しかし今自分は、飽くまでその人と関わりのない存在でなければならないのだ。

だから黙っていた。

老人はしかし、それだけですべてを理解したかのようにだった。

「墓はここから西北の山の中、水仙の群れ咲く池のほとりにある」老人はキオウの顔を、瞬きもせず見つめながら告げた。「だが、悪いことは言わん……その墓を見ても、決して何も思わず、そしてもう二度とここへ――陽世へと足を踏み入れてはならん」



その墓を見ても、何も思わず――

もう二度とここへ、陽世へ足を踏み入れてはならん――

老人は、そう言った。

悪いことは言わない、と言った。

それはどういう意味だったのか。

キオウは、教えられた場所にあった“もの”を言葉もなく見下ろしながら、考えた。

教えられた場所にあった“もの”、それは、ほじくり返された地面の穴ぼこそこから生え出ている雑草、破壊された棺、その中に投げ込まれた様々な塵、芥、そしてその下にようやくほんの僅か姿を見せる、灰色にくすんだ骨――それが母のものなのか、道に迷いここに落ち込んで命を落とした獣のものなのか、それはわからない。

水仙。

その可憐な花々は確かに群れ咲いていた。

母の、ハユクの墓をずっと遠巻きにしたところで、まるでここだけを忌み嫌っているかのように避けて。

鳥が、頭上で鳴いている。

楽しそうにさえずり、仲間と群れなして飛んで行く。

風が吹き、水仙たちがさわさわと揺れる。

池の水に小波が立ち、小さな魚がぽちゃん、と跳ねる。

キオウは、どれだけの間墓を――否、そこにある“もの”を、見ていたのだろう。

そういう、ことだったのだな。

やがて彼の、まだそんなに憎悪を抱いたことすらない若い胸の内に、ひとつのことが染み渡ってきた。

母は生前も、この陽世においてさえも、忌み嫌われる存在だったというのだな。

その墓を見ても、何も思わず――

それはつまり、お前の母が虐げられていたという事実を見なかったことにしろと、そういうことか。

もう二度とここへ、陽世へ足を踏み入れてはならん――

それはつまり、お前の母を虐げていた人間たちにお前は到底敵いはしないのだから、大人しく陰間に戻って何事もなかったことにしておけと、そういうことか。

敵わない、と。

お前では敵わない、と。

人間たちに。

人間どもに。

その腐った、尊ぶべき価値などどこにも無い、まさに汚らわしい蠢く塵屑どもに。

ぐおおおお

キオウは生まれて初めて、咆哮した。

鬼の咆哮であった。

鬼が人間に対して憎悪を昂ぶらせ、そいつらの腐肉を喰らい尽くしてやりたいと欲する際に放つ、地獄の雄叫びだ。

それは恐らく山の麓にまで達したに違いない。

母が住んでいた屋敷、母を捨てたあの忌まわしき人間どものいる所にまで、届いただろう。

そのつもりでキオウは吼えた。

貴様らを、一人残らず喰い殺してやる。

それは宣告、宣戦布告だった。

ぐがおおおおお

うがあああおお

何度も、何度でも彼は吼え続けた。

日が落ち、月が昇り、それが中天に差し掛かってもまだ、彼は吼えていた。

きらり

何かが、月の輝きを一瞬だけ遮って通り過ぎた。

キオウはつい口を閉ざし、それを目で追った。

長い。

空を飛ぶ、長い生き物だ。

身をくゆらせ、それは音も無く夜空を翔けた。

龍馬だ。

遠ざかってゆくのかと思うとそれは上空でぐるりと向きを変え、再び月の前に戻ってきた。
月を背にして上空に留まり、じっと上からキオウを見下ろすのだ。

「お前は何だ」キオウは見上げて問うた。

龍馬は少しの間キオウを見ていたが、不意に口から鳴き声を発した。

フ ラ

そんな風に聞こえた。

「フラか」キオウはそのまま呼んだ。「俺に何か用か」

龍馬ーフラは、その問いに対して鳴きはしなかった。
ただ静かに、音も無く空から滑り降りて来、キオウの傍に蹲るように身を丸めた。

キオウはその馬の背に昇った。

フラは立ち上がり、再び上空へと飛び上がった。

月に向かって、フラは飛んだ。

キオウはまったくのところ、その眩しい光の中にこのまま連れて行かれるのだと思った。そして自分はそこで、転生の日を待っているのだと。

だが、そうはできない。

すぐに気づき、首を振った。

「フラ」キオウは龍の首を軽く叩いた。「お前は龍だから、火を噴けるはずだ。そうだな？」

フラは短く鳴いて答えた。

「よし」キオウは頷いた。「あいつらを、まとめて焼き尽くす」



「模糊鬼」老人は地に膝を突き頭を突き、涙を流して訴えた。「模糊鬼キオウ、どうか気持ちを治めてくれ」

キオウは聞く耳を持たなかった。

すでに屋敷のあらかたは炎に包まれ、住人たちの命を阿鼻叫喚ごと呑みつくしていた。

「そなたの母ハユクはそなたを産み落すときに命を失った、儂らは慣わしに沿ってハユクの腹に七寸釘を打ち込んだ。地獄で鬼の子が、模糊鬼が生まれでないようにするために――だがその釘は銀でできていた、そのため山賊たちに墓が荒され、遺骸と共に埋めた宝物もろとも盗まれてしまったのだ。我らにはどうすることもできなかった、山賊に立ち向かえる剛毅の者などいない。だが申し訳ないことをしたと今でもずっと思っているのだ。山賊さえ出なければ墓の管理もきちんとやれたものを、本当に申し訳ないと」

キオウはその話を一度聞いただけで事情を飲み込み、次に自分がどうするべきなのかを知ることができた。

だが老人にとってはもう遅かった。

炎はすぐに彼を飲み込み、骨までを焦がし尽くした。

それを見届けた後、キオウはフラを山へと飛ばした。

山賊か。

まずは、礼を言わねばな。

そう考える。

奴らが、母の腹から銀の七寸釘を引き抜いたおかげで、自分は模糊鬼として生まれることができたのだ。

奴らがそうしなければ、釘の法力で抑えつけられ、自分は永久に生まれることなどなかっただろう。

そうだ。

まずはそのことに対し礼を言おう。

そしてそれから。

奴らを同じく、焼き尽くし喰らい尽くすのだ。



母の墓を荒らした山賊どもを滅ぼし、その一味と敵対していた別の山賊たちを従え、しばらくの間キオウは陽世で暮らした。

フラを操り、その炎ですべてを地獄へ落す。

フラはキオウにどこまでも従順で、普段は黒犬の姿となって常に傍についていた。

犬の姿である時でも、その牙は鋭く、人間の喉笛を噛み切ることなど造作もなかった。

キオウは年若くして恐れるものがない、不満のない生き方を手にしたのだ。

否、不満がないわけではなかった。

しばらく、母の姿を見ていない。

声も聞いていない。

キオウは久しぶりに陰曹地府へ戻ることにした。

天心地胆をくぐるが、フラを連れて行けないことがわかった。

そこで仕方なく独り陰陽界を歩き、生まれ故郷である地獄へと戻ったのだ。

だが母の姿がなかった。

棲処の中にも、外にも、どこにもいない。

「母さん」呼ぶが、返事がない。「母さん」何度も呼ぶ。

キオウは走った。

森羅殿が見えた。

ものも言わずに飛び込む。

最初に目についた小鬼の首を締め上げ「ハユクはどこだ」と叫ぶ。「俺の母さんは」

小鬼は甲高い笛の音のような悲鳴を挙げた。

「やめろ、模糊鬼」声がし、振り向くと地獄の役人である鬼差が帳簿を手に立っていた。「お前の母親はもう、ここにはいない。閻羅王により十八層地獄へ落とされた」

「何、だと」キオウは茫然と口にした。「十八層、地獄」

それがどういうところかは無論知っている。

何者だろうと二度と戻っては来れぬ、永遠の苦しみにただ苛まれるだけの処だ。

そこへ堕ちた者はもう二度と転生などできない。

永久にのた打ち回るだけだ。

「なぜ、だ」キオウの手から小鬼がどさりと落ちたが、キオウはそれに気づいてもいなかった。

「なんで、母さんが」

「お前の母親ハユクは、お前がいなくなったと言って、半狂乱になり森羅殿に駈け込んできた」
鬼差は事務的に説明した。「暴れて手がつけられぬ状態で、取り押さえようとした鬼差を噛み殺したのだ。それで閻羅王の逆鱗に触れ、十八層地獄行きとなった」

「――」キオウは瞬きを忘れ、立ちすくんだままがくがくと震えた。

「貴様も母親と同じ道を追いたくなければ、とっとと立ち去るがよい。そして二度とここへは来るな」

鬼差が冷酷に言い放つ。

どこかで、聞いたことのある言葉だ――

キオウは茫然とそう思った。

二度とここへは来るな。

二度とここへ、陽世へ足を踏み入れてはならん。

ああ、そうだ。

あの老人に、そう言われた。

あれは陽世でのことだ。

だがここは陰曹地府だ。
陰間でも同じことを言われるのか。

陽世にもいてはいけない。
陰間にもいてはいけない。

一体、俺にどうしろというのだ――

気づくと棲処の床の上にへたり込んでいた。
どうやって戻ったのか、まるで覚えていない。
閻羅王の千里牛にでも運ばれてきたのだろうか。

否、そんなことはどうでもいい。
キオウはのろのろと立ち上がった。

閻羅王――

鬼の生き死にの決定権を持つ存在。
母の生き死にを決定づけた存在。

この世でも、あの世でも。

キオウは陰陽界を歩き、再び陽世へ抜け出した。
フラが、大人しく座って待っていてくれた。

その龍馬の大きな姿を見たたん、キオウの目から涙が次々に溢れ出た。

フラの馬の体に顔を押し付けて、長い間若き盗賊頭領は泣いた。
フラは身じろぎもせず、次に主人が立ち上がるまでの長い時を傍で一緒に過ごしていた。



「月と太陽の言い伝えを知っているか」リンケイは月を見上げながら言った。

今宵の月は下弦、今にも空から力尽きて落っこちてきそうなあやうげな姿だ。
二人はリンケイの屋敷の縁にて、酒を酌み交わしながらそれを見上げていた。

「知らん」リューシュンは単純に答えた。

「その昔、太陽と月は兄弟だったという」リンケイは月を見たまま話した。

「――」リューシュンは思わずちらりと横目で陰陽師を見た。

彼が腹の中で何を連想しながらそれを話すのか、わかるようでもあるがやはりわからない――
そういうことにしておきたい。

「ある日、弟の月が乱暴を働いたので、兄である太陽は怒って月を破壊した」

「――」

「けれど時が経つにつれ、弟のむごたらしい姿が痛ましくなり、太陽はその欠片を集めてもう一度光を与えた――だから月は満ちたり欠けたりを、永久に繰り返すことになったという」

「――」リューシュンは何と答えてよいものやらわからず、酒を一口呑んだ。

「それとな」リンケイが不意にリューシュンの方を向く。「龍馬の不思議な性質のひとつに、こういうのがある」

「何だ？」リューシュンはまた単純に訊く。

「人間が何人か並んでいるとする」リンケイは手振りを交えて説明する。「龍馬は基本的に人間に懐く性質のものではないのだが、その中に、かつて心が砕けたことのある人間、或いは今にも心が砕けそうな人間が交じっていると、不思議にもその人間の傍に行き、恭順を示すというのだ」

「へえ」リューシユンは今度は単純に面白かった。「不思議なもんだな」

「うん」リンケイも笑って頷く。

「えっ」だがリューシユンは次に目を丸くした。「しかしその理屈だと陰陽師、お前の心も砕けたことがあるのか」

「俺の心か」リンケイはふと目を上に向けた。「特に砕けたという記憶もないがな」

「ああ、まあお前は半分妖怪だから、リョーマも言うことを聞いているんだろうな」

「そういえばあいつ、お前にはすぐに懐いたな」リンケイはそういうと酒を少し呑み、それからリューシユンを見てにこりと笑った。「妖怪でもないのに」

「ー」リューシユンはやはりまた言葉が返せなくなった。「ーそういや、あいつはどうなんだ、ケイキヨ」話をそらす。

「あいつも砕けてはいないだろうが、精霊だからな」リンケイは考えを巡らす。「リョーマの目には、いい玩具に見えるのだろう」

「ははは」リューシユンは苦笑し、また酒を一口呑んだ。

月の満ち欠け、かー

聡明鬼の頭の中に、ふと

薨（ぼう）

という言葉が浮かんだ。

もうすぐ、一薨の境の年が来ます。

温かく、穏やかな声。

玉帝の声だ。

リューシユンの、兄である存在。

その玉帝が、そう言ったのだ。

月の満ち欠けに、似ているものかも知れない。

ひとつの蔀が終わり、また次の蔀が始まる。

千二百六十年に一度――気の遠くなるような話だ。

そして次の一蔀の終わり、新たなる一蔀の始まり、その境に、これまでになかった凄惨な事態が起こる。

玉帝の予想だ。

「どうした」現実の声がし、はっとして横を向くと陰陽師が杯を口に運んでいた。「何を考えている」

「――」リューシユンは「なんでもない」という言葉を出せずにいた。

話しておいた方が、いいのだろうか。

この男に話せば、何か役に立つ情報を集めてくれるとか、法力を駆使してくれるとか、何かと助かることが多いのではないか。

否、そういった打算を抜きにして、この男には話すべきなのではないのか――

「どうした、俺をじっと見て」リンケイは面白そうにリューシユンを見返した。「月にも勝る美しさに見惚れているのか」

「阿呆か」リューシユンはぷいと正面を向いて杯を呷った。

リンケイは空いた杯にすぐに酒を注ぐ。

二杯目を口に運びかけ、その手を止め、リュージュンは「お前、玉帝に会ったか」とぼそぼそ訊いた。

リンケイはリュージュンを見、月に目を戻し「うん」と答えた。「お会いしたーお会い、できたよ」

「そうか」聡明鬼は酒を飲む。

陰陽師も追って呑む。

少しの間、風の音がゆるく聞こえた。

「弟の力になって欲しいと、頼まれた」リンケイは言った。「この先何事か、あるようだな」

リュージュンは黙っていた。

また、風の音が続いた。

「話が早いな」リュージュンは言った。「けどもしかしたらもう、始まっているのかも知れない」

「そうか」リンケイは答えた。「今回の土地爺のこと、か」

「ーかも、な」

「わかった」リンケイは顔を伏せた。「いろいろと、探りを入れてみるとしよう」

「ーあまり無茶をするなよ」

「無論だ」リンケイは言い、手に持つ杯を高く差上げた。「乾杯しよう」

「何に？」リュージュンはきよとんとした。

「望月、ではないが」リンケイは月を見上げる。「これも巡り合わせだ。今宵の、下弦の月に」

「ああ」聡明鬼も同じく月を見上げ、杯を差し上げた。「下弦の月に」

二人は酒を干した。



キオウの母への想いは消えることなく――あたかも夜空の星たちのごとく永遠に消えることなく胸の中にあった。

彼はそっと目を閉じた。

「月の満ち欠けが永遠に続くものならば」キオウは言った。「今宵のような下弦の月もまた、永遠に巡り来るのだな」

彼の傍に侍る龍馬は、夜空に龍の頭を向け短く鳴いた。

キオウはその馬の体を優しく撫でた。

「フラ」囁く。「お前がいてくれたから、俺はやけを起こさずここまで来れた……ありがとう」

龍馬は主人の顔を見下ろした。

彼はもう眠っているようだった。

龍馬も体を埋めるように低くし、静かに息をひそめ休息に入った。

「ぎゃああああああ」凄まじい悲鳴、否、咆哮が挙がる。「熱い。苦しい。焼ける……助けて、助けて」

とめど無くそれは響き続ける。

「キオウ」声は――もはや声とも言えぬその“言霊”は、息子の名を死に物狂いで呼んだ。「キオウウウ」ごぶごぶ、と火のように燃える水がそれを呑み込む。「キ、オ、ウウウ」だが水底から更に聞こえてくるその声は、聞く方が窒息してしまいそうなほどの苦しみに満ちた、熱水を肺いっぱい呑み込んだかのような響きで伝わってくるのだ。

母さん

呼ぶ。

呼ぼうとする。

だがそれは届かない。

母が自分を呼ぶ声だけがいつまでも耳に残り、こちらから何も差し出すことができない。

その手を引っ張って助け出すことも、焼けただれた体を冷たい水にさらしてやることも、苦しみから遠ざけてやることも、何もできない。

「二度とここへは来るな」

なぜなら俺には力がないから――

母さんを助ける力も、母さんを苦しめるものを排除する力も、何もないから。

何も、できないから――

汗だくになって目覚める。

がぼっと身を起こす。

横でフラが、主人のただならぬ様子に首を持ち上げる。

「――いつもの夢だ」乱れた呼吸を整えながら、キオウは龍馬に言葉をかけた。

いつもの夢――

一度砕けた心は、簡単に癒されるものではない。

砕かれた尊厳は割れた鏡の如く、もう再び元の姿に戻ることはないのだ。

月が永久に満ち欠けを繰り返すように、自分も永久にこの夢に苛まれ続けるのだろう――

キオウはもう一度空を見上げた。

いまだ月は低いところにかかっているが、そう時を置かずして日が昇り、その姿を呑み込んでしまうだろう。

その月を――今にも空から落ちてなくなりそうな月をぼんやりと見つめながら、若き頭領はあの日のことを思い出していた。

母の運命を知り、フラの体に顔を埋め泣き崩れてから、恐らく幾日か経った後のことだと思う。

あの日、心に決めた。

閻羅王を、斃（たお）す。

その想いが稲妻のように心に落ちた瞬間、それまで屍のように身動きもせず過していたキオウに生命の火が再び灯ったのだ。

閻羅王を、斃す。

地獄を、陰曹地府そのものを壊滅させるのだ。

そのためには力が要る。

陽世で手に入れた“力”は、まず山賊という荒くれ者どもの集団だ。

単なる物盗りの集まりに留まらず、今少しずつその勢力は増してゆきつつある。

世の人々からは盗賊として恐れられつつも、水面下ではもっと大きな策謀を動かさんとしているのだ。

それから、フラだ。

どこからともなく現れ、ある日突然キオウに従うようになった、龍馬。

今となってはキオウも、何の疑いもなくこの妖獣が自分の家族であると思っている。

フラがいるからこそ、彼は心を落ち着け揺らぐことなく山賊どもに采配を振るうことができるのだ。

そして、ムイの粉を報酬に働いてくれるという降妖師、テンニ。

その打鬼棒に触れた鬼でこの世に留まり続けられるものはいない。

その打鬼棒が閻羅王の脳天を叩き割るところを必ず見届ける、それがキオウの心にはっきりと刻まれた望みだ。

だがもうひとつ、キオウには手に入れたい“力”があった。

閻羅王を斃すために必要な“力”だ。

それは、鬼であった。

自分と同じ、鬼。

だが模糊鬼ではない。

閻羅王について情報を収集し始めた当初から気になっていた存在だ。

閻羅王に追従せず、遠慮会釈も恐れるところもないという、土地爺。

聡明鬼。

そう呼ばれている鬼だ。



「聡明鬼？」テンニは訊き返した。「ああ。その名は知っている。だが実際に会ったことはない」

「そうか」キオウは静かに答えた。「どこに住んでいるかは、どうだ」

「うん、大体のところは予測がつく」テンニは視線を頭目から外し、宙を見つめて考えた。「会いに行くのか？」再び頭目を見る。

「ああ」キオウは頷く。「そいつも、仲間に引き入れたい」

「どうかな」テンニは少し苦笑いをした。「一筋縄ではいかぬ奴らしいぞ」

「フラに攫（さら）わせるさ」キオウは臆することもない。「お前の時のようにな」

「なるほど」それでもどうかな、と思いながらもテンニは特に異を唱えずにいた。
彼自身も、聡明鬼には一度会ってみたいと思うからだ。

「ところで」キオウは話を変えた。「お前たち人間を、天心地胆から陰陽界、そして陰曹地府に乗り込ませる手筈を、頼みたい」

テンニは目を閉じ、そして開けた。「なるほどな」ふっと笑う。「それが必要だから、儂に白羽の矢を立てたか」

「無論、打鬼棒を操る力においてお前に勝る者はいないと踏んだからさ」キオウも微かに笑った。「だが斬って欲しいのは閻羅王だ。あいつが陽世に出張ってくるのを待ってもいられない」

「そういうことだな」テンニは頷く。「確かに我々降妖師には、秘術中の秘術として天心地胆を破壊し陰陽の壁に穴を穿つという法術が伝えられている。だがよく調べたものだ、その門外不出の術の存在を」

「閻羅王を、斃す」キオウは今一度、その強き決意を告げた。「その為ならば、ほんの糸屑のような情報であってもたぐり寄せ宝を掴み取る。俺はその為に今生きているのだ」

「……」テンニはもう何も言葉を返さなかった。

キオウの身に起こった事情が何であったのか、まだ知らない。

この先も知ることはないのかも知れない。

だが、自分は契約したのだ。

ムイを受けとる。

その代わりに、閻羅王を殺す。

それだけが守られれば、後のことは知らずともよい。

この頭目を信用してもよいのか、との想いは当初在った。

だがムイを要求し応えられたことで、ひとまず疑いは脇に退けておかれることとなったのだ。

自分がそれほどまでムイの確保に必死だったというのもあるし、いざとなればいつでも逃げ出すことが、自分にはできるという自負もあったからだ。

数に物を言わせる山賊どもには多少てこずるかも知れないが、この若き鬼、キオウに対して、テンニは恐れなど微塵も感じていなかった。

無論それは打鬼棒の力が自分にはあるからだ。

それにキオウ自身には、そんなに強い力が備わっているとも思えなかった。

ただフラの存在と、山賊どもを纏め上げる才、それが今のキオウの地位を築いているものと思われる。

単に一匹の鬼、模糊鬼として見る限り、キオウほど華奢で弱々しく突付ただけで消滅してしまいそうな鬼を、テンニはこれまで見たことがなかった。

若輩、という言葉だけで表現できるものでもない。

本当に、どこがどうというのでもないが、思わず目を細めて見てしまうほどキオウの立ち居姿は危うげなものに見えるのだ。

どこか、支えていてやらねば今にも砕け散ってしまいそうな、そう――

可哀想な、奴だ。

どうしてそう思うのかよくわからないのだが、その言葉がもっともしっくり来る。

可哀想な奴だ。

まあ、いい。

テンニは肩でふう、と息を吐いた。

閻羅王退治とムイ。

それだけだ。

「聡明鬼の住処の予測はつくと言ったな」キオウが訊く。「その場所を教えてくれ」

「わかった」

「地図を」キオウの命が下されると賊はたちまち走りそれを用意する。

龍馬という妖獣の力を抜きにしても、この求心力はやはり見事な才だ――テンニは手下が地図を持って来るまでの間そんなことを改めて思った。

そして彼は、聡明鬼の治める町と、人伝にその土地爺が住処としているらしいと聞く山の麓近くに印をした。

「なんでもこの町の役人は土地爺である聡明鬼に用事を伝えるたび、ほぼ一日がかりで車を走らせなければならないという。恐らく土地爺の屋敷の他に住む者もないような辺鄙なところだろうから、行ってみればすぐに見つかるだろうよ」

「ああ」キオウは地図を丸めて懐にしまい込んだ。

「それじゃあ儂は、例の“秘策”に使う為の法具を集めに行ってくるでしょう」テンニは頭目にそう告げ、天幕を出た。

キオウは黙って頷き、その背を見送った。



「リューシユン様」扉の外から呼ぶ。

返事はない。

幾度か名を呼び、扉を叩く。

やはり返事はない。

特にため息をつくようなこともしない――もう、しなくなった。

スンキは鍵を取り出し、扉の鍵穴に差し込んで回した。

「失礼致します」言って、扉を開ける。

すぐに主人の寝姿が床の上に見えた。

無骨で浅黒い手足を大の字に広げ、幼児のように無防備な格好で眠りこけている。

「リューシユン様」その寝姿を見下ろしながらスンキは声をかけた。「起きて下さい」

「……ん」主人は薄く目を開けた。

「昨夜はまたどちらへいらしていたのですか」スンキは見下ろしたままで訊いた。

「……」リューシユンはしばらくぼんやりとスンキの顔を見上げていた。

「酒の匂いがしますね」スンキは続けた。「またお友達と呑んでいたというわけですね」

「……うん」リューシユンは観念したように認めた。

スンキはここで初めてため息をついた。「ご親交を深めるというのは、土地爺の仕事にとっても益になるものですし、よいことだと思います。ただ、やはり土地爺である以上は、節度というものも弁えていただかないと示しもつかずよろしくないのではないかと」

「……今日」リューシユンはもごもごと言った。「誰か、来るの？」子供のような訊き方だ。

「本日お約束はございません」スンキは約束のないことが不服であるかのような言い方で答えた。「ですが、不意の来客ということもないわけではございませんからね」

「……」リューシユンはやっと上体を起こした。「……」しばらく物も言わずに座り込んでいる。

「さあ、厨房へ行ってください」スンキはいつもの決まり文句をつないだ。「昼食ができております」

「昼かあ」リューシユンはのろのろと窓の方を見た。

確かに、日はすっかり高く昇りきっている。

「皆、俺のことどう思っているのかな」廊下を歩きながら、不意にリューシユンはそう呟いた。

「え？」スンキは後ろについて歩きながら、思わず目を丸くした。「何故ですか？」

「いや……」リューシユンの声はくぐもる。

「確かに好き勝手ばかりして仕事に差し支えることが多いと思わないこともないでしょうけれど」スンキは冷静に述べる。

リューシユンは眉を八の字にして肩越しに振り向いた。

「でももうとっくに、慣れてしまいましたからね」スンキは歩きながら肩をすくめた。「今更、だからリューシユン様はよくないとか改めて欲しいとか、そこまで思う者はいないでしょう、この屋敷には……そして恐らく、この町にも」

「……」リューシユンは肩越しにスンキを見る目を、大きく見開いた。

もっと冷酷な言葉が突き刺さってくるのだろうと思っていたのだ。

「リューシユン様」スンキが小首を傾げて主人を見上げる。

「うん？」

「厨を通り過ぎましたよ」立ち止まり、スンキは冷たく言い放った。「どちらへ行かれるのですか」

「あ」リューシユンは慌てて向きを変えた。

厨に入ればいつものように使用人たちが揃って立ち、主人に挨拶をする。

リューシユンも照れ臭そうに笑いながら、寝坊を謝り席につく。

温かい飲み物が新しく注がれ、作りたてのように湯気の立つ料理、冷たく冷やされた果実、そういったものが並べられる。

リューシユンは、人間と同じものを鬼が食事できることを、今更ながらありがたいことだと思った。

料理だけではない。

鬼である自分を、人間たちが人間と同じよように尊重し大事にしてくれる、守ってくれることに、感謝を覚えていた。

例えばもし、スンキが女降妖師であったならば、今朝の時点で自分は、あの寝室にて寝首を搔かれていたとしても不思議ではない。

けれど実際のところ、今までもこれから、リューシユンがそんな心配をすることなど一瞬たりともありはしないのだ。

まったく何の疑いもなく、リューシユンは彼らを家族だと思って生きていた。

やはり、鬼ではない、からなのだろうか――

そうかも知れない。

だがそれだからこそ尚更、人間と鬼が――陽世と陰府との間で壁が崩れ、戦渦にまで至るなど、決してさせてはならないと強く思う。

閻羅王に力を貸す者――早く、一刻も早く、見つけ出さねばならない。



「リューシユン様」扉の外から呼ぶ。

返事はない。

幾度か名を呼び、扉を叩く。

やはり返事はない。

「失礼致します」言って、扉を開ける。

主人の姿はどこにもなかった。

スンキはため息をついたりしなかったーもう、しなくなった。

子供のような土地爺ではあるが、もし誰かが訪問する予定であれば、その約束をふいにしたり無視したりしてまで好き勝手にすることは決してない。

ここにいる人間たちがリューシユンを慕っているのは、リューシユンがそういう鬼だからだ。

「お怪我などなさないように、ご主人様」スンキは呟きながら開け放したままの窓に近づき、それを閉めようと腕を伸ばした。

不意に空が曇る。

窓越しに空を見上げる。

頭が龍、体が馬。

巨大な妖獣が、日を遮り空に浮かんでスンキを見下ろしていた。

聡明鬼 1

<http://p.booklog.jp/book/105294>

著者：葵むらさき

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aomra/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105294>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105294>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ